# 奈良国立文化財研究所年報

1998-Ⅲ

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1998-Ⅲ

奈良国立文化財研究所

# 1997年度のおもな調査

**第274次調査区全景(北から)**
中央左上より右下に延びる高まりが宮東面大垣SA4340、左端の溝が東一坊大路西側溝SD4951、大垣の右側が宮内基幹排水溝SD3410。このほか、大垣の瑞地部分では、掘立柱建物5棟を検出した。画面中央部に、大垣を横断する開渠溝SD17650(検出途上)がみえる。SD17650は奈良時代中頃まで機能しており、この部分の大垣はとぎれていたと考えられる。SD3410の右隣は昨年度の第273次調査区。本文4頁参照(撮影／牛嶋　茂)

**二条条間路北側溝(第281次調査)**
二条条間路のうち、阿弥陀浄土院と推定されている左京二条二坊十坪南側部分の調査。北側溝は東西ほぼ1町ぶんにわたって調査し、木簡をはじめとする多量の遺物が出土した。当初硬いシルト層を深く掘り込んだ溝であったが、坊間小路との交差部分は奈良時代後半に一度埋め戻され、その上に門が築かれている。これにあわせて板と杭でつくられた護岸をともなう浅い溝に改修された。本文56頁参照(撮影／佃　幹雄)

**第280次調査南地区（西から）**
東院庭園・隅楼の全景。これまでの調査で建物の存在をつかんでいたものの、本調査では八角形断面の柱根を新たに2基検出し、極めて特異な柱配置をもつことを確認した。東西2条の柱列は布掘状にみえるが、本来は独立した柱穴である。このほか、隅楼建設前には園池からの排水路が設けられていたことなどがわかった。本文16頁参照
（撮影／杉本和樹）

**東院園池南岸建物・掘込地業の断面（第284次調査・西から）**
東院園池南岸建物SB17700の北側柱列は、幅2.5m、推定長さ19m、深さ1.5mにおよぶ大規模な布掘地業をともなう。下部にある人頭大の石は、奈良時代前半の南岸建物SB17582にともなう下層園池の石敷SX17705に由来するもの。また、上部にみえる石敷は、SB17700廃絶後に園池南岸を飾った洲浜SX17710である。本文26頁参照（撮影／佃　幹雄）

**ガラス坩堝蓋**
砲弾形ガラス坩堝にともなう蓋の内面。いずれも直径10cm前後の円盤に復元でき、本来は頂部に長方形のつまみがつく。内面には鉛ガラスが熔着し、その濃淡から坩堝の口径も復元できる。ガラス坩堝蓋は、明日香村飛鳥池遺跡でその存在が知られるようになったが、平城宮・京域での確認は初めてである。上は左京二条二坊、下は宮東院地区出土。本文52頁参照（撮影／佃　幹雄）

目　次


## Ⅰ　平城宮の調査

式部省東方・東面大垣の調査　第274次 ……4

東院庭園およびその隣接地の調査
第280次・第284次・第284補足・第283次 ……16

東面大垣（東院地区）の調査　第286次 ……37

平城宮北西隅の調査　第282-7次 ……38

## Ⅱ　平城京等の調査

右京三条一坊三・四坪の調査　第288次・第290次 ……40

左京二条二坊十一坪の調査
第289次・第282-16次・第282-10次 ……48

二条条間路の調査　第281次 ……56

左京三条一坊十四坪の調査　第282-3次 ……65

阿弥陀浄土院推定地の調査　第282-6次 ……66

左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査　第291次 ……68

東一坊坊間路西側溝の調査　第282-14次 ……70

市庭古墳の調査　第282-13次・第282-11次・第282-12次 ……71

旧大乗院庭園の調査　第285次・第287次 ……74

平城宮北方遺跡の調査　第282-17次 ……78

その他の調査 ……79


凡　例

1．本書は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1997年度に実施した平城宮跡、平城京内遺跡等の発掘調査の概要報告である。各調査報告の執筆は、各調査の発掘担当者が主におこなった。

2．発掘遺構図に付した座標値は、いずれも国土方眼第Ⅵ座標系による。また、高さはすべて海抜高で示す。

3．遺構には一連の番号をつけている。番号の前には、SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）などの記号を付した。

4．平城宮出土軒瓦・土器の編年は以下のようにあらわす（かっこ内は西暦による略年代）。平城京内等についても、この編年に準拠している。

軒瓦：平城宮出土軒瓦編年第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）

土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（725）、Ⅲ（750）、Ⅳ（765）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

5．本文未収録の調査については、巻末の「その他の調査」を参照されたい。


奈良国立文化財研究所年報　1998－Ⅲ

発行日 —— 1998年9月30日
編集発行 —— 奈良国立文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1　TEL. 0742-34-3931
印刷 —— 岡村印刷工業株式会社

# ANNUAL BULLETIN
# of Nara National Cultural Properties Research Institute
# 1998-Ⅲ

CONTENTS


## Ⅰ Excavations of *Nara* Palace Sites

- Excavation on the eastern wall at the east of Ministry of Personnel Affairs; No.274
- Excavation on the garden site and the adjacent area of East Precinct; No.280, 284, Supplement of No.284, 283
- Excavation on the eastern wall at East Precinct; No.286
- Excavation on the north-western cornor of the Palace; No.282-7

## Ⅱ Excavations of *Nara* Capital Sites and Others

- Excavation on the 3rd and 4th blocks of first ward on third street, the western sector; No.288, 290
- Excavation on the 11th block of second ward on second street, the eastern sector; No.289, 282-16, 282-10
- Excavation on the small row of second street, the eastern sector, No.281
- Excavation on the 14th block of first ward on third street, the eastern sector; No.282-3
- Excavation on the 10th block of second ward on second street, the estimated *Amida-Jodoin* in *Hokke-ji* Temple, the eastern sector; No.282-6
- Excavation on the 2nd block of second ward on third street, Prince *Nagaya's* Mansion, the eastern sector; No.291
- Excavation on the western ditch of the small column avenue of first ward, the eastern sector; No.282-14
- Excavation on *Ichiniwa*-Mounted Tomb; No.282-13, 282-11, 282-12
- Excavatin of *Daijoin* Garden Site; No.285, 287
- Excavation on the nortern part of the Palace; No.282-17
- Other Excavations


| 調査次数 | 調査地区 | 調査期間 | 面積 | 調査地 | 担当者 | 調査要因 | 掲載頁 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 274 | 6AAI-B 宮東面大垣、東一坊大路 | 97.4.1～7.25 | 1774m² | 奈良市佐紀町、法華寺町 | 山下信一郎 | 宮 | 4 |
| 280 | 6ALF-A 東院東南隅 | 97.10.1～98.1.28 | 700m² | 奈良市法華寺町 | 内田和伸 | 宮 | 16 |
| 281 | 6AFF-E·6BFK-E 二条条間路 | 97.7.1～10.16 | 870m² | 奈良市法華寺町字浄土尻 | 金田明大 | 住宅建設 | 56 |
| 283 | 6ALF-B 宇奈多理神社境内 | 97.7.1～7.24 | 68m² | 奈良市法華寺町 | 浅川滋男 | 住宅建設 | 36 |
| 284 | 6ALF-A 東院地区 | 97.7.1～10.22 | 750m² | 奈良市法華寺町 | 渡邉晃宏 | 宮 | 26 |
| 284補 | 6ALF-A 東院園池 | 97.11.10～11.28 | 8m² | 奈良市法華寺町 | 高瀬要一 | 宮 | 35 |
| 285 | 6BGN-C,D 旧大乗院庭園 | 97.8.4～9.29 | 400m² | 奈良市高畑町 | 平澤 毅 | 史跡整備 | 74 |
| 286 | 6ALE-D·6ALF-B,C 宮東面大垣（東院地区） | 97.9.8～9.12 | 77.5m² | 奈良市法華寺町 | 清野孝之 | 電線埋設(宮) | 37 |
| 287 | 6BGN 旧大乗院庭園 | 97.10.1～11.21 | 130m² | 奈良市高畑町 | 臼杵 勲 | 史跡整備 | 74 |
| 288 | 6AGF-A,B 右京三条一坊三・四坪 | 97.11.4～12.26 | 1000m² | 奈良市横領町100 | 内田和伸 | 工場建設 | 40 |
| 289 | 6AFF-E 左京二条二坊十一坪 | 98.1.8～2.3 | 182m² | 法華寺町字浄土尻287-1他 | 古尾谷知浩 | 住宅建設 | 48 |
| 290 | 6AGF-C,D 右京三条一坊三坪 | 98.1.19～3.16 | 1005m² | 奈良市横領町100 | 西山和宏 | 工場建設 | 40 |
| 291 | 6AFI-N,O 左京三条二坊二坪 | 98.1.28～2.18 | 340m² | 奈良市二条大路南 1 - 3 -18 | 小野健吉 | 店舗建設 | 68 |
| 282-1 | 6AGF-R 右京三条一坊十六坪 | 97.4.21～4.23 | 12m² | 奈良市二条大路南 5 -157- 2 | 玉田芳英 | 住宅建設 | *80 |
| 282-2 | 6AFB-N·6BFO-E 左京一条二坊十五坪 | 97.4.24～5.6 | 48m² | 奈良市法華寺町1123 | 箱崎和久 | 住宅建設 | 79 |
| 282-3 | 6AFJ-D 左京三条一坊十四坪 | 97.5.6～5.30 | 156m² | 奈良市三条大路 2 -545- 5 | 清野孝之 | 店舗建設 | 65 |
| 282-4 | 6AFJ-O 左京三条一坊二坪 | 97.6.23～6.30 | 115m² | 奈良市二条大路南 3 -189 | 加藤真二 | 住宅建設 | 79 |
| 282-5 | 6AFJ-N 左京三条二坊六坪 | 97.6.23～6.26 | 36.4m² | 奈良市三条大路 1 -635- 3 | 清野孝之 | 住宅建設 | *80 |
| 282-6 | 6BFK-G 阿弥陀浄土院推定地 | 97.8.18～9.12 | 133m² | 奈良市法華寺町434-1他 | 小林謙一 | 住宅建設 | 66 |
| 282-7 | 6ADA-B 宮北西隅 | 97.9.12～9.22 | 32m² | 奈良市佐紀町2681-1,2 | 小林謙一 | 住宅建設(宮) | 38 |
| 282-8 | 6AGF-P 右京三条一坊九坪 | 97.9.24～10.1 | 28m² | 奈良市二条大路南 4 -281-28 | 小林謙一 | 住宅建設 | *80 |
| 282-9 | 6ASA-C 宮北方遺跡（北面中門推定地の北方） | 97.10.13～10.15 | 40m² | 奈良市佐紀町2890- 2 | 井上和人 | 住宅建設 | *80 |
| 282-10 | 6AFF-D,E 左京二条二坊十一坪・東二坊坊間東小路 | 97.10.22～11.12 | 150m² | 奈良市法華寺町290-1 | 井上和人 | 住宅建設 | 53 |
| 282-11 | 6ASB-C 宮北方遺跡（市庭古墳） | 97.11.18～11.28 | 51m² | 奈良市佐紀東町2239-1 | 舘野和己 | 住宅建設 | 73 |
| 282-12 | 6ASB-C 宮北方遺跡（市庭古墳） | 98.1.13～1.20 | 21m² | 奈良市佐紀東町2239-2 | 高妻洋成 | 住宅建設 | 73 |
| 282-13 | 6ASB-A 宮北方遺跡（市庭古墳） | 98.2.12～3.4 | 120m² | 奈良市佐紀町2186 | 古尾谷知浩 | 住宅建設 | 71 |
| 282-14 | 6AFJ-Q 東一坊坊間路西側溝 | 98.2.25～3.9 | 50m² | 奈良市二条大路南2-2-28 | 高妻洋成 | 住宅建設 | 70 |
| 282-15 | 6BZT 頭塔 | 98.1.21～2.26 | 5.5m² | 奈良市高畑町 | 高瀬要一 | 史跡整備 | *80 |
| 282-16 | 6AFF-D,E 左京二条二坊十一坪 | 98.3.11～4.3 | 253m² | 奈良市法華寺町浄土尻271- 1 | 西山和宏 | 住宅建設 | 51 |
| 282-17 | 6ASA-J 宮北方遺跡 | 98.3.18～3.3 | 50m² | 奈良市佐紀町2682-1 | 高妻洋成 | 住宅建設 | 78 |

表1 1997年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査一覧表（宮は平城宮内、＊は「その他の調査」収録）

# I 平城宮の調査

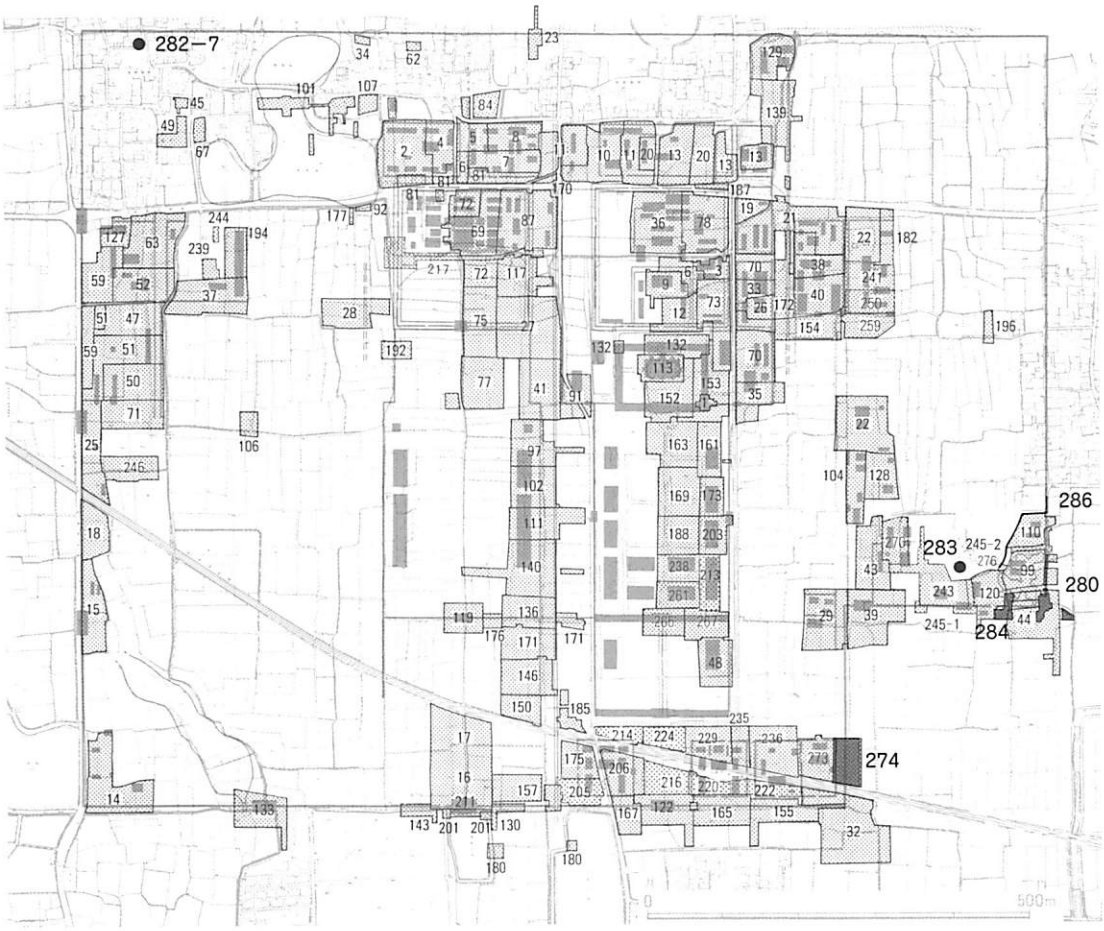



図1　1997年度　平城宮内発掘調査位置図　1：10000

# ◆式部省東方・東面大垣の調査
## ―第274次

### 1　はじめに

平城宮跡発掘調査部では壬生門（宮南面東門）東方の調査を継続的におこなってきており、奈良時代後半には式部省と神祇官が並立していたことがあきらかとなっている（第220・222・229・235・236・256・273次調査）。第274次調査は、その最終段階として、宮東南隅に近い部分で、東面大垣とその周辺の様相を解明するためにおこなった。これまでの調査によって、宮の東面には南面と同様に築地大垣が造営され、その東側に東一坊大路西側溝SD4951が、西側には宮内基幹排水路SD3410がそれぞれ南流していたことが判明している（第29・32・32補足・39・248-13次など）。

調査区は周辺から水が集まる旧谷筋地形にあたり、現在も遊水池として機能している。そのなかで、現在はつけ替えられたものの、近年まで里道として使われてきた南北方向の高まりは、大垣の遺存地形と考えられてきたため、良好な状態で検出できることが期待された。また、SD4951とSD3410から多量の遺物が出土することも予想された。さらに、これまでの調査でも検出例があるように、奈良時代前半の掘立柱塀による大垣の有無を確認することも大きな目的の一つであった。調査は4月1日に開始し7月25日に終了した。面積は約1800㎡である。

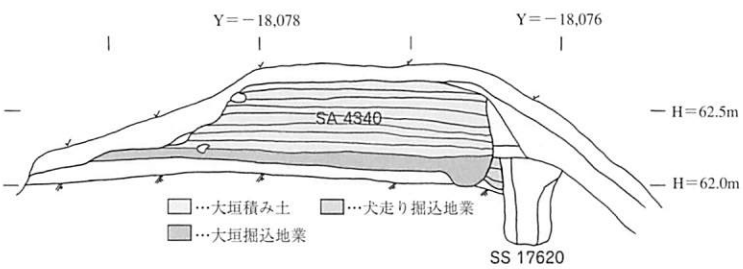



図2　東面大垣SA4340断面図（X=-145,935付近）　1：50

### 2　検出遺構

調査区の基本層序は、上から置土・耕土・床土・約70㎝の遺物包含層となっており、この下の整地土面または地山面で遺構を検出した。

奈良時代の遺構

東面大垣とその添柱および堰板溝跡のほか、掘立柱塀2条、掘立柱建物6棟、溝5条、暗渠1基、道路1条、橋状遺構1基などを検出した。

**SA4340**　東面大垣。宮の東面を画する南北方向の築地塀で、調査区北端から南端付近まで48mにわたって検出した。南端は近代の攪乱により残っていない。置土ないしは耕土直下で築地本体、築地と犬走りの掘込地業、添柱列、堰板溝跡を検出した。足場穴は削平のためか検出できなかった。築地心の国土方眼座標は、調査区北端でY＝－18,077.9、調査区中央部でY＝－18,077.8。基底幅は2.7mと考えられる。下層に掘立柱塀は発見されず、平城遷都当初から築地塀であることが判明した。後述するように、大垣を開渠で横断する東西溝SD17650との関係で3期の変遷がある。

〈第Ⅰ期大垣〉平城遷都当初に造られた築地塀。調査区中央やや北で後述する東西溝SD17650が貫流し、大垣が南北幅約6.2m開口する（開口幅は築地西側の数値。以下同じ）。築地本体は黒褐粘質土（古墳時代の堆積層）とその下の地山を最大26㎝ほど掘り下げた掘込地業の上に、径3～5㎝の礫や径0.5㎝以下の礫粒を多く含む黄褐粘質土や黄灰粘質土、暗褐粘質土などを約5㎝の厚さでつき固めたもので、残存基底幅最大2.62m、高さ最大0.7m残る。築地本体の残存が良好であるため、大垣の一工程あたりの造営長を知ることができた。水平に通る版築土の層には、南北

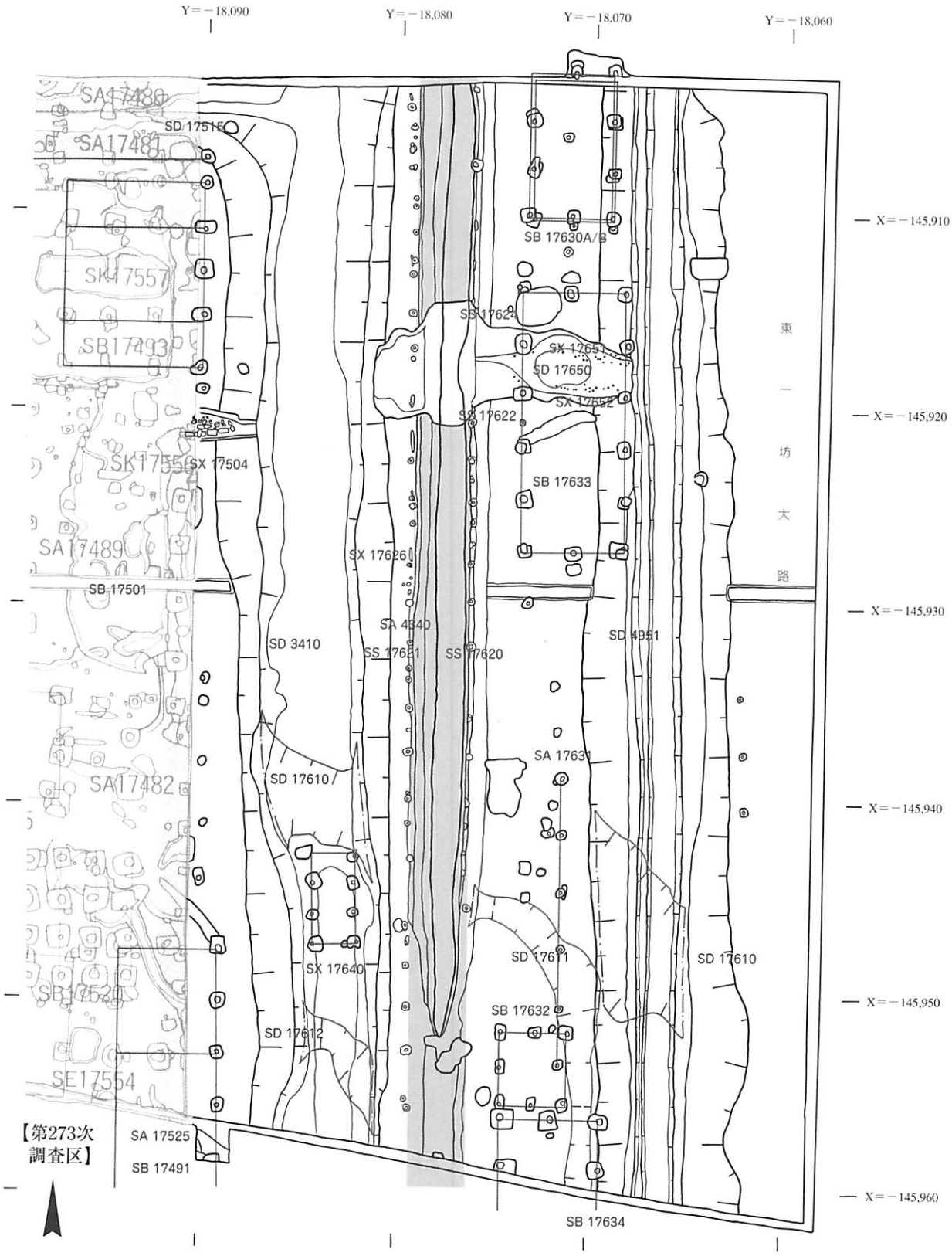



図3　第274次調査　遺構平面図　1：300

方向約2.1m（約7尺）毎に不連続面があって、その境に後述する添柱列SS17620・SS17621の柱穴がある。このことから、東面大垣における版築の施工単位は7尺と考えられる。また、犬走りの掘込地業を大垣東側で検出した。築地本体と同様に黒褐粘質土を最大28cm掘り下げ、黄褐土・暗茶褐粘性砂質土・黄褐暗茶褐混土を互層にした版築を施す。幅は最大50cm残る。築地本体の掘込地業が犬走りのそれを切っており、築地造営は犬走りの掘込地業を施したうえで、築地本体の掘込・版築をおこなったことがわかる。大垣西側の犬走りは、調査区北半部では削平されて残らず、南半部で掘込地業を最大幅15cm確認した。大垣東側の壇地部分は削平のため原状は不明だが、調査区北壁でみると壇地幅は約8.0mと推定される。

〈第Ⅱ期大垣〉第Ⅰ期大垣の開口幅を狭め、開口部以

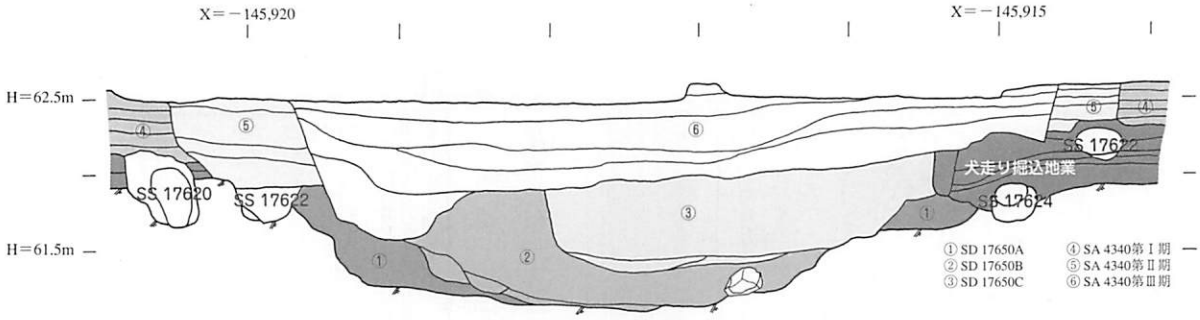



図4　SA4340とSD17650交差部分立面図（東からみる）1：50

南の築地端を北へ約1.3m、同以北の築地端を南へ約2.1mそれぞれ延伸させた大垣。掘込地業をともなわず、第Ⅰ期大垣に比べ粗雑な版築を施す。開口幅は約3.6m。

〈第Ⅲ期大垣〉第Ⅱ期大垣の開口部分を完全に埋め立てて連続させた大垣。第Ⅱ期大垣と同様に溝埋立土直上に版築を施すが、第Ⅱ期大垣に比べさらに粗雑な施工で、一層当たりの厚さは20cm前後、波状のうねりを呈する。

**SS17620・SS17621**　第Ⅰ期大垣造営時の大垣東・西の添柱列。柱穴の直径は約40cm、深さ60cm程度。両添柱列はばらつきがある。柱間寸法が約2.1m前後（約7尺）で、大垣を挟んでほぼ対になって検出した。ただし、これに合致しないものものあり、また改修にともなうものもあると思われ、それらについては判然としない。

**SS17622・SS17623**　第Ⅱ期大垣造営時の東・西の添柱。柱穴を4基検出した。

**SS17624・SS17625**　第Ⅲ期大垣造営時の東・西の添柱。柱穴を3基検出した。

**SX17626**　築地心から西1.4mの位置で検出した幅10cmの南北溝状の遺構。第Ⅰ期大垣造営時の堰板抜取溝。

**SD17650A・B・C**　調査区中央やや北にある、東面大垣を切り込むかたちとなって開渠で抜け、宮内基幹排水路SD3410から東一坊大路西側溝SD4951に注ぐ東西溝。西端の標高は61.15m、東端は60.70mと比高差は0.45mあり、水は西から東に流れる。南面大垣を抜け、二条大路北側溝へ流れるSD3410の水量を軽減するための分水路と考えられ、3期の変遷がある。

SD17650Aは当初の素掘溝で、幅5.5m、深さ1.5m。堆積土から須恵杯B蓋（平城宮土器編年Ⅰ期。以下、編年の時期のみ記す）が出土した。17650Aを埋め立て、幅を約2.9mに狭めた溝が17650Bで、築地横断部分の北岸で護岸石、南岸で護岸石抜取痕を検出した。SD17650Cは、SD17650Bを埋め立て、幅を約1.6mに狭めた溝。築地横断部分北岸で護岸石を確認したが、南岸については不明。

SD17650とSA4340の変遷だが、まず、SD17650Aはその埋立土が第Ⅰ期大垣積み土の下に潜ることから、第Ⅰ期大垣造営以前、遷都当初の開削と考えられる。次にSD17650Bは、埋立土が第Ⅱ期大垣の積み土にのるため、第Ⅱ期大垣造営後のものと考えられ、SD17650Cは第Ⅲ期大垣造営のため埋め立てられて廃絶する。なお、SD17650Cの溝堆積土および埋立土から軒瓦6225A（平城宮軒瓦編年Ⅱ-2期～Ⅲ-1期。以下、時期のみ記す）やⅢ期古段階の土器が出土しており、SD17650Cの廃絶時期は天平10年前後と考えられる。従って、平城遷都直後、築地造営以前にSD17650Aが掘られ、第Ⅰ期大垣造営後も機能し、第Ⅱ期大垣造営後はSD17650B・Cが機能したが、天平10年前後に廃絶してそれ以降に第Ⅲ期大垣が造営されたと考えられる。

**SX17651・SX17652**　東面大垣とSD4951との間、SD17650北岸・南岸に並ぶ護岸の杭列。両杭列間幅1.2m。径約10cm、長さ最大80cm以上の杭を用いる。シガラミとして直径0.2～0.3cm、長さ40～50cmの木枝を部分的に確認した。SD17650B・Cにともなう杭列護岸である。

**SB17630A・B**　調査区北端、壗地部分にある桁行3間（8尺等間）×梁間2間（7尺等間）の掘立柱南北棟建物。同一の場所で建て替えており、古い方をSB17630A、新しい方をSB17630Bとする。SB17630Bの北妻柱掘形から須恵器蓋（Ⅱ期）が出土し、共に奈良時代前半期。

**SA17631**　壗地部分にある5間（10尺等間）の掘立柱南北塀。南端がSB17632と重複する。

**SB17632**　調査区南端、壗地部分にある桁行2間(6.5尺等間)×梁間2間（6.5尺、5.5尺）の掘立柱南北棟建物。SA17631と併存せず（新旧不明）、またSB17634より古い。

**SB17633**　壗地部分にある桁行5間（両端間8.5尺。中央3間は各9尺）×梁間2間（9尺または8.5尺等間）の掘立柱南北棟建物。SD17650の廃絶後に建てられ、またSB17634と東の柱筋がほぼ揃う。

**SB17634**　調査区南端、壗地部分にある桁行2間以上（柱間8.5尺）×梁間2間（9尺等間）の掘立柱南北棟建物。南妻は調査区外に伸びる。北妻柱掘形が北接するSB17632の柱穴を切っており、より新しい。

**東一坊大路**　調査区東端で路幅約4mぶんを延長約58mにわたって検出した。路面は削平され、大路造営時の整地土を確認したにとどまる。

**SD4951**　東一坊大路西側溝。調査区北方にある小子

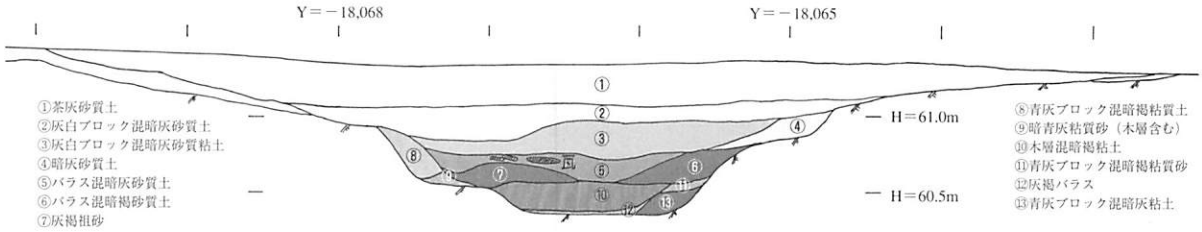



図5　東一坊大路西側溝SD4951断面図（②以下が下層堆積土）1：50

門西脇を経て宮内から流出した排水路で、東一坊大路西側溝と宮東面外堀とを兼ねた南北大溝である。調査区東部を南北に流れる。幅約6.2m（最大約7.5m）、深さ0.8～1.4m、延長約56mぶんを検出した。溝心の国土方眼座標は調査区北部でほぼY＝－18,066.6m、南部でほぼY＝－18,066.3mで、調査区南方約50mでSD4951に架かる橋SX4020における溝心（Y＝－18,064.8m。第32次調査）に比べてやや西にずれた数値を得た。護岸は検出しなかったが、西岸部分に、護岸施設の裏込めのための掘込みと思われる幅数10cmのテラス状の段を検出した。堆積は大きく上下二層にわかれる。上層は茶灰砂質土・暗茶灰砂質土で、平安時代以降の堆積。奈良時代の堆積土である下層は、幅約4m、深さ0.5～0.8m。溝は何度も改修を受けており遷都当初の堆積は残存しない。先述のSD17650を切る形で本溝が改修されていること、溝最下層出土木簡に天平宝字5年・6年の年記がみえることから、最下層が堆積することとなった改修時期は、天平中頃以降、天平宝字年間までと考えられる。堆積土は下から木屑混暗褐粘土、バラス混暗灰砂質土・灰褐粗砂、灰白ブロック混暗灰砂質粘土、灰白ブロック混暗灰砂質土の4層に大別できる。このうちバラス混暗灰砂質土層以下において、多量の遺物が出土した。

**SD3410**　東面大垣SA4340の西側を北から南に流れる宮内基幹排水路。幅6～7.8m、深さ1.1～1.3m、延長約53mぶんを検出した。SD3410に架かる橋状遺構SX17640（後述）以南では溝西岸が東に寄り、溝幅が狭まる。溝の堆積は上下二層に大別でき、上層の茶灰褐砂質土は平安時代以降の堆積。下層が奈良時代の堆積土で、幅5.3m、深さ0.65～0.8m。3～4期に区分できる。堆積土は、おおむね、下から灰褐バラス・暗灰粘土、暗灰褐粘質砂、暗灰粘質土・暗灰砂質粘土（白色粒・木屑含む）・白色粒混黒灰粘土（木屑含む）である。本溝も何度も改修を受け、平城遷都当初の堆積は残存しない。今回検出した溝最下層の年代は、軒瓦6133Da・6316F（Ⅳ期）や西大寺と記した木簡を含み、奈良時代後半と考えられる。最下層は素掘溝だが、後に小礫混茶灰褐粘質土や小礫混灰色粘質土を用いて溝幅を狭め、SX17640以南では幅3.4m、深さ0.8m、同以北は幅約4m、深さ0.6mの規模となる。原位置を保つ護岸石を調査区南端の東岸で一ヶ所確認しており、両岸に石積護岸を施したと考えられる。

**SX17640**　SD3410内にある桁行3間（約5尺等間）×梁間1間（約7尺）の橋状遺構。東北隅の柱は、北側に古墳時代の溝SD17610があるため、それを避けて桁行を1尺縮めて柱を据えている。柱根が6本残る。柱掘形は地山面で検出しており、SD3410最下層の堆積より古い。石積護岸の裏込土中に柱が埋没しており、この段階で機能を停止したと推測される。西方の第273次調査で検出した掘立柱南北塀SA17482は、本遺構と心がほぼ揃うため目隠塀とみることができ、SX17640は溝の水流を利用した便所遺構の可能性がある。

**SD17515**　調査区西北にあり、第273次調査で検出した神祇官北面築地の北雨落溝と、その北側にある宮内道路の南側溝を兼ねる溝。今回、石積護岸段階のSD3410に流入することを確認した。

**SA17481**　調査区西北にあり第273次調査で検出した掘立柱東西塀（8.5尺等間）。東端の柱穴1基を確認した。

**SX17504**　調査区西北にあり、第273次調査で西半を検出した神祇官東面築地を通る石組暗渠。今回、全体を検出した。凝灰岩4枚を底石に用いる。石組中に軒丸瓦6282Ba（Ⅲ-1期）を含む。SX17504を抜けた排水はSD17641を東流してSD3410に注ぐ。

**SB17491**　第273次調査で検出した調査区西南の掘立柱南北棟建物で調査区南方にのび、桁行4間以上（9尺等間）×梁間2間（8尺等間）であることを確認したにとどまる。

その他の遺構

**SD17610**　調査区中央部を西北から東南に流れる斜行溝。幅5.8m、深さ1.9m。SD4951およびSD3410溝底で検出した。古墳時代の溝と考えられる。

**SD17611**　調査区中央南部を流れる斜行溝。幅約2m、深さ0.3m。古墳時代の溝と考えられる。

**SD17612**　調査区西南部のSD3410溝底で検出した、断面V字形の斜行溝。幅約2.8m、深さ0.89m。遺物は出土しなかったが、形状からみて弥生時代前期の可能性がある。

（山下信一郎）

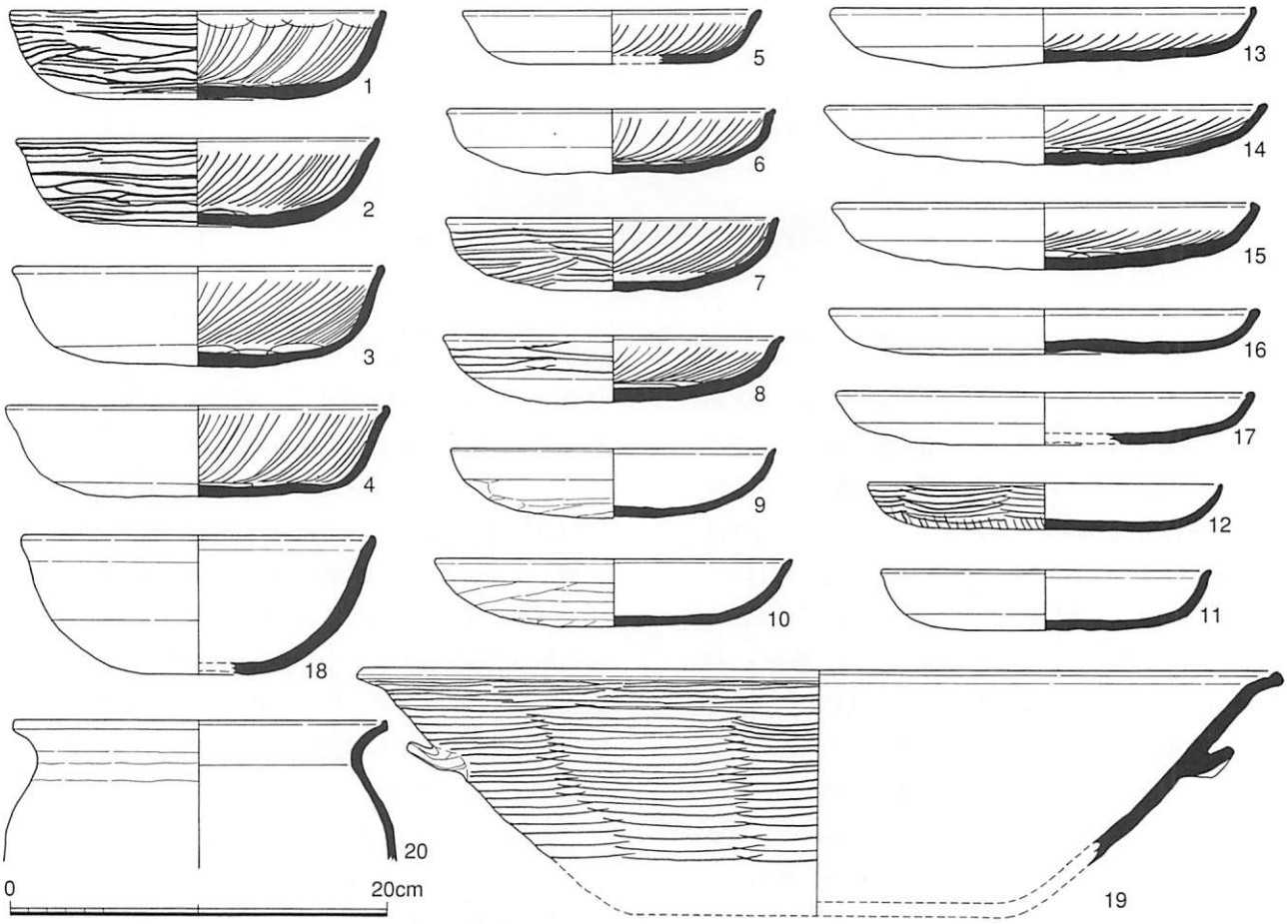



図6　SD17650出土土師器　1：4

### 3　出土遺物

土器・土製品

調査区内の溝から多量の土器が出土した。ここではSD17650出土土器を中心にして、SD3410・SD4951出土の特徴的な土器・土製品について述べる。

**①SD17650出土土器**　ほとんどが東面大垣を閉塞する際のSD17650Cの溝埋立土から出土したもので、一括性が高いと考えられる。土師器、須恵器ともに多くの機種を揃え、平城宮土器Ⅲ古段階の好資料である。

**土師器**（図6）杯A・杯B蓋・杯C・杯E・皿A・椀C・盤B・高杯・壺A蓋・甕・把手付双孔大型蓋が確認できる。全体に磨滅が著しく、調整、暗文などの観察が困難なものが多い。図示したものでは、杯Aの1点（4）がⅠ群土器である以外は全てⅡ群土器である。

1～4は杯A。1は連弧暗文をもつが、他は連弧暗文をもたない。全てa0手法で調整する。5～11は杯C。a・b手法ともに見られ、連弧暗文が確認できる例はない。7・8は口縁部外面にヘラ磨きを施す。12はC3手法で調整する杯E。13～17は皿A。a0手法で調整する。内面に放射暗文を施すが、暗文が確認できないものもある。18はe0手法で調整する鉢X。19はC1手法で調整する盤B。風化のため、内面の暗文の有無は不明。20は甕。風化が著しい。9・11・12・16・18は灯火器として使用する。

**須恵器**（図7・8）杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯E・椀B・皿B・皿B蓋・皿C・鉢A・高杯・鉢F・平瓶・壺A・壺A蓋・壺B・壺K・壺X・甕A・甕Cがある。28・35・46・53・58・63・69がⅡ群土器、29・34・39がⅢ群土器、54がⅤ群土器、43・60がⅥ群土器、24～26・30・31・33・72～76が群外の土器である以外は、全てⅠ群土器である。とくに食器類は、杯B蓋に群外の土器が一定量見られるほかは、ほとんどがⅠ群土器である。

45～59は杯A。杯AⅠ1（45～48）・AⅡ1（49）・AⅡ2（50・54）・AⅢ1（55）・AⅢ2（56）・AⅣ1（57・58）・AⅣ2（59）がある。57・59以外は底部から体部外面下半にかけてロクロ削りを施す。58の底部外面には「下」の墨書がある。38～44は杯B。杯BⅠ1（38・39）・BⅠ2（40・41）・BⅡ2（42）・BⅢ2（43）・BⅤ1（44）がある。底部外面をロクロ削りするものが多く、40の体部外面には「○」を墨書する。須恵器のうちで最も多量に出土し、その中でも口径の大きい杯BⅠが多い。21～37は杯B蓋。21～26は杯BⅠ、27～31は杯BⅡ、32～34は杯BⅢ、35は杯BⅣ、36・37は杯BⅤに組み合う。ほとんどの個体は頂部外面をロクロ削りする。28の頂部外面には「蘇□□（[蜜菓ヵ]）」の墨書があり、25・32は転用硯である。60は椀B。口縁端部を削りで面取りする。

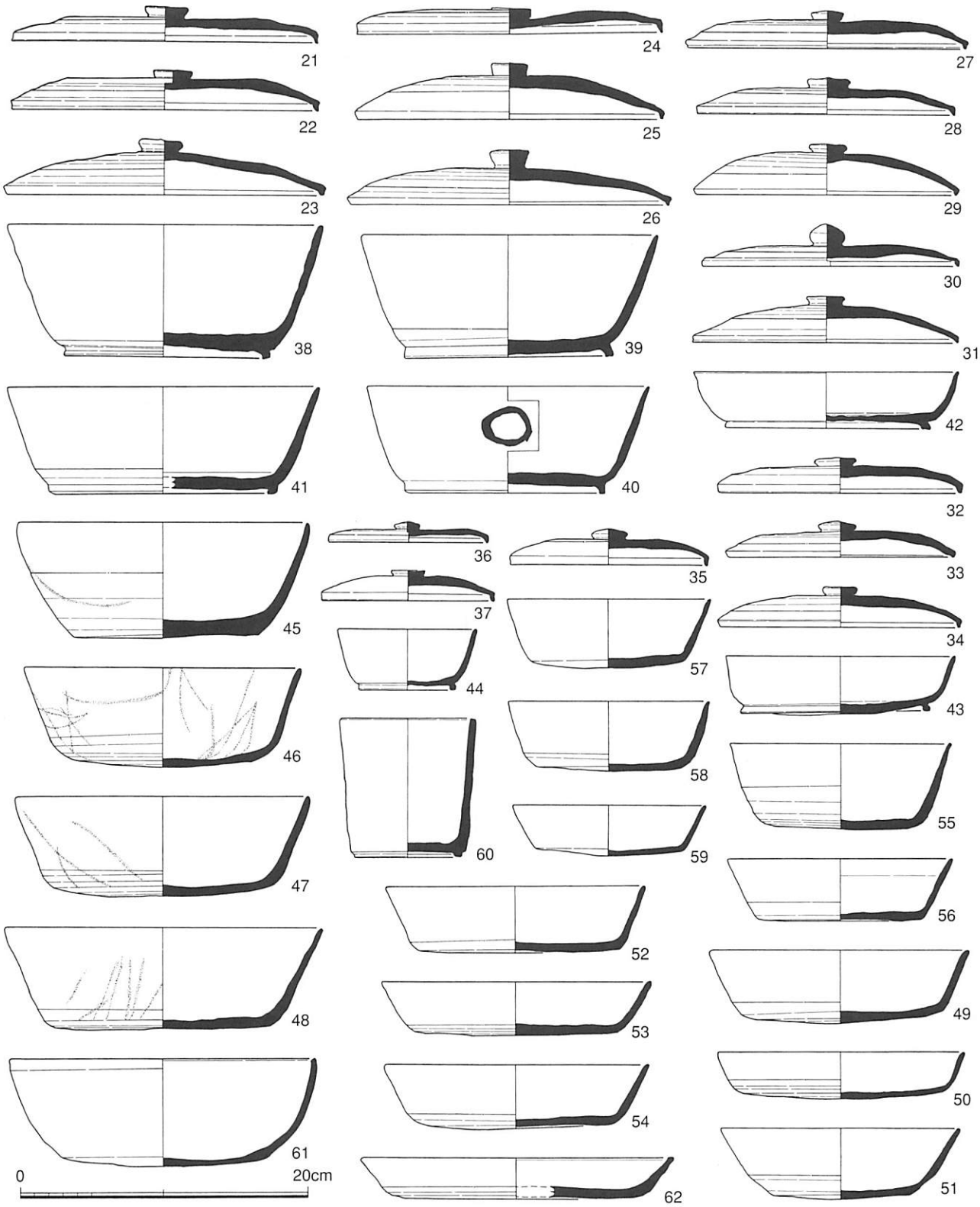



図7　SD17650出土須恵器①　1：4

61は杯E。焼成はやや不良で、底部はヘラ切りのまま。62は皿C。底部外面をロクロ削りする。65・66は皿B。底部外面をロクロ削りする。器高が5cmほどの浅い器形と、7cmを越える深い器形がある。63・64は皿B蓋。頂部外面をロクロ削りする。67は高杯。杯部外面をロクロ削りし、脚部にはヘラ状工具で透かし状の沈線を3ヶ所に入れる。68～70は鉢A。体部外面をロクロ削りし、68・70は口縁部外面を磨く。71・72は壺A蓋。73は壺Eで、全面に降灰が見られる。74・75は平瓶。体部外面をロクロ削りする。74は小型品、75は大型品で、把手をもつ。76は壺X。長胴で肩が屈曲するあまり例をみない器形で、肩部の2ヶ所に把手をもつ。77は甕A。外面に格子目叩き、内面に当具痕を残す。

**土器の構成と年代**　SD17650出土土器は、土師器は保存状態が不良なものが多いものの、須恵器は保存状態が良好で多くの器種を揃え、貴重な資料である。食器類は法

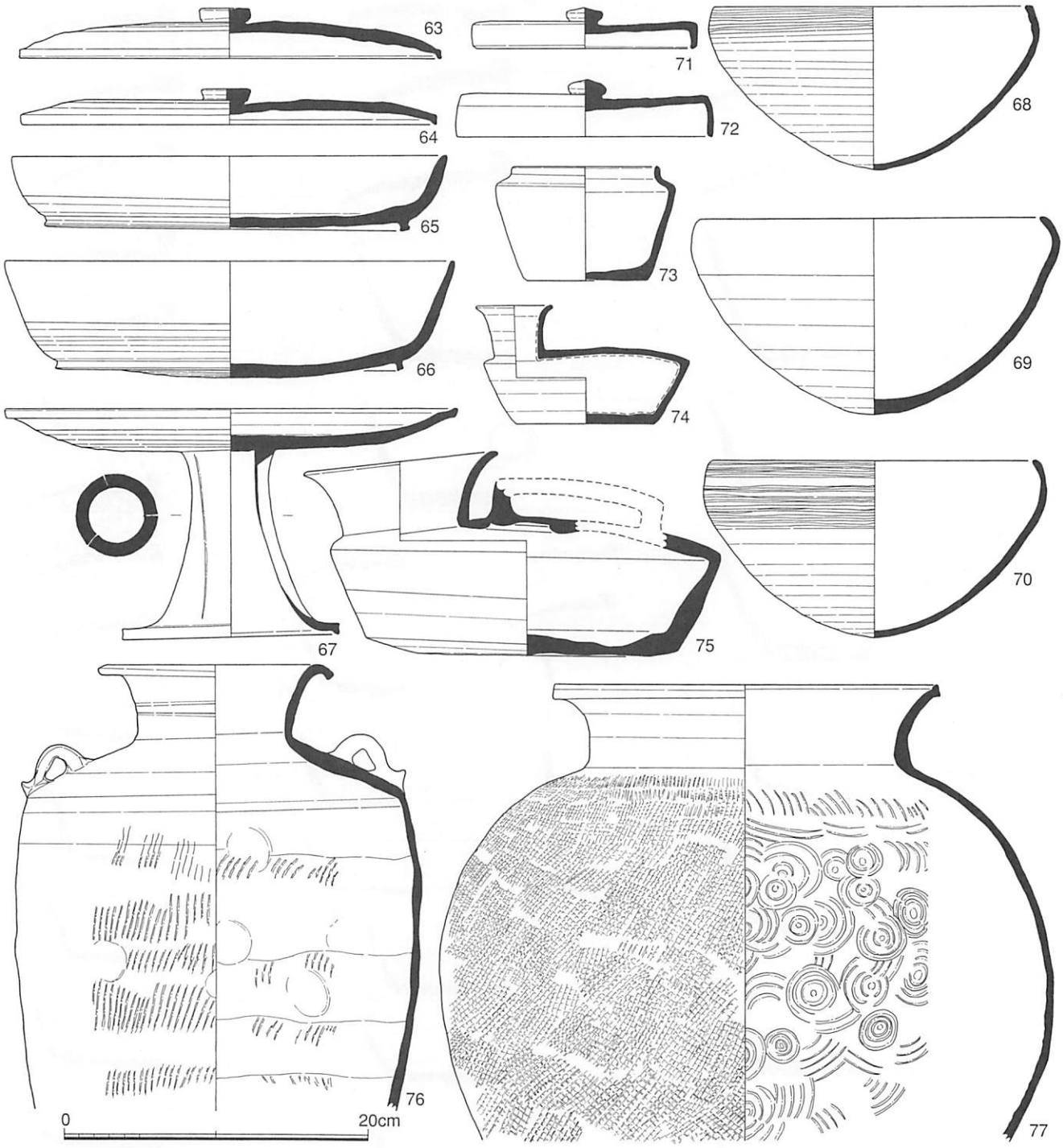



図8　SD17650出土須恵器②　1：4

量分化が厳格で、深い器形と浅い器形の双方をもち、宮廷の土器を代表するものと言える。この土器群は、土師器杯類の暗文や須恵器杯B蓋の口縁端部の形態、土師器、須恵器食器類の法量分布から、左京二条二坊、二条大路上の溝状土坑SD5100出土土器（奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995）と同じ特徴を示し、天平年間前半期（730～740頃）の平城宮土器Ⅲ古段階の年代が与えられる。これまでこの時期の一括資料は平城京内のものに限られ、平城宮内では良好な資料が出土していなかったが、今回初めて宮内での様相を示す資料を検出することができた。それとともに、東面大垣の閉塞時期を示すものとして、その資料的価値は大きい。

**②SD4951・3410出土土器・土製品**（図9）　東面大垣東西にある溝SD4951・3410からは多くの土器・土製品が出土したが、出土量はSD4951が大量であるのに対し、SD3410はやや少ない。78・79・87～85はSD4951出土、80・87～92はSD3410出土。

78は風字硯。円弧状の突帯で陸部と海部を限る。周縁をほとんど欠失する。底部には濃緑色の自然釉が厚く降着し、脚がついていた痕跡がある。79は圏足円面硯。脚部を欠失する。80は低脚円面硯。破片のため、海部の有無は不明。81は同一個体の硯の2片で、周縁に突帯を付

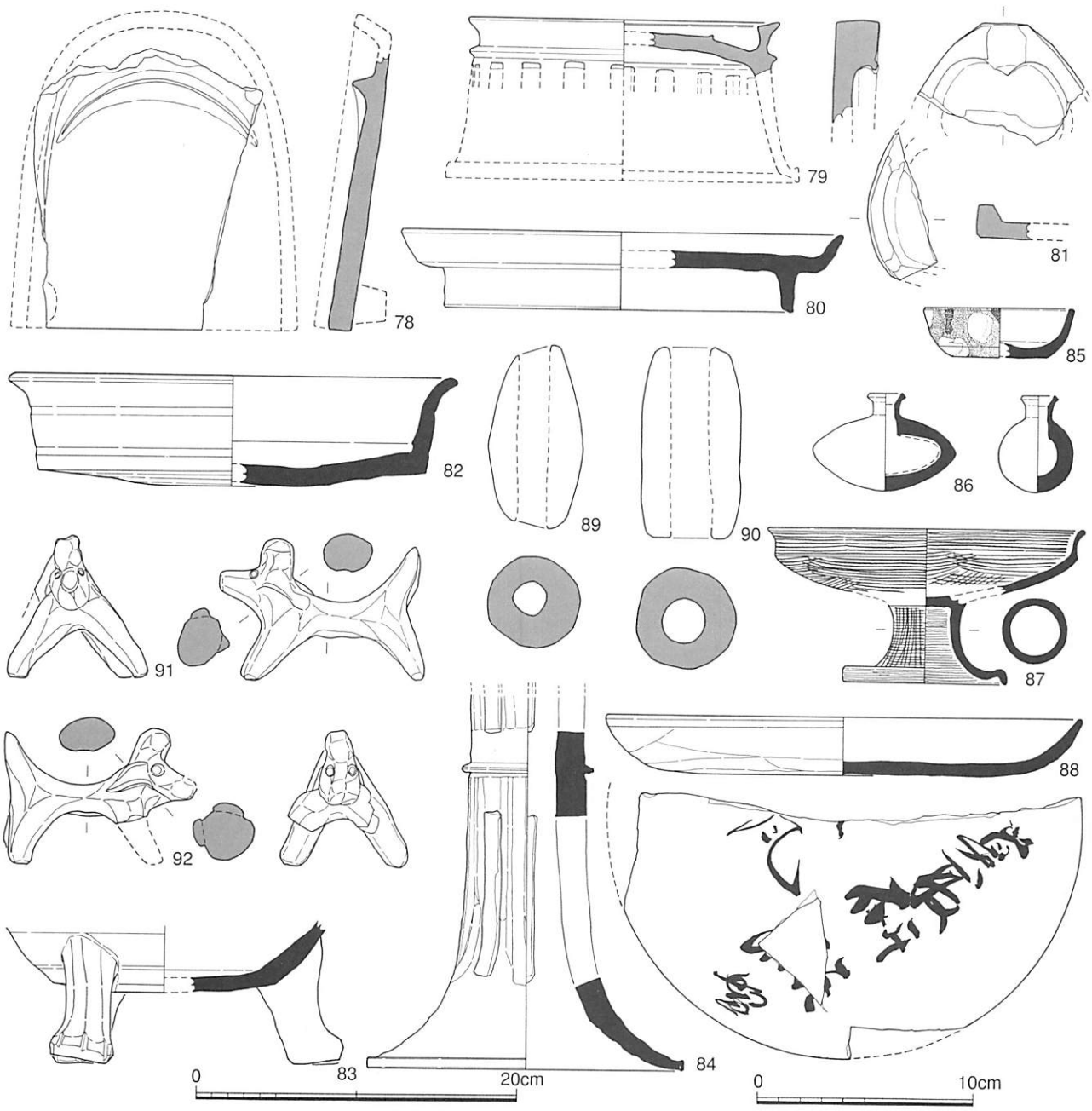



図9　SD4951・SD3410出土土器・土製品（83・84は1：4、他は1：3）

し、頂部には突起がはがれた痕跡がある。宝珠硯になると思われるが、小型の形象硯になる可能性もある。82は須恵器火舎で、内面に煤が付着する。底部外面にはロクロ削りを施すが、小破片のため脚の有無は不明。83は獣脚の付く須恵器の底部で、壺Aになると思われる。獣脚は5本指で削りで整形し、底部外面にはロクロ削りを施す。猿投窯の製品で、内面には自然釉が降着する。84は須恵器の脚。大型で全体の器形は不明。脚部中央部に突帯を持ち、その上下に3方向からの透しを2段に入れる。脚部外面には縦方向の削りを施す。85は奈良三彩の杯。口径約7㎝の小型品で、底部外面と胴部下端をロクロ削りする。外面に白、緑、褐色、内面に白色の釉を施す。86は須恵器の小型横瓶。猿投窯の製品で、自然釉が降着する。水滴として使用したもの。87は黒陶の高杯。同一個体の口縁部と脚部の破片から図上復原した。ロクロ成形で、内外面ともに丁寧な磨きを施し、黒銀色の光沢を放つ。SD2700出土の黒陶（『年報1993』）と同様のもので、舶載品であろう。88は墨書土器。C0手法で調整する土師器Ⅲ Aで、底部外面に「莫取研□盤／□風」の墨書があり、硯の蓋として使用したもの。SD4951からは他に「北僧坊」、「朝」、「□支良女」、「近衛」、「□廚」、「西」、「狛」、「茹」、「□附名□」などの墨書土器が出土した。89・90は土錘。大型の紡錘形で、穿孔がある。棒状の軸を芯として2方向から粘土を貼り合わせて成形したと思われ、粘土の合わせ目で割れているものも多い。16点出土し、SD4951出土のものが1点ある以外は全てSD3410出土である。91・92は奈良時代末の土馬。土馬は計6点出土しており、この2点は同一工人が作ったと思われる

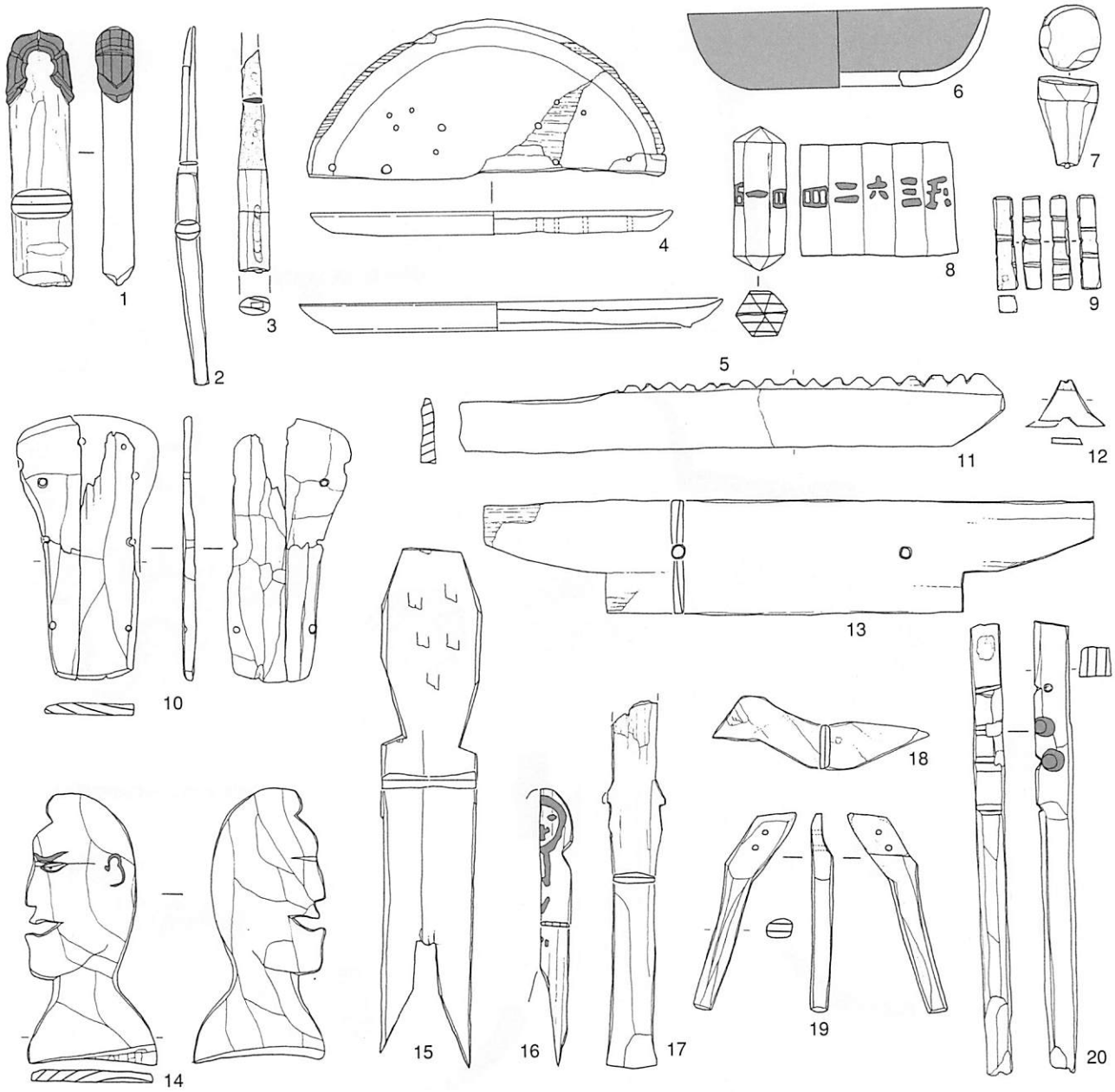



図10　第274次調査　出土木製品　1：3

同形同大のもので、近接して出土した。

その他、SD3410から墨書人面土器、小型模造竈が各1点ずつ出土した。（玉田芳英）

木製品

SD4951・3410を中心に1929点の木製品が出土した。加工板（102点；SD4951で68点、SD3410で20点）、箸状木器（349点；SD4951で321点、SD3410で15点）、棒状木器（1094点；SD4951で885点、SD3410で116点）などのほかは、比較的多種類のものが少数ずつ出土した。特記のないものはSD4951出土、ヒノキ製。1は刀装具の様。一木造りで太刀の鞘尻金具もしくは把頭の冑金を彫出し、金具部のみを墨塗りする。その他の部位は白木で削り痕以外の痕跡は確認できない。2は刀子形。一木で刀子を刃と柄を作り出す。極めて実物に近く、刀子の様の可能性もある。3は刀子。刃が残存。SD17650出土。柄は広葉樹。4・5は挽物皿。いずれも縦木取り。4には多数の穴が開けられている。補修孔であろうか。SD3410出土。5はヤナギ属。6は漆器椀。両面に黒漆が塗られているが、布着せなどは確認できない。縦木取り。ケヤキ。7は独楽。芯持材を用い、先端には鉄釘を打つ。8は賽子。一～六の漢数字を墨書。スギ。9は算木。SD17650出土。広葉樹散孔材。10は不明部材。両面を丁寧に削り、7ヶ所穿孔する。カヤ。11はすりざさら。SD17650出土。12は琴柱。SD3410出土。13は台座。同形のものが他に2点出土。SD3410出土。スギ。14～16は人形。14は横顔を切り抜いた後、目のくぼみを彫り込み、顎の輪郭線を刻んだ上、左向きの面のみ、墨で眉、眼、耳を描く。肩から下は折り取る。15は比較的大型のもの。顔面部には削り込みで目鼻を表現する。極薄い削り込みで両腕を表現するが、欠損する。スギ。16は墨書で顔を描く。左半身は欠損。17は

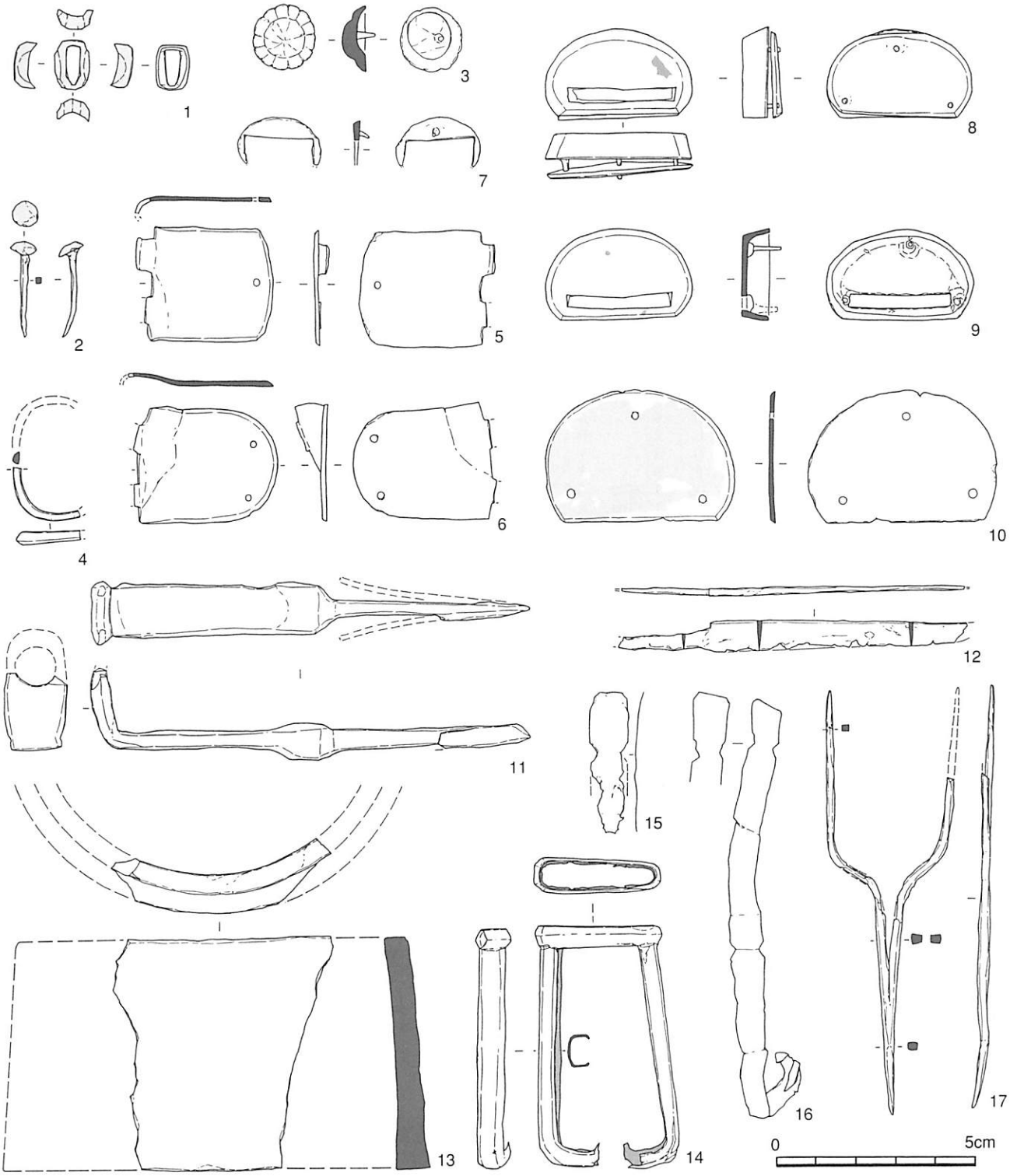



図11　第274次調査　出土金属製品（1・2・8～10・12・13・15・17はSD4951、3～7・11・14・16はSD3410、縮尺はすべて2：3）

太刀形。鍔と柄部が残存。18は鳥形。19は馬形もしくは牛形の脚部。胴部に木釘で固定する。これに対応する胴部としてはSD5100出土の牛形（奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995のPh.245）に類似するものを想定できる。20は火きり臼。スギ。　（加藤真二）

金属製品

SD3410・SD4951からは、和同開珎・万年通寶・神功開寶の銭貨とともに、多様な金属製品が出土した。1は金銅装刀子把口金具。側面の刳込みは正倉院北倉三合鞘御刀子にみられる形制である。2は金銅鋲。3は銅飾鋲で半球形の鋲頭に十三花を刻む。4～10は銅鋳帯金具。4は鉸具の弓金具、5・6は鉸板、7～10は丸鞆である。10は金銅装の裏金具で、幅4.7cm、高さ3.3cmの大型品。11は鍵(海老錠)牡金具。バネ軸が1本1段でバネが横位置につく形式のもの。バネと弦通し孔の上半を欠く。12は両面平造りの刀子。13は筒状鉄製品。東三坊大路東側溝、右京八条一坊十一坪で類品が出土しており、車軸受金具と推定される。14は銅大刀装具。鞘尻もしくは柄頭

| 軒丸瓦 | | | | | | 軒平瓦 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 |
| 6133 | A | 1 | 6282 | B | 7 | 6572 | A | 1 | 6666 | A | 1 |
| | B | 1 | | Ca | 1 | 6641 | Ab | 1 | 6667 | C | 1 |
| | Da | 1 | | G | 1 | | C | 2 | 6681 | B | 3 |
| | K | 11 | | I | 4 | | E | 1 | | C | 3 |
| 6134 | A | 2 | | ? | 3 | | F | 1 | 6682 | A | 12 |
| | B | 1 | 6284 | A | 2 | | ? | 1 | 6685 | A | 2 |
| 6135 | A | 6 | | E | 6 | 6642 | A | 3 | | C | 1 |
| | B | 3 | 6291 | A | 5 | | C | 1 | 6688 | A | 2 |
| | C | 1 | | C | 2 | 6643 | B | 1 | 6691 | A | 3 |
| | E | 1 | 6304 | L | 1 | | C | 2 | 6694 | A | 1 |
| 6138 | B | 2 | 6308 | A | 2 | 6646 | A | 1 | 6702 | A | 7 |
| 6151 | A | 1 | | B | 1 | 6647 | B | 1 | 6714 | A | 1 |
| 6225 | A | 13 | | D | 1 | | D | 1 | 6721 | C | 7 |
| | C | 5 | | N | 5 | 6663 | A | 5 | | Da | 2 |
| | L | 1 | 6311 | A | 8 | | C | 9 | | Fb | 1 |
| | ? | 1 | | Ba | 5 | | H | 6 | | G | 9 |
| 6227 | A | 1 | | C | 1 | 6664 | C | 2 | | H | 9 |
| 6235 | ? | 1 | | F | 1 | | D | 5 | | I | 1 |
| 6275 | A | 1 | | ? | 3 | | F | 9 | | ? | 3 |
| | H | 1 | 6313 | A | 7 | | Gb | 1 | 6732 | A | 1 |
| 6278 | ? | 1 | 6314 | B | 1 | | K | 1 | 6760 | A | 1 |
| 6279 | Aa | 1 | 6316 | F | 1 | | I | 1 | | B | 3 |
| 6281 | B | 1 | 型式不明 | | 66 | | L | 2 | 型式不明 | | 21 |
| 6282 | A | 1 | | | | | ? | 1 | | | |
| 軒丸瓦計 ※三彩1点含む | | | | | 193 | 軒平瓦計 | | | | | 154 |

| 丸瓦 | | 塼 |
|---|---|---|
| 重量 | 2,547.0kg | 114.4kg |
| 点数 | 18,578 | 171 |
| 平瓦 | | 凝灰岩 |
| 重量 | 6,656.3kg | 8.6kg |
| 点数 | 41,966 | 9 |

| 道具瓦・その他 | | | |
|---|---|---|---|
| 鬼瓦 | 6 | 刻印「修」 | 13 |
| 面戸瓦 | 6 | 「理」 | 1 |
| 隅木蓋 | 1 | 「中」 | 1 |
| 緑釉隅木蓋 | 1 | 「真依」 | 1 |
| 隅切瓦 | 4 | 「乙万呂」 | 1 |
| 箆書瓦 | 5 | 刻印瓦 | 1 |
| 熨斗瓦 | 6 | 瓦製円盤 | 1 |

表2　第274次調査 出土瓦塼類集計表

の金具。I字状の銅板を角丸形に折り曲げて覆輪とし、約金は鑞接した可能性がある。15・16は銅製人形。16はほぼ完形で長さ14.2cm、側縁の2ヶ所に左右から三角形の切込みを入れ末端に肢をつくる。17は叉状鉄製品。なお、両溝およびSD17650より鉱滓と鞴羽口が、SD4951からは糸状の銅切り屑が出土しており、周辺に鋳造・金属加工に関わる施設の存在が窺われる。　（次山　淳）

### 瓦塼類

瓦塼類は調査区内から大量に出土しているが、SD4951とSD3410からの出土品がほとんどで、元来どの遺構に葺かれていたかを知ることは困難である。注目されるものとして、SD4951灰白ブロック混暗灰砂質粘土層から、東院やその周辺で散見される緑釉軒丸瓦6151Aが出土した。また、SD4951灰白ブロック混暗灰砂質土より多量の平瓦が出土したが、これらはいずれもやや大ぶりで、凹面に模骨痕があり、布綴じ合わせ目が認められるものも存在する。粘土紐痕跡がみあたらないことから、粘土板桶巻き作りによる製品である可能性が高い。　（清野孝之）

### 木　簡

木簡は、SD17650から1,047点（うち削屑945点。以下同じ）、SD4951から3,018点（約2,600点）、SD3410から83点（63点）出土した。いずれも出土地点近くや上流の平城宮内から投棄され、調査区で堆積した木簡が多いと考えられ、特定の史料群を形成しない、多様な内容をもつ。ただし、SD4951出土木簡には東一坊大路上から投棄されたものも含まれ、SD17650・SD3410出土木簡と性格を異にする側面がある点を考慮すべきだろう。

SD17650では、ほとんどSD17650B・Cの堆積層から木簡が出土した。時期的には郡里制からほぼ郷里制の時期におさまる奈良時代前半で、養老3年や同5年の年記木簡を含む。内容的には、伊豆・美濃・隠岐・伊予などの荷札や、人名を記載した木簡などが多い。①は内蔵寮が後宮女官の内侍の牒によって、絁、布、糸を支出、某所に進上した際の送り状である。内蔵寮は中務省に属して天皇の宝物や日常の物品を掌る官司。あるいは衣服を縫製するために材料を縫殿寮に進上した際の木簡か。その他に「中務省解」と記した削屑が出土している。

SD4951では、最下層の木屑混暗褐粘土層とその上のバラス混暗灰砂質土・灰褐粗砂層を中心に木簡が出土した。時期的には、出土荷札がいずれも郡郷制下のものであること、最下層に天平宝字5年や同6年の記年木簡を多く含むことから、SD4951出土木簡は、おおむね、天平宝字年間以降の奈良時代後半と考えられる。但し、年記が先の2ヶ年に偏る点はやや注意を要しよう。内容としては、食料・布・銭など物品を請求する木簡、伊勢・伊豆・安房・若狭・越前・出雲・播磨などの荷札、板・瓦など造営に関する木簡、銭の付札などがある。③は「草湯」の材料を請求した木簡。「草湯」が煎じ薬であるならば、請求者の吉田古麻呂は、吉田宜の子で奈良時代後期から平安時代初めにかけての医家として知られる吉田古麻呂と同一人とみなせよう。請求先は典薬寮か。④は酒の進上木簡。元日付けで珍しく、正月の饗宴儀礼に供する酒に関わるものか。同文で形状・書風がやや異なる木簡がもう一点出土している。⑤は6人の名前を連ねた歴名。そのうち「畠賢達」と「子部人主」は造東大寺司写経所に出仕した人物として、「紀東人」は藤原仲麻呂の資人として、それぞれ天平勝宝年間の正倉院文書に散見する人物名と一致する。同一人とみて時期的にも齟齬はないだろう。⑥は出雲国の荷札。「前分」は文献的には貢納物を収納する際の役人の手数料と言われるが、木簡の「前分」の語義については未詳。平城宮で「前分」と記した荷札木簡が出土したのはこれが初めてで注目される。⑦は嶋坊の倉の

第二七四次調査出土木簡

東西溝SD一七六五〇

①　内蔵出絁十四疋　上総布十端　糸卅絇
　　凡布十端　布四十□　右依内侍牒進　【端ヵ】　202・32・1　011

東一坊大路西側溝SD四九五一

②・謹解申請給布事　合一「□□□□□」（異筆2）　210・22・2　011
　・請請食常　治部□□□□□□□
　　「□　□」（異筆1）

③・草湯作料所請如前　160・29・2　011
　・四月十七日吉田古麻呂

④　進酒捌升壹合正月一日茨田嶋国　218・28・5　011

⑤・　伊勢部吉成　畠賢達
　・書生子部人主　大資人紀東人　四月廿六日　安倍永年　湯坐三□
　　合漆人　294・24・2　011

⑥　出雲国仁多郡　横田郷前分一籠
　　天平宝字□　126・31・5　032

⑦・○嶋坊北一倉匙　77・28・7　061
　・○「不得預」

⑧・○貫民領木劦進徳
　・○一千文　天平宝字六年十月　100・17・6　011

⑨・□妻善妻娶時来
　・□眼見眼見不如手作　(145)・20・9　019

宮内基幹排水路SD三四一〇

⑩　西大寺元興寺□□供養　202・24・3　033

匙（鍵）のキーホルダー木簡。嶋坊の所在地については、調査区の東北方約500mに位置する法華寺（阿弥陀浄土院）の嶋院に比定するのも一案であるが、確言はできない。⑧は銭の付札。宮内の第104次調査（昭和52年度）で天平神護2年の年記を有する形状類似の木簡が出土している。

SD3410では、主に最下層の灰褐バラス・暗灰粘土層から出土した。⑩は西大寺・元興寺での仏事における「供養」（供物を捧げること。ないしはその供物）に関わる物品の付札と思われる。下端を尖らせ中央やや下に切り込みを入れるやや異型の木簡である。　（山下信一郎）

## 4　まとめ

今回の調査によって、東面大垣を中心とする宮東南隅地区の様相の一部があきらかとなった。奈良時代前半における式部省東官衙の東限を画する塀などの遮蔽施設は検出しなかった。また、第273次調査では、奈良時代後半の神祇官東門SB17501と神祇官東面築地塀SA17525を検出しているが、今回、東門に面してSD3410に架かる橋や大垣棟門などは検出しなかった。

今回の調査の最大の成果は、東面大垣の残存状況がきわめてよかったため、その正確な位置、築地施工単位などについての知見をえることができた点と、下層には掘立柱塀が存在せず、当初から築地であることが明確になった点である。そのなかでも、奈良時代前半に東面大垣が開口していた事実は注目に値する。既に南面大垣では、第133次調査（昭和56年度）のSD10250、第157次補足調査（昭和62年度）のSD3715など二条大路北側溝へ通ずる開渠溝があり、大垣が開口することが知られていた。今回、東面大垣では初めて類例を検出したわけであり、今後、大垣の遮蔽施設としての性格について、より一層の注意が要請されることとなった。

また、SD17650は、宮内の排水処理技術の観点からも興味深い。通常、SD3410の排水は南面大垣を抜けて二条大路北側溝に流入して東流し、二条大路・東一坊大路の交差点でSD4951に合流して南流する。しかし、大極殿以南の東半分における排水が集中するという調査区の地形的条件を考慮すれば、実際にはSD3410が排水を処理できず、宮内東南隅部分や二条大路北側溝との合流部で氾濫してしまう状況が容易に窺える。遷都当初、これを考慮してSD3410の排水の一部を直接SD4951に導くバイパス溝を開削するという手法を案出した点は、宮都造営技術の一端を探る上で注目されるものと言えよう。しかし、天平年間前半頃に溝を埋め、築地を連続させた原因はあきらかでない。溝を埋めたのが恭仁遷都直前であるという時期も考慮しなければならないが、原因としては、SD3410が南面大垣を抜ける排水処理施設の改変や、式部省東方官衙における排水処理対策による対応、開渠であることによって生じる宮城警備に対する問題などを考えることができるだろう。それらの解明は今後の課題としたい。　（山下信一郎）

# ◆東院庭園地区およびその隣接地の調査
## ―第280次・第284次・第284次補足・第283次

### 1　はじめに

平成９年度は東院庭園復原事業の最終年度にあたり、工事の進捗にともなって、第44次（昭和43年度）・第99次（昭和52年度）・第120次（昭和54年度）の各調査時には、里道や用水路、畦畔であったため、未発掘となっていた部分の調査が必要になった。また、庭園の景石据付状況や岬の築成状況を解明する最後の機会となった。このようなことから、庭園内では第280次、第284次、第284次補足の３ヶ次におよぶ調査をおこなった。一方、東院庭園に隣接する宇奈多理神社の門小屋・座小屋の建て替えにあたり第283次調査を実施した。ここではこの４つの調査について報告する。

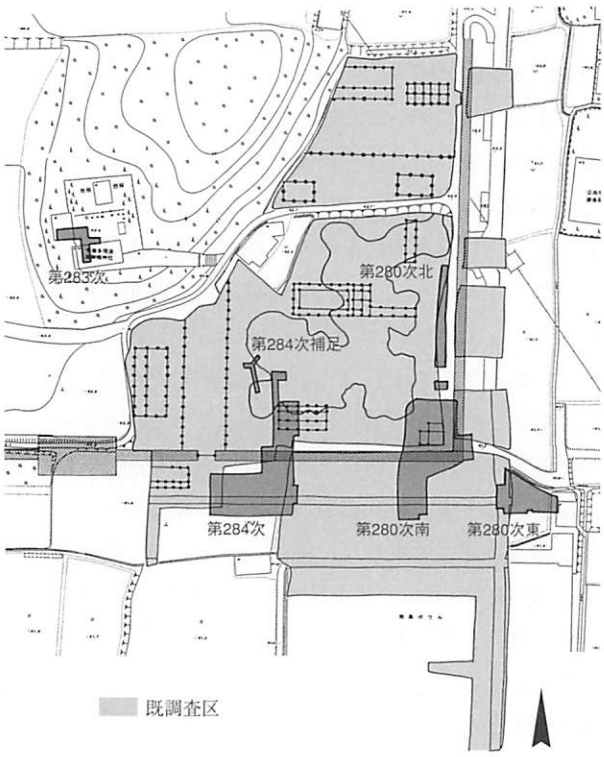



図12　発掘調査位置図

### 2　第280次調査

調査区の概要

本調査区は南地区・北地区・東地区の３ヶ所に分かれる。南地区は東院東南隅を含む第44次調査時に里道となっていた部分（460㎡）、北地区は庭園内の東面大垣西側で第99次調査時に里道となっていた部分（85㎡）、東地区は東二坊坊間路と二条条間路交差点北部の未発掘地（155㎡）で、３地区合わせて700㎡となる。調査期間は10月１日より１月28日である。

南地区の遺構

南地区は、第44次調査で隅楼と呼ぶ楼閣状の建物遺構を含み、里道のために一部不明であった建物の全容解明を最大の目的とした。検出した遺構は大きく４時期に分かれる。

〈A期〉

**SD17760**　南地区北東部の一部および北地区の断割で西岸を検出した南北溝。調査区北端近くでは整地土に覆われている。深さは約0.4m、東岸の位置は本調査区では不明。ただし、本調査区の北にあたる第271次調査（平成８年度）では両岸を確認しており、幅は3.1mほどと考えられる。本調査区の西岸の位置は第271次に比べ約50cm西に寄っている。

**SD17761**　上層園池SG5800Bの池尻付近から庭園東南隅に向かう斜行溝で、SG5800Bの礫敷が覆う。溝の東南端では幅約1.5m、深さ約0.4m。南北溝SD17760との合流部は堆積層が互層になっており、この２つの溝は同時に存在していたと考えられる。

**SD17580**　素掘りの東西溝。後述するSA5915の南端部に設けた南北トレンチ西壁（図18）、および本調査区西隣の第276次調査（平成８年度）では溝の北岸を確認している。深さは約0.4m。SD17761と合流している。

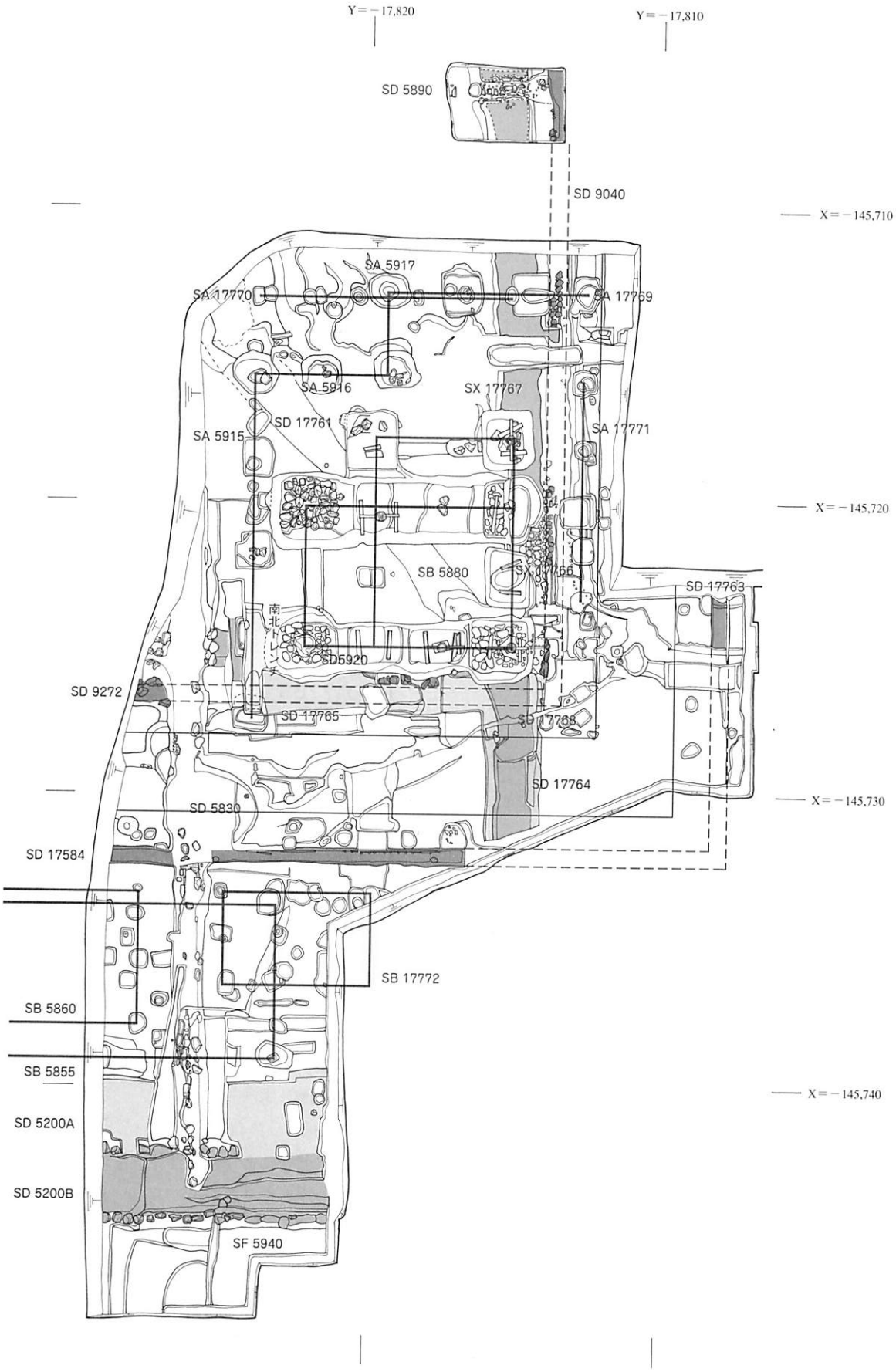



図13　第280次調査南地区　遺構平面図　1：200

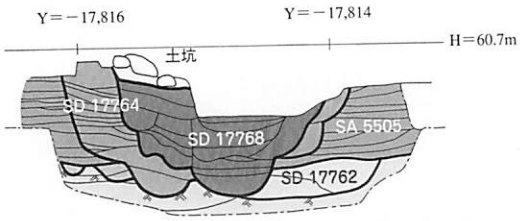



図14　南北溝断面図（X=-145,727.4）1：60

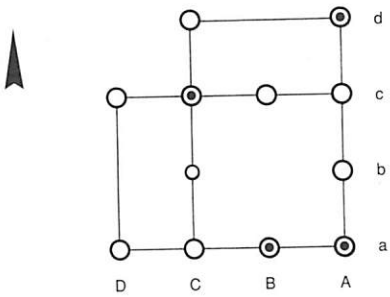



図15
SB5880柱配置模式図
（黒丸は柱根遺存）

**SD17762**　前述の３本の溝（SD17660・SD17661・SD17580）が東院東南隅で合流して南流する溝。幅約2.5m。この溝の堆積土を削って後述する南面大垣SA5505の掘込地業がなされている。当初の溝岸は残っていないので深さはあきらかでないが、堆積土が0.3mほど残る（図14）。

**SD5200A**　二条条間路北側溝。長さ7.5mにわたって検出した素掘りの溝。深さ約0.4m。C期まで存続する。

**SF5940**　二条条間路の路面。舗装材などを使用していた痕跡はない。

〈B期〉

**SA5900**　東面大垣。調査区東寄りの北壁で、約0.2mの積み土が残ることを確認した。幅約5.7m、深さ約0.7mの掘込地業をともなう。また、調査区東辺で地業の東端線を約５mにわたって検出した。

**SD17763**　幅約0.6m、深さ約0.3mの素掘りの南北溝。第245-2次調査（平成５年度）で検出した東面大垣の東雨落溝（SD5815）下流部と考えられる。

**SD9040**　東面大垣西雨落溝。石組の南北溝で西の側石には長径30～50cm、短径20cm前後の石を長手に並べ、深さ約20cmにし、溝底には径20cm前後の石を敷いている。東の側石は後世の用水路で壊されており残っていない。なお、この雨落溝はSB5880の建設時に埋められる。

**SA5505**　南面大垣。幅約５m、深さ0.7mの掘込地業が残る。南北溝SD17762の堆積土を切って掘込地業がなされている。

**SD17584**　南面大垣南側の雨落溝。幅0.5m、深さ0.25m。東寄り８m程の溝両側面には、薄板を杭で止めるシガラミが残る。これは地山が砂で崩れやすいのを防ぐ処置であろう。

**SD17764**　前述の南北溝SD17762と同じ位置で、南面大垣の掘込地業を削り込む南北溝。幅約2.3m、深さ約1.1mが残る（図14）。

**SD17765**　南面大垣の掘込地業北端部分を削ってつくられた東西溝で、前述の南北溝SD17764につながる。南岸を約９mにわたって検出したが、北岸は後述する東西溝SD5920が重なっているため残っていない。溝幅は約1.0m、急勾配で掘り込まれており、深さは約0.6mある。溝底の標高は60.05m。上層園池SG5800Bの排水溝SD5830の西には続かないので、SD5830の位置で北に向きを変え池尻につながっていたと考えられる。園池下層の掘込地業SG5800Cの底の標高は60.3～60.7mなので、この溝は池の底水を抜く施設の一部とみることができる。

**SX17766**　東面大垣西雨落溝SD9040の西側に連なる石敷で、直径30cm前後の石を敷き、その間に径５～10cmの礫を詰めている。

**SX17767**　東面大垣西雨落溝SD9040の西側に連なるバラス敷で、石敷SX17766と同一面と考えられる。

**SB5855**　南面大垣南側の瑞地上に建つ６間×２間の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行が10尺、梁間が９尺。第44次調査では５間×２間としていたが、もう１間東へ延びることが判明した。なお、東から１間目の柱穴は後述するD期の南北溝SD5830に壊されており、B期またはC期の遺構と考えられる。

〈C期〉

**SD17768**　B期の南北溝SD17764と同じ位置に掘削した南北溝で、幅約1.6m、深さ約１mが残る（図14）。

**SD5920**　B期の東西溝SD17765を埋めた後に、位置をやや北に寄せて掘削した東西溝で、後述する建物SB5880南側の柱穴列とほぼ重複している。調査区西端付近では溝の上部で幅約1.7m、深さ約0.4mであった。この溝の埋没後の堆積土の崩壊を防ぐためと考えられる２段の石組が南北溝SD5830の東側面に残る。なお、第44次調査では、この東西溝SD5920は西で蛇行溝SD5850などにつながり、さらにそれが園池下層遺構SG5800Aにつながると考えているので、C期を園池下層遺構SG5800Aの時期にあてることができる。

〈D期〉

**SB5880**　第44次調査で一部検出していた掘立柱建物で、本調査により柱配置等が確定した。ここでは、南北方向の柱列を東からA～D、東西方向の柱列を南からa～dとして個々の柱を示すことにする（図15）。第44次調査ですでに確認していたa列およびc列のB、C、Dの柱穴は、本調査ではそれぞれ３つの柱穴が連結した布掘状の横長い土坑として検出した。これは、本来一辺が２mほどの方形の柱掘形であったが、第44次調査時に掘形間の土壁が崩落したもので、今回再発掘したところ、土坑底部で

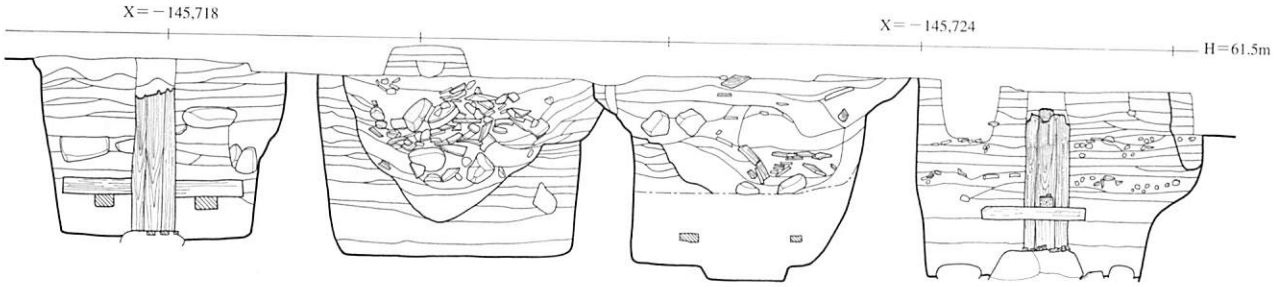



図16　SB5880東側柱列（A列）断面図　1：60

は各掘形間に土堤状の高まりが残存していた。

平面をみると、通常であれば柱があるべきB-dとD-bの位置に柱穴がない。さらに、第44次調査でも確認したC-bの柱穴は、柱掘形の一辺が0.7×1.0mと他の半分ほどの大きさである。また深さも0.4mであって、他のすべての柱掘形が約1.5mの深さをもつのと比べると、著しく異質である。このC-bについては、柱ではなかった可能性も含めて、今後、建築構造全体を検討する際に注意を要する。柱間寸法は基本的に8尺等間であり、通常中間にあるべき場所にない場合は16尺間ということになる。なおA-aの柱心は、大垣の東南隅想定心（国土方眼座標X＝－145,729.50　Y＝－17,811.10）から北に4.55m、西へ3.97mの位置にある。

今回、新たに検出したのは一番東側の柱列、つまりA列のd、c、bの柱穴の東半部分とA-aの柱穴であり、A-a・A-dには柱根が遺存していた。2本の柱根はいずれも断面がほぼ正八角形で、対辺距離は32cm。一辺は13cmである（図16・図17参照）。

A-aの柱穴の底には安山岩の上面を平らに加工した径80cmの石の礎板を据えていた。この上に残存長1.1mの柱根が立つ。柱根の底は外縁部に約2cmの平坦面を作り、内側は中心に向かって緩い凹みを設けている。柱根と石の礎板との間には、長さ10cmほどの木製の楔13個を差し込んで柱の鉛直を確保している。柱の下端から約30cm上に断面10cm角、長さ1.6mの材を貫状に通して腕木とする。腕木は西から打ち込んでおり、東では柱穴の壁に約13cmほどめり込んでいる。石の礎板の周囲には栗石を敷き詰め、その上に人頭大の石を置いて枕木を固定し、腕木を支えている。

一方、A-dの柱穴には、安山岩の平坦面を利用した径70cmの石の礎板があり、その上に長さ1.1mの柱根が残存する。A-aと同様に、柱根の下には6個の楔が差し込まれている。また枕木2本もあるが平行にはならない。

A-a、A-dの柱掘形は、粘土質や砂質の土を交互に薄く突き固めて埋めており、途中に瓦片や礫を多く含む層もある。また、どちらの柱掘形からも、柱形に合わせたような八角形に加工した凝灰岩の破片が出土した。用途は地覆石などが考えられる。

A-bの柱穴では、柱は抜き取られ、石の礎板や栗石などはなく、柱穴の底近くに枕木だけが2本残る。抜取穴の底は、他の柱穴における柱根の下端よりも約30cm低いので、石の礎板も抜き取られた可能性が高い。

A-cの柱穴でも、柱は抜き取られていた。東半分の埋土層を約1m保存したため、西半分だけを掘り下げたが、その範囲では枕木、栗石、石の礎板等はなかった。

さて、第44次調査で検出した柱穴も合わせて概観すると、柱根はB-a、C-cにも残り、柱11本中4本が遺存していたことになる。柱下の状況は場所によって異なる。A-a、A-c、A-dおよびD-aでは石の礎板とそれを取り巻く栗石を伴っている。また、D-cでは石の礎板はなく栗石だけが敷き詰められている。さらに、B-aでは柱根は礎板にたち、C-cでは柱根は柱穴の底に直接たつが、ともに栗石を伴わない。他の柱穴については当初の状況は不明である。

**SA5915**　掘立柱南北塀。柱間は10尺等間で4間ぶん検出した。SB5880西端の柱筋から西に1.8m離れた位置にある。南端の柱穴は南面大垣の基壇上から掘り込む。

**SA5916**　掘立柱東西塀。SA5915の北端から東へ2間延びる。柱間は8尺等間。掘形埋土には凝灰岩が混じる。

**SA5917**　掘立柱南北塀。SA5916の東端から北へ1間延びる。柱間は10尺。

図17　SB5880東南隅の柱根（北西から）

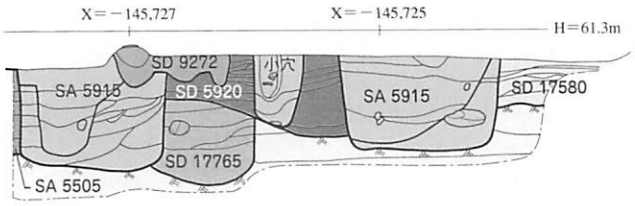



図18　南北トレンチ西壁断面図　1：60

**SA17769**　掘立柱東西塀。SA5917の北端から東へ3間延びる。柱間は西から2.4m、2.4m、2.0mである。東端の柱穴は東面大垣の基壇上から掘り込む。SA5915・SA5916・SA5917・SA17769は一連の塀と考えられ、SB5880の柱配置と同様、北西部に入隅部をもつ。このため、SB5880と構造的に関連する施設、たとえば露台などを想定できなくはないが、柱筋が揃わず、柱穴も不足するので、ここではSB5880建設に際しての目隠塀と解釈し、入隅部は園路の確保のために設けたものと考えておく。前述のように、南面大垣の北雨落溝がSA5915南端の柱を抜き取った後につくられていることも、この塀が仮設的なものであった傍証となるだろう。

**SA17770**　掘立柱東西塀。SA17769撤去後に東面大垣近くから園池洲浜までを閉塞したもので、柱間は1.6～2.1mで5間。

**SA17771**　掘立柱南北塀。東面大垣の基壇土を掘り込んでつくる。柱間は2.2～3.6mで3間。

**SD5890**　石組の東西溝。検出した遺構は底石と1つの側石、側石抜取穴で、幅約0.4m。B、C期の東面大垣西雨落溝SD9040が、SB5880建設時に埋められていることから、SB5880の北方で向きを変えることが想定されたため、南地区と北地区の間に小トレンチを設けたところ、第44次調査の園池東岸で確認していた石組東西溝の東に続く部分を検出した。この溝はSD9040と合流するが、溝底の標高は合流部で61.13mであるのに対し、小トレンチ西端および第44次調査区での標高は61.20mであり、西から東へわずかに低くなっている。ただし、小トレンチの下層には南北溝SD17760があり、溝底の石は不同沈下した可能性もあるので、SB5880造営後の西雨落溝のあり方については不明な点が残る。

**SD9272**　南面大垣北雨落溝。北側石が部分的に残り、C期の東西溝SD5920の堆積土を覆う整地土上に据えられている。また、Y＝-17,824.3における南北トレンチ西壁（図18）では、C期の南北塀SA5915の柱抜取穴を切る溝の側石および底石の抜取痕跡を確認している。

**SD5830**　南面大垣の南部分で新たに検出した南北溝。上層園池SG5800Bの排水路である。幅約1.2m、深さ約0.6mの溝を掘った後、埋め戻して幅約0.8m、深さ0.4m前後の溝を掘り直し、暗渠用木樋を支えるための長さ0.7mほどの枕木をほぼ2～5mおきに据えている。枕木の両端に石がのっている箇所もあり、木樋を石で固定したことがわかる。なお、溝を掘り直しているのは水位を厳密に設定するために必要な施工手順であったと考えられる。

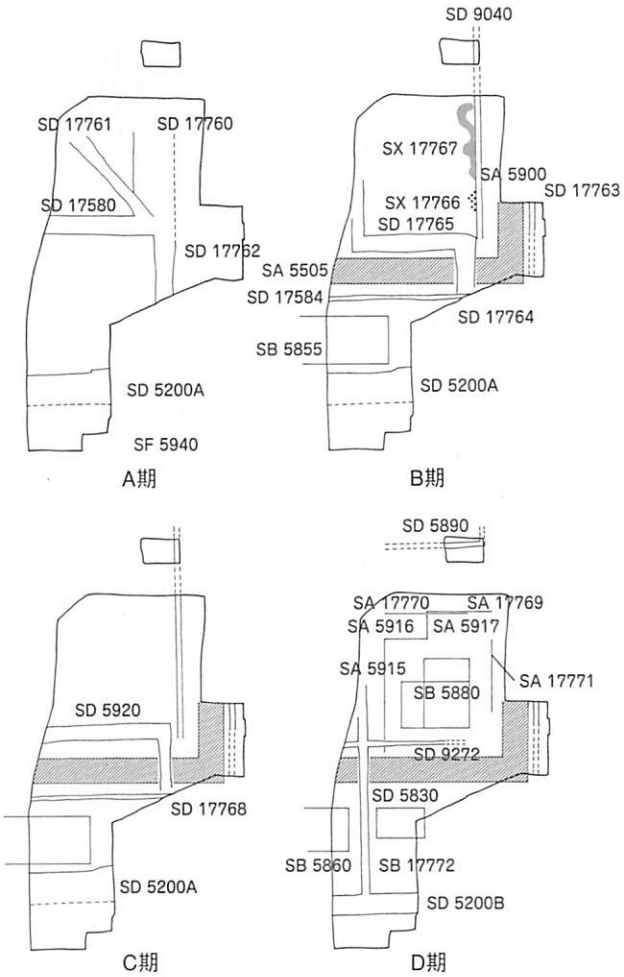



図19　遺構変遷図　1：800

**SD5200B**　二条条間路北側溝。幅約2.0m、深さ約80cm。東西7.5mにわたって検出した。SD5200Aの北岸を約2m南に寄せて掘削している。径30～60cmの玉石組の護岸を設けている。南岸東側では側石の抜取穴を検出した。

**SB5860**　南面大垣南側の二条条間路北側溝との間の壇地に建つ桁行4間×梁間2間の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行9尺、梁間8尺。C期までの建物SB5855を建て替えたもの。

**SB17772**　SB5860同様に壇地上に建つ桁行3間×梁間2間の小規模な掘立柱東西棟建物。SB5860と北側柱筋を揃える。　（内田和伸）

### 北地区の遺構

北地区は庭園内における舗装材の有無の確認などを主な目的とした。調査区全体は里道下であったため耕作による削平がなく、遺構の保存状況は良好であった。ただし、里道の両側には水路が設けられていたため、一部削り込まれている。検出した遺構は以下の通りである。

**SD17760**　断割トレンチで確認した調査区東端の南北溝。北でやや東に振れる。南地区でも確認している。

**SA17773**　調査区東端で検出した掘立柱南北塀。後述のバラス敷SX17774の下層にあり南北溝SD17760を切る。6間ぶん検出したが、柱間は1.5～2.1mとさまざまである。柱穴は掘形一辺が約80cm、深さは約0.9mで、3つが柱痕跡を残す。

**SX17774**　庭園内の平坦部に敷き詰められたバラス敷。調査区のほぼ全面にわたって検出した。整地土の上に直径が数cmのバラスを約5cmの厚さに敷く。北端では上層園池の岸の地形にすりついているので、上層園池にともなうバラス敷であろう。南地区ではバラス敷は上下二層あったが、ここでは一層であった。

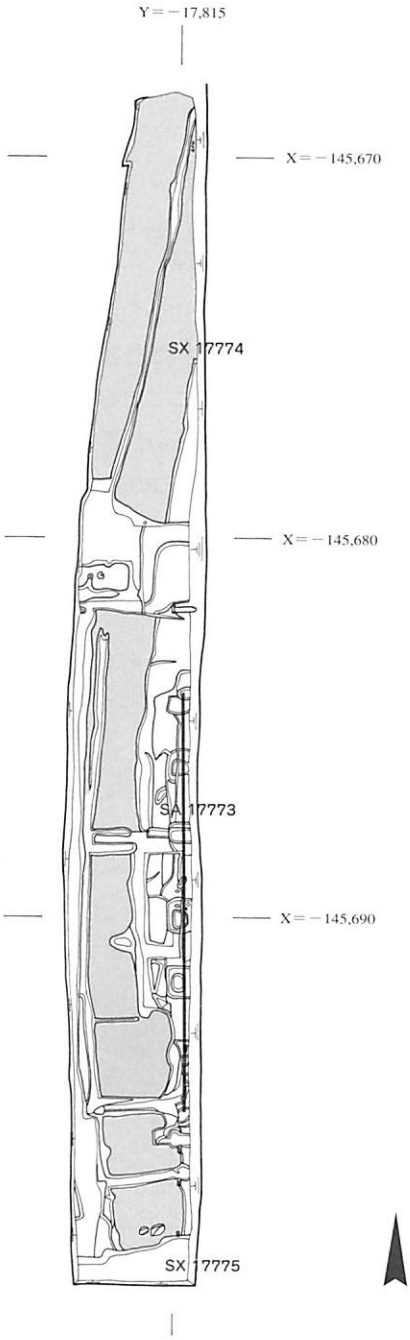



図20　第280次調査北地区　遺構平面図　1：200

**SX17775**　調査区南部で検出した南北に塼が4つ並ぶ遺構。一部バラスが覆っており、バラス敷SX17774と同時期の造作になると思われる。東面大垣西雨落溝SD9040は本調査区の北の第245-2次調査で造り替えが確認されており、位置的にみると、塼はある時期における雨落溝の側石であった可能性も否定はできないが、ここではバラス敷の区画施設と考えておく。　（蓮沼麻衣子）

**東地区の遺構**

**SD17776**　東二坊坊間路上の西寄りにある南北溝。幅約1.1m、深さ約0.3m。溝底には地山の砂が堆積し、その上を粘土で埋めている。砂の堆積がみられるのは、一時期水を流す機能を担ったためと思われ、東二坊坊間路改作前の西側溝と考えられる。

**SD17777**　東二坊坊間路上の東寄りにある南北溝。幅約1.1m、深さ約0.3m。黒灰色粘土が堆積している。東

図21　北区　庭園内のバラス敷き

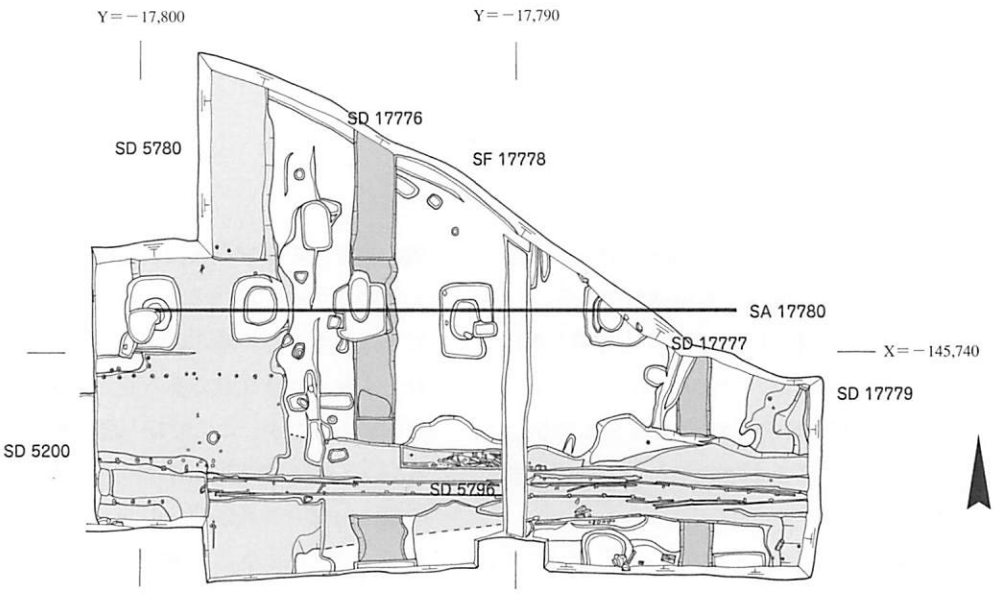



図22　第280次調査東地区　遺構平面図　1：200

二坊坊間路改作前の東側溝と考えられる。

**SF17778A**　SD17776とSD17777に挟まれる部分で東二坊坊間路の路面部分。両側溝の心心間距離で約8.6m。

**SD5780**　改作後の東二坊坊間路西側溝。幅約４m、深さ約0.2m。

**SD17779**　改作後の東二坊坊間路東側溝。調査区東端でその西肩を検出した。

**SF17778B**　改作後の東二坊坊間路の路面部分。路面幅約13mで、舗装材などは未検出。

**SA17780**　掘立柱東西塀。東二坊坊間路西側溝西肩から東に４間延びる。柱間は西から３間が2.7m、４間目が4.5mである。４間目の中心が前述のSD17776・SD17777のほぼ中心にもなり、これが東二坊坊間路心と考えられる。

**SD5200**　二条条間路北側溝。東二坊坊間路西側溝SD5780との合流点より東側では溝幅を約2.0mに狭め、深さ約0.6mとしている。南岸の一部には護岸石が残る。何度かの浚渫と堆積の後、幅約0.3m、深さ0.2m程度のシガラミをともなう溝（SD5796）に掘り直している。このシガラミの東端は、東二坊坊間路東側溝SD17779との合流部で終わっている。一方、その西端は西側溝の中央部まで延びており、シガラミが設けられた時には西側溝の東半分は埋まっていたと考えられる。　（内田和伸）

出土遺物

**①瓦塼類**　本調査区から出土した瓦塼類の集計表を地区ごとに示す（表３・表４）。ただし、北地区からの出土は極めて少なかったため、ここでは省略する。東地区の瓦塼類の多くは東二坊坊間路の位置で出土したもの。

**②出土軒瓦からみたSB5880の造営と廃絶の年代**　SB5880のうち、本調査で新たに発掘したのは東側柱通り（Ａ列）にあたる柱列である。型式の判明する軒瓦は軒丸瓦８点、軒平瓦15点の、合わせて23点であった。

表５からあきらかなように、柱掘形から出土した軒瓦は、ほぼすべてが平城宮軒瓦編年Ⅱ２期（Ⅱ２期は天平初頭～天平17年）のものである。これはSB5880の造営時期がⅢ期以後である可能性の強いことを示している。一方、柱抜取穴から出土した軒瓦は総数８点のうちⅡ２期に

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 219.1kg |
| 6133 | Db | 2 | 6663 | A | 2 | 点数 | 1,746 |
| | ? | 1 | | B | 1 | 平瓦 | |
| 6225 | A | 2 | 6667 | C | 1 | 重量 | 679.4kg |
| 6275 | B | 1 | 6681 | A | 3 | 点数 | 4,771 |
| | D | 1 | | B | 1 | 塼 | |
| 6282 | G | 1 | | E | 8 | 重量 | 59.0kg |
| | ? | 1 | | ? | 1 | 点数 | 33 |
| 6284 | B | 1 | 6691 | A | 1 | 凝灰岩 | |
| | C | 1 | 6694 | A | 1 | 重量 | 123.3kg |
| 6308 | B | 1 | 6721 | Ga | 2 | 点数 | 79 |
| 6314 | A | 8 | | ? | 1 | 道具瓦・その他 | |
| 型式不明 | | 13 | 6726 | B | 1 | 鬼瓦 | 3 |
| 巴瓦 | | 1 | 6732 | C | 1 | 熨斗瓦 | 17 |
| | | | 6755 | A | 1 | 割熨斗瓦 | 1 |
| | | | 6801 | A | 1 | 面戸瓦 | 7 |
| | | | 型式不明 | | 7 | 刻印平瓦「三」 | 1 |
| | | | | | | 刻印平瓦「理」 | 2 |
| 軒丸瓦計 | | 35 | 軒平瓦計 | | 33 | 箆書瓦 | 2 |

表３　第280次南地区　出土瓦塼類集計表

| 軒丸瓦 | | | | | | 軒平瓦 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 |
| 6010 | A | 1 | 6282 | B | 2 | 6643 | C | 2 | 6694 | A | 1 |
| 6133 | D | 17 | | E | 2 | | D | 1 | 6721 | C | 1 |
| | M | 1 | | Hb | 1 | 6663 | B | 2 | 6726 | D | 1 |
| | Q | 1 | | Ia | 1 | | C | 3 | | E | 2 |
| | ? | 3 | | ? | 1 | | ? | 3 | 6732 | C | 1 |
| 6138 | B | 1 | 6284 | Eb | 1 | 6664 | D | 1 | | L | 1 |
| 6225 | A | 6 | 6308 | A | 4 | | F | 3 | 6760 | A | 1 |
| | ? | 1 | | B | 1 | 6681 | A | 1 | 6801 | A | 3 |
| 6271 | B | 1 | | ? | 2 | | ? | 1 | 型式不明 | | 10 |
| 6273 | B | 1 | 6313 | ? | 1 | 6682 | A | 2 | 白鳳時代 | | 1 |
| 6281 | Ba | 1 | 型式不明 | | 25 | 6691 | A | 8 | 西大寺352A | | 1 |
| 軒丸瓦計 ※二彩軒丸瓦１点含む | | | | | 76 | 軒平瓦計 ※緑釉軒平瓦１点含む | | | | | 50 |

| 丸瓦 | | 平瓦 | | 塼 | | 凝灰岩 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 重量 | 260.5kg | 重量 | 733.8kg | 重量 | 14.3kg | 重量 | 1.2kg |
| 点数 | 2,744 | 点数 | 7,592 | 点数 | 19 | 点数 | 2 |
| 道具瓦・その他 | 刻印瓦「田」１点　刻印瓦「理」５点　箆書瓦１点 | | | | | | |

表４　第280次調査東地区　出土瓦塼類集計表

| 柱掘形 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | |
| 型式 | 時期 | 点数 | 型式 | 時期 | 点数 |
| 6275D | 藤 | 1 | 6663B | Ⅱ2 | 1 |
| 6308B | Ⅱ2 | 1 | 6681A | Ⅱ2 | 2 |
| 6314A | Ⅱ2 | 3 | 6681B | Ⅱ2 | 1 |
| 6314E | Ⅱ2 | 1 | 6681E | Ⅱ2 | 5 |
| 柱抜取穴 | | | | | |
| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | |
| 型式 | 時期 | 点数 | 型式 | 時期 | 点数 |
| 6225A | Ⅲ1 | 1 | 6663A | Ⅱ2 | 2 |
| 6314A | Ⅱ2 | 1 | 6681E | Ⅱ2 | 1 |
| | | | 6721Ga | Ⅲ1 | 1 |
| | | | 6755A | Ⅴ | 1 |
| | | | 6801 | Ⅵ2～Ⅴ1 | 1 |

表5　SB5880にともなう瓦の型式（「藤」は藤原宮期）

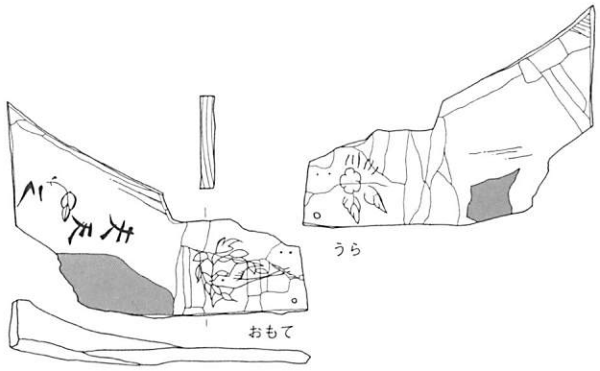



図23　二条条間路北側溝出土の墨画木片　1：3

属するものが半数を占めているが、最も新しい時期に位置づけられる軒平瓦6801型式は、神護景雲元年頃から奈良時代末頃の生産年代が考えられている。この瓦が含まれていることは、SB5880の廃絶年代が奈良時代末以後であったことを示している。この様相は、第44次調査時におけるSB5880の他の柱穴での出土瓦の傾向と一致している。

なお、第44次調査も合わせて、SB5880の柱穴からは多量の瓦が出土しているが、建物造営時に掘形内に層状に瓦を詰めた形跡があり、当然のことながら、柱抜取穴から出土した軒瓦の大半は、柱掘形内に埋められていた軒瓦と型式が共通している。抜取穴内に投棄されていたⅢ期以降の軒瓦は、本調査でいうと半数の4点であるが、それぞれ別の型式のものであり時期も異なる。したがって、これらの軒瓦がSB5880の屋根に葺かれていたとは考えがたく、SB5880は瓦葺以外の屋根であった可能性が高いと判断される。　（井上和人）

**③木製品**　第280次調査では、楔22点のほか木製品の出土は少なく、出土合計は50点だった。図23は二条条間路北側溝SD5200より出土した墨画木片である。画が描かれた板は緩やかに彎曲し、表面右端を穿孔している。また周縁には鋸挽痕を残す。何らかの木製品の破片を利用したものと考えられる。広葉樹散孔材。画は表面を刀子で削った後、細い線で達者に描かれている。おもて面左には墨書（天）とともに、細長い茎の先につぼみがつく植物、右には葉が生い茂る枝をくわえる尾の長い鳥が描かれる。またうら面には五弁の花を中心とし、周囲に3葉1対の葉が数枚生えた植物が描かれる。これらのモチーフは正倉院の工芸品にも散見される。　（加藤真二）

**④木簡**　本調査で木簡が出土したのは東地区、すなわち二条条間路と東二坊坊間路の道路側溝からである。東二坊坊間東側溝SD17779から11点、二条条間路北側溝SD5200から3点の計14点である。主要な木簡の釈文を記す。

第二八〇次調査東地区出土木簡

**東二坊坊間路東側溝ＳＤ一七七七九**

①・美作国勝田郡川辺郷庸米五斗　193・21・7　032
　［戸主　万呂ヵ］
　・□□□□□□

②讃岐国寒川郡造太郷□□□□庸米五斗　171・21・5　032

③□天平神護二年　(91)・(20)・(3.5)　081

**二条条間路北側溝ＳＤ五二〇〇**

④天天　(140)・(53)・17　065
　（表ニ花喰鳥ノ絵、裏ニ花ノ絵？アリ）

まとめ

**SB5880**　楼閣と考えられてきた建物SB5880の特異な柱配置をあきらかにすることができた。柱配置から想定される建物平面は2間×2間の身舎に間口16尺の庇が西と北につく建物、あるいは3間×2間の東西棟に間口16尺の北庇が東寄りにつくものである。ただし、前者は北西－南東の軸線に対し対称の柱配置をもつにもかかわらず、身舎北柱筋中間の柱（B-c）と身舎西柱筋中間の柱（C-b）が構造的に全く異なっていることになる。一方、後者と考えると西の中央の妻柱（D-b）を省略したことになり、構造的には極めて弱いという問題が生じる。今後、建物の機能や庭園内および宮外からの景観なども考え合わせて、SB5880のより蓋然性の高い復原に向けて考察を進める必要がある。なお、これまでの復原案のほか、現

時点で考えうる復原案とその問題点については後掲した。

ところで園池西岸中央に建つ5間×2間の東西棟建物（復原済のいわゆる中央建物）は、大面取りを施した断面八角形の柱で、檜皮葺の屋根に復原しているが、先述のようにSB5880は瓦葺以外の屋根であった可能性が高いことが指摘されており、これを檜皮葺とすれば中央建物とも屋根材の種類が揃うことになる。このように建物2棟の意匠を一部共通させて存在した可能性は極めて高い。

さらに、園池北方を調査した第110次調査と第245-2次調査で検出した東西両庇のつく南北棟建物では、SB5880と同様に石の礎板と枕木を検出しており、石の礎板には八角柱の径40cmの当たり痕跡も認められている。この建物も前述の2棟と同時期に存在した可能性は高い。平城宮内で出土した柱のほとんどが丸柱であるのに対し、大面取りの柱を含むが庭園内の建物のみに八角柱を用いていることは極めて興味深い。

このような柱の形態は単に建築意匠上の問題ではなく、庭園設計の思想的背景や基本理念、庭園の使い方等とも深く係わっているように思われる。

**園池からの排水溝**　本調査ではSB5880造営前の東院庭園東南隅の様相があきらかになったが、B期の東西溝SD17765が下層園池の掘込地業SG5800Cにつながっていた可能性が考えられることは極めて大きな意義をもつ。園池は上層と下層の2時期あり、下層園池造成前に逆L字型に掘り込んだ遺構SG5800Cがあって、これが園池であったのか、下層園池造成のための工程の一つであったのかが課題であった。SG5800Cにつながる溝が何層にも堆積土をともなったことで、SG5800Cが園池の最下層として存続した可能性が高くなったと言えよう。

**東二坊坊間路**　東二坊坊間路の中軸線の位置は、造営方位の振れ（N0° 15′ 41″ W）を考慮すると、平城宮朱雀門の東797.8mにある。これは条坊の3坪ぶんの造営寸法（797.8m＝0.3546m×750大尺×3＝0.2955×900小尺×3）であり、東二坊坊間路が計画通りに施工されていたことを示す。また、この道路の中軸線は東院の東面大垣の心から21.3m（60大尺）東にあたる。平城京の条間路、坊間路の標準規模は25大尺（＝30小尺≒8.9m）で、先行する道路SF17778Aの東西両側溝の心心間距離は8.6mであることから、坊間路に匹敵すると考えられる。拡張した後のSF17778Bの規模については、東側の溝の全幅を

| | X 座標 | Y 座標 |
|---|---|---|
| SF17778心 | -145,740.00 | -17,789.70 |
| 東院東面大垣東南隅心 | -145,729.50 | -17,811.10 |
| 朱雀門心 | -145,994.49 | -18,586.31 |
| 小子門推定心 | -145,729.60 | -18,054.90 |

表6　条坊関連座標

確認していないものの、西側溝の中心と道路の中軸線との距離が8.6mであり、中軸線の位置が変わらなければ東西両側溝心心間距離が17.2m程となる。これは一般の大路の規模と同等である。従って、平城宮東院東面大垣沿いの東二坊坊間路は、当初坊間路相当の条坊道路として造作され、後に大路同等の道路に改作されたことがわかった。

さて、平城宮東院に東接する部分の東二坊坊間路では、かつてその路面想定位置で建物跡などが検出されており、この部分における東二坊坊間路の存否を含めて不明な点が残されていた。本調査で、坊間路に拡幅のあったことがあきらかになり、さらに拡幅後のある時点で道路が閉塞されていたことが判明したことによって、道路の存在が確証されたとともに、以前調査された路面上の建物が道路閉塞時のものであるという解釈も可能になった。条坊道路がこのような複雑な様相をみせるのは平城京内ではまれであり、平城宮東院や東に接する藤原不比等邸の造営、さらに法華寺の造営などと深く関わった現象と考えられる。　（内田和伸）

SB5880の復原をめぐって

**これまでの復原案**　SB5880は第44次調査（1967年）の段階で、方2間の身舎に北庇と西庇をともなう逆L字形の平面を検出していた。しかし、その平面はあまりに特異であり、おそらく建物遺構の全体ではなく、一部分であろうと推察された。第44次調査の担当者・阿部義平氏は、全体の形態を復原しているわけではないが、すでに「隅楼」という表現を用いている点には注目したい（『年報1968』38-39頁）。その後、いつのころからか、この「隅楼」を「八角楼」とみなすイメージが定着しはじめた。それは、建物が対称であったという認識のもとに、未掘部分の東側と南側にも庇がついていたであろうと推定したことによる。また、柱根がいずれも正八角形を呈し、側面が正面から約135度傾く斗のミニチュアが近辺で出土したことも影響していた。

その後、1989年の「平城京展」に出陳するため、東院庭園の1/50復原模型を製作するにあたり、遺構の詳細

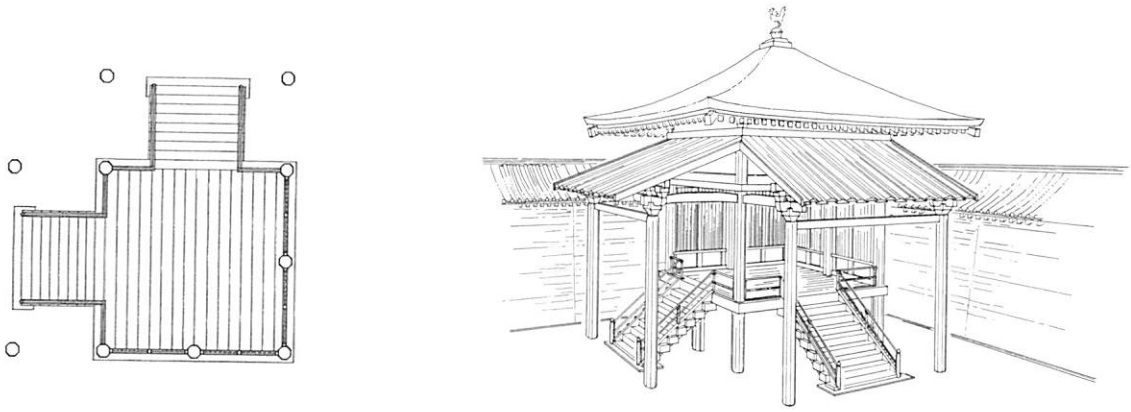


図24　復原案1　復原平面図（1：200）と透視図

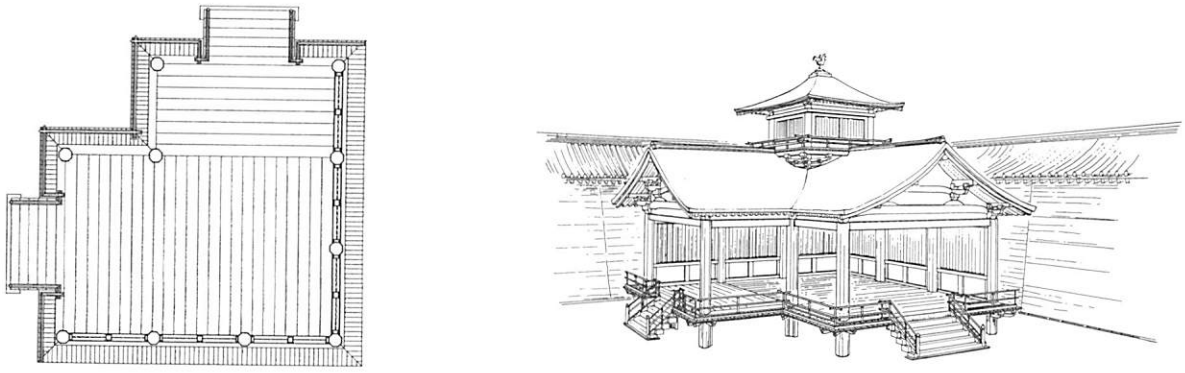


図25　復原案2　復原平面図（1：200）と透視図

な再検討をおこなった。その結果、SB5880の平面が仮に八角形であったとしても、それは正八角形ではなく、東西南北の四辺に対して斜辺が1：$\sqrt{2}$になる不整八角形であるから、古代の円堂に類する八角形建物には復原しえないと判断した。以上のような理由から、2間×2間の身舎に4面庇をつけた「十字楼」の案を採用したのである。

ところが、本調査によって、東庇と南庇が存在しないことがあきらかになった。第44次調査で検出した逆L字形の遺構は、建物遺構の一部分ではなく、その全体を示すものだったわけである。この特異な平面をもつ遺構の上部構造を検討するため、平成9年12月3日に復原検討委員会を開催した。その際、研究所側で提示したものが復原案1で、濱島正士・田中淡両委員より示唆されたのが復原案2である。

**復原案1**　径がわずか1尺1寸の細い柱なので、楼閣には復原しえないとの考えから「亭」風の建物を想定し、2間×2間の身舎に北庇・西庇が取りつく建物とみる。身舎は檜皮葺の高床式で、床高はおよそ6尺、床上の柱高を10尺とし西と北の庇は土庇風の板屋根をかけ、木階をおく。西北の池方向に視野を開くため、北庇・西庇に木階をつけて高欄をまわし、東・南の大垣側には連子窓を設けた。この案の問題点は、構造が異なるはずの身舎と庇の地下部分で、柱根の径や石の礎板・腕木などの手法が酷似していることである。

**復原案2**　上記の問題点を踏まえた案で、平等院鳳凰堂の翼楼の隅部分を切りとったような檜皮葺の小型楼閣である。中国の宮城の隅に常設される「角楼」を和風化した建物といってもいい。人が昇降する床は初層のみだが、入隅部分の屋根に小さな楼をたちあげ、大垣の外の二条条間路からも、その威容を仰ぎみることができる。柱は小さいが、地業を異常なほど堅固にしているのは、この小楼を屋根にのせるためと考えるのである。床面は逆L字形を呈し、その西と北に木階をつける。ほぼ同時期とみなしうるSA5915・5916などの塀に木階が接しないようにするため、床高は低く設定せざるをえなかった。高欄のつく張り出し部分は縁束痕跡がないから、挿肘木で支えるようにする。この案の問題点は、A-dとC-d、D-aとD-cで柱間が16尺と長くなること、奈良時代はもとより、中近世においても、このような建物が単独で存在した例がないことなどである。

以上、2つの復原案について述べたが、両案とも一長一短であり、今後はさらに慎重な姿勢で複数の案を検討していく必要があるだろう。　（蓮沼麻衣子・浅川滋男）

## 3　第284次調査

はじめに

本調査は東院庭園復原にともなうものである。調査区は、東院園池南岸から南面大垣、瑞地、二条条間路北側溝にかけての約750㎡である。以下便宜的に東院園池地区を北区、南面大垣以南を南区と呼ぶ。

北区は、第44次調査区と第120次調査区の間にある旧水路部分の未掘地約40㎡である。ここは既に第44次調査や第276次調査で検出した園池南岸建物の西妻想定位置にあたり、建物の全容解明が大きな課題となる。そのため園池南西部にあたる計約400㎡を広く調査対象とした。

一方、南区は南面大垣部分約40㎡、および瑞地から二条条間路北側溝SD5200までの約220㎡の計260㎡を新たに発掘し、第44次・第120次調査の既掘部分を合わせて計約350㎡を調査した。

基本層序

北区では、最大約１ｍの置土のほか、薄い耕土・床土・黄褐色土（遺物包含層）の計10～20cmを経て、遺構面である橙茶褐色砂質土の地山となる。南区では置土約１ｍ、耕土５～15cm、床土５～15cm、遺物包含層の灰褐粘質土10cmと続き、現地表面から110～130cmで遺構面に達する。遺構面は地山の暗灰褐色シルトで、南区北端では整地土の橙褐色粘質土が部分的に残る。遺構検出面の標高は北区で61.0～61.2m、南区で60.8m～61.0mである。

北区の遺構

第44次・第120次調査区の間にある未掘部分では、東院上層園池SG5800B、奈良時代末期の洲浜SX17710、２時期の園池南岸建物SB17582･SB17700の西妻列の柱穴、蛇行溝SD5850、東西溝SD9272A～Cなどを検出した。

**①園池南岸建物関連遺構**　園池南岸には、既に第44次調査で一部を検出した、布掘状の掘込地業SX5935を南側柱とする東西棟建物SB5870の存在が想定されていた。第120次調査ではその西妻と思われる柱穴を部分的に検出し、その後、第276次調査において、掘込地業SX5935とは別に掘立柱で構成される東西棟建物SB17582を発見した。しかし、調査は部分的で、とくに北側柱列の状況やSX5935との関係は未解明であった。本調査では、西妻の柱列全体を初めて確認し、再発掘の可能な西から３～４基めまでの柱穴位置について、平面的な掘り下げ（２ヶ所）・断割（３ヶ所）によって精査し、園池南岸建物の実態をあきらかにした。本調査で判明したSX5935を南側柱筋とする建物には、新たに遺構番号SB17700を付すことにする。

園池南岸の遺構は大きくα～γの３時期に分けられる。

**〈α期〉**下層園池SG5800Aの南岸にSB17582が建つ時期。下層石敷SX17705が併存する。

**SB17582**　園池南岸に建つ掘立柱東西棟建物。桁行６間×梁間２間、柱間はいずれも８尺等間。北側柱は池内に張り出して立てる。後述のように、SB17582を建て替えた北縁付き東西棟建物SB17700の北側柱列における掘込地業SX17701によって、北側柱筋の柱穴はほとんど破壊されている。かろうじてSX17701の北側に残った掘形の上に、第120次調査で検出した下層石敷SX17705の延長の石が据わ

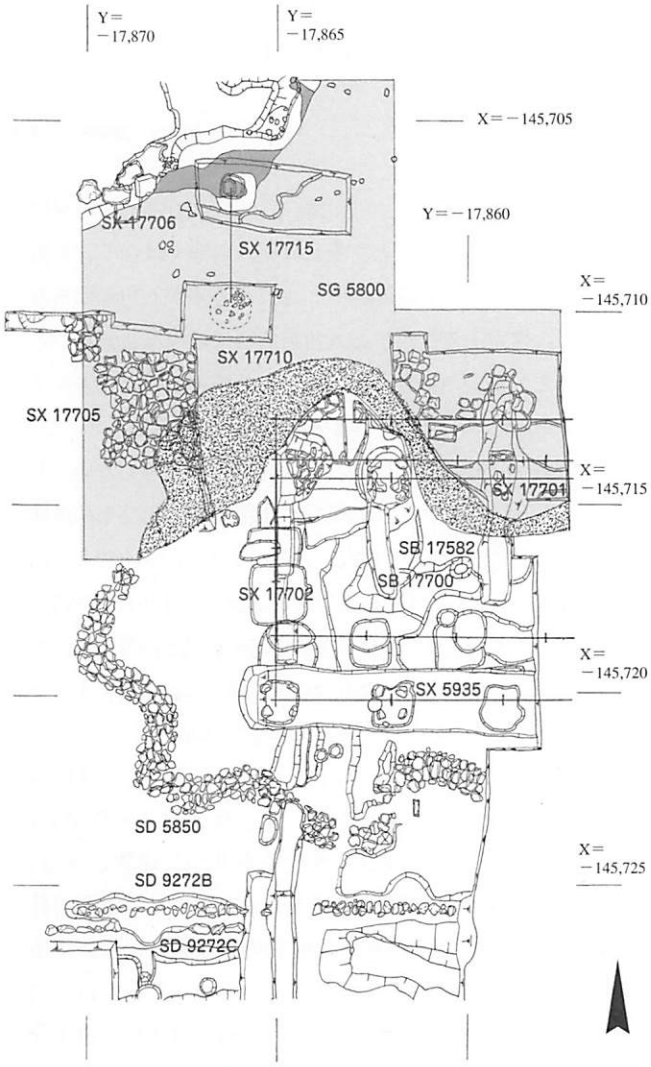



図26　第284次調査北区　遺構平面図　1：200

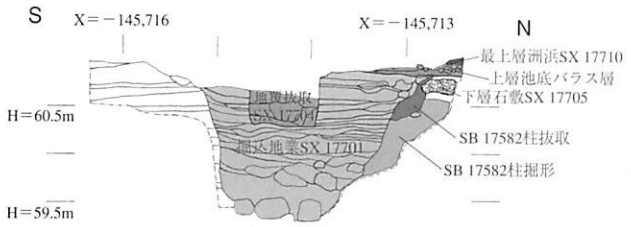



図27　SB17700掘込地業・SB17582柱穴断面図（Y=－17,862）1：80

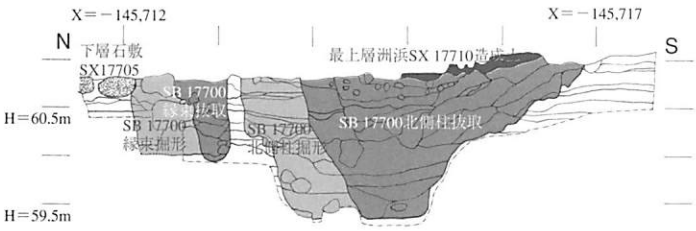



図28　SB17700縁束・北側柱柱穴断面図（Y=-17,859）1：80

っており、柱抜取穴はこの石敷の際から掘られている（図27）。これはSB17582の柱を立てた後に石敷を整備して建物の池側を化粧したためで、SB17582と下層石敷SX17705の併存があきらかになった。掘形の現存深さは約120㎝。

**SX17705**　第120次調査で西端約21.5mを検出していた園池南岸の下層石敷。池南岸の下層掘り下げ部分において、据わった状態の石を新たに10個あまり検出した。SB17582の西妻ラインから西へ約4.5mの位置から幅約3mで東に延びる。東限がSB17582を挟んで対称の位置にあるとすると総延長は約23.5mになる。南限はSB17582の北側柱列の心の位置に揃っていたと考えられる。南限を建物部分で北に控えた逆凹字形であった可能性も皆無ではないが、後述のように、SB17700北側柱列の掘込地業中には、SX17705に由来する大ぶりの扁平な両輝石安山岩が大量に投棄されている。これは掘込地業造成時にSX17705の一部を破壊したためと考えられ、SX17705がSB17582部分でも北に控えることなく長方形を呈していた証拠といえる。

**〈β期〉**上層園池SG5800Bの南岸にSB17700が建つ時期。

**SB17700**　園池南岸に建つ東西棟建物で、SB17582を建て替えたもの。桁行5間×梁間2間の身舎の北側に縁を付け、北側柱と北縁束を園池に張り出して立てる。柱間は桁行・梁間とも10尺等間、北縁の出は5尺。平面的にはSB17582の東西規模・位置をほぼ踏襲し、北に3尺、南に6尺拡がる（西妻列の断面図は図30参照）。

まず、南側柱列は、すでに第44次調査で東から約14mぶん、また第120次調査で西端約1.5mぶんを検出している掘込地業SX5935を造成した後、根石・礎石を据える礎石建で構成されている。SX5935は、幅約1.6m、長さ約17mの東西に長い布掘状の掘込地業で、東端では現状で深さ約10㎝と浅いが、西端では約50㎝を測る（但し底の標高はほぼ水平）。分層はできないがクラッシャー状の砕石を堅固に突き固めている。過去の調査でも柱位置付近に人頭大の石が点在することを確認していたが、今回西端の2ヶ所で4個の石が方形に並び、その周囲に礎石据付掘形を検出したため、これらは根石であることが判明した。根石の中心の間隔は10尺で、桁行方向の柱間を確定できる。根石は内側が低く湾曲するように据えられており、礎石の径は1mにもおよぶと考えられる。

次に東西の妻柱位置には独立した壺掘地業が現存する。今回検出した西妻の壺掘地業SX17702は、一辺約1.5mの方形で、現存深さ約10㎝、礎石据付掘形は確認できなかったが、南側柱と同様礎石建と考えられる。柱心が壺掘地業の中央に来ないのは、SB17582の西妻柱穴を掘削して地盤の弱くなっていた部分を避けたためか。

以上のように、建物南半が礎石建であるのに対し、池の中に張り出す北側柱と縁束は掘立柱式である（図28）。北側柱筋は、最大幅約2.5m、長さ推定約19m程度の布掘状の掘込地業SX17701をおこなった後、改めて掘形を掘っている。SX17701は深さも約150㎝におよぶ大規模なもので、造成時に破壊した下層石敷SX17705の石が地業と廃棄を兼ねて多数放り込まれている（図27）。地業の範囲が長方形ではなく部分的に北へ膨らんでいるのは、一度掘削して地盤の悪くなっているSB17582の掘形部分も含めて地業をおこなったからであろう。

SX17701内で幅約70㎝、深さ約30㎝の東西溝SD17704を、後述の北側柱抜取穴に分断された状態で検出した。これは北側柱位置にあたり、地覆の抜取溝と考えられる。規模が大きいことからみて、北側柱位置で池底からかなりの段差で垂直に立ち上がり、汀線の化粧を兼ねていたか。

SB17700の北側柱は、いずれも長径（南北）3.5～3.7m、短径（東西）1.2～1.3mの長楕円形の大規模な穴を掘って南に抜かれている。あえて建物内側方向に抜いたのは、池側の低い方向を避けたためであろう。また、抜取穴の長径が長いのは、北側柱の立つ池底と身舎南半の建つ池

図29　第284次調査北区　全景（東から）

| 遺構名 | 標高 |
|---|---|
| L字溝SD9272B底石上面 | 61.00m |
| 蛇行溝SD5850底石上面 | 61.15m |
| 下層池底石敷SX17705上面 | 60.75～60.80m |
| 下層池底バラス層上面 | 60.90m |
| 最上層洲浜SX17710上面 | 61.05～61.15m |
| SD9272C溝底 | 61.10m |

表7　各時期の園池・排水溝の標高の比較
（Y=-17,865）

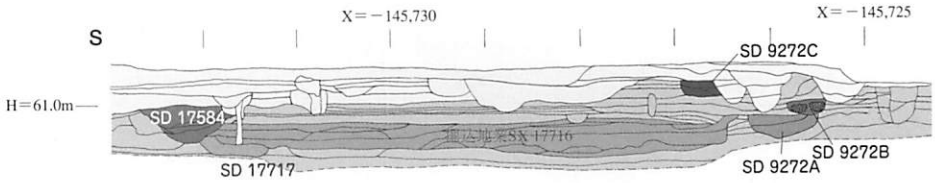



図30（1）　南面大垣～園池南岸建物にかけての断面図（Y=-17,865）1：80

南岸の間にかなりの比高差（段差）があった証拠といえる。なお、抜取穴の埋土は多量の檜皮を含むが瓦を含まず、SB17700は檜皮葺の可能性が考えられる。

一方、北縁は通常の掘立柱で構成されている。掘形を掘るのに必要な部分だけ下層石敷SX17705を破壊し、その石を掘形内に放り込んでいる。掘形の埋土に黒褐色砂が入るのが特徴で、掘形の現存深さは60～70cm、北側柱の約半分の深さである。

なお、SB17700北側柱の抜取穴は、上層池SG5800Bの池底のバラス（後述のようにγ期にはさらにこのバラスの上面に洲浜SX17710が造成される）を壊して掘られているが、前述の掘込地業SX17701はこの上層池底のバラスに覆われている（図27）。これは下層建物SB17582の北側柱と同様の手法である。掘込地業の造成をおこないSB17700の北側柱を立てた後、上層池底を整備しており、SB17700が上層池SG5800Bと併存したことがわかる。

**〈γ期〉** SB17700を撤去し上層園池SG5800B南岸西部を改修する時期。

**SX17710**　上層園池SG5800B南岸の岬以西の洲浜に見られるバラス敷き。この部分の洲浜は、他の部分の洲浜に比べて石が大ぶりで揃っており、工程の違いと考えられていたが、今回これは時期差であると判明した。すなわち、SX17710は前述のSB17700北側柱の抜取穴を覆う暗灰褐色土層の上面に造成されており（図28）、SB17700とは併存しない。SX17710整備後の池の外側にあたる部分にも、SB17700北側柱位置まで上層池底のバラス層が広がっているから、β期にも池南岸の汀線は建物に沿う直線的なものであったことがわかる。従来上層園池SG5800B当初から存在すると考えられていた湾曲する洲浜SX17710は、SB17700撤去後に建物のなくなった空白部分の汀線に変化をもたせるため、建物跡部分を中心に改修したものなのである。

**②その他の遺構**

**SD9272**　東院園池およびその周辺の排水と、南面大垣SA5505の北雨落溝を兼ねる東西溝。第120次調査で確認したように、SD9272には3時期の変遷がある。本調査では、SD9272Aを断面観察で、石組溝SD9272B、SD9272Cを平面的に検出した。

SD9272Aは現存幅約75cm、深さ約25cmの素掘りの東西溝。SD9272B（第44次調査のSD5835）は、SD9272Aを埋め立てた上に造成した石組の東西溝で、底石が現存する。今回新たに底石3個を検出した。また、断面観察により南北両岸の側石の抜取溝を確認した。側石を含めて溝幅約1m、現存深さ約30cm。池南西隅からの排水用石組南北溝SD9275に接続してL字形を呈する。SD9272C（第44次調査のSD5920）は、SD9272Bを南に溝幅ぶんずらして掘削した東西溝で、北岸の側石が残る。現存幅約40cm、深さ約15cm。バラス混じりの埋土を特徴とする。

**SD5850**　園池南西隅からの排水を流す石組蛇行溝。従来は南北溝SD9275とともに同時期に下層園池SG5800Aに取り付くとみて、L字形を呈するSD9275＋SD9272Bを平常時の排水溝、SD5850を曲水の宴用の流坏渠としてきたが、第276次調査によって、SD5850の方が層位的に上層で、両溝が併存しないことがあきらかになった。本調査区内のY＝-17,865ラインでの比較でも、SD5850の底石の標高はSD9272Bより15cm高い（表7）。本調査では、土層観察用の畦として残した部分を除いて、約10個の底石を新たに検出し、その蛇行状況を確認できたが、園池南岸建物との併存関係を層位的にあきらかにすることはできなかった。

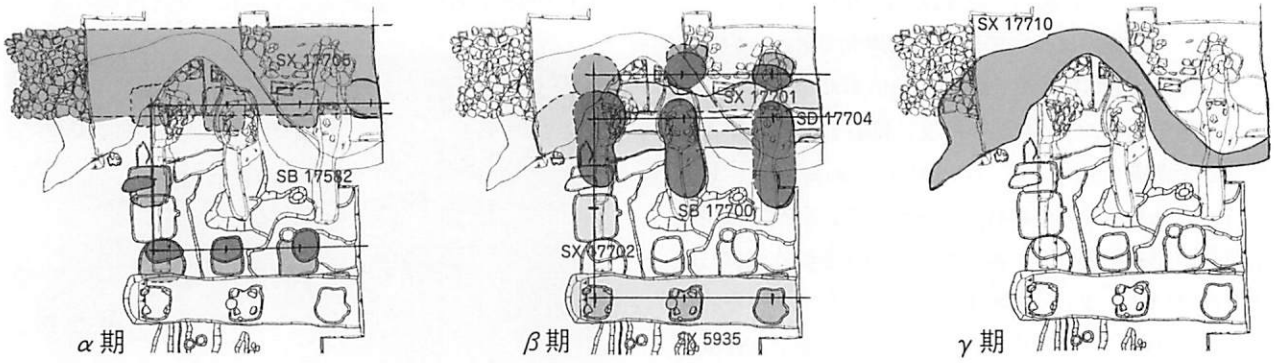



図31　東院園池南岸建物変遷図

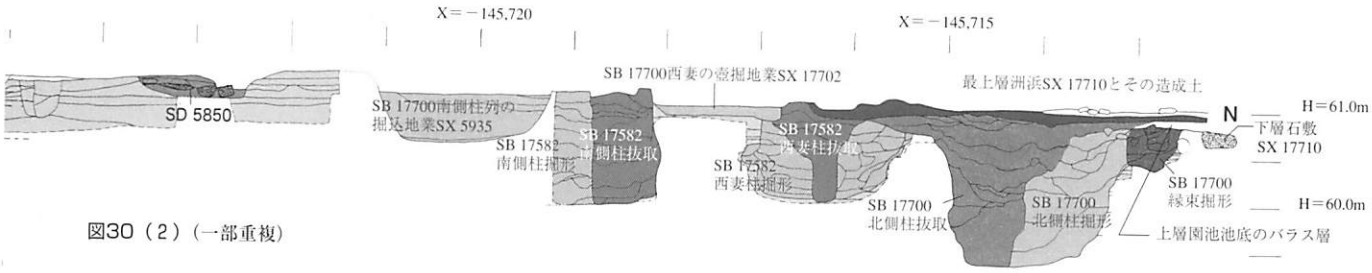


図30（2）（一部重複）

ただし、園池南岸の建物の遺構変遷との対応からいうと、従来のようにSD9275＋SD9272B（以下L字溝とする）とSD5850（以下蛇行溝とする）をいずれも下層園池SG5800Aの時期とみるのではなく、L字溝を下層園池SG5800Aの時期（前述のα期）、蛇行溝を上層園池SG5800Bの前半の時期（前述のβ期）とみる方が自然である。ここで、α～γ期の各時期の園池底面・排水溝底面の標高を一覧すると（表7）、L字溝から蛇行溝へは15cmもの底面の上昇があり、下層園池の時期内にこれに対応する水位の上昇があったとは考えにくい。むしろ、L字溝から蛇行溝への底面レヴェルの上昇は、下層園池から上層園池への底面レヴェルの約15cmの上昇によく対応するとみるべきであろう。従来蛇行溝を下層対応と考えてきた根拠は、上層園池の復原水位と底石上面の標高がともに61.15mで、蛇行溝に常時の水流がなかったとみられることである。しかし、上層園池の復原水位は本調査のγ期に相当する時期のものであり、また蛇行溝は溢水時に水流があればよく、常時の水流を想定する必要は必ずしもない。従って、蛇行溝を下層園池にともなう排水溝とみて、L字溝から蛇行溝への園池南西部における排水溝の付け替えを、下層園池時期内の改修とみる積極的な根拠はないと考える。以上、蛇行溝SD5850はβ期、すなわち上層園池SG5800B当初の時期の遺構の可能性が高い。

**SX17715**　園池西岸の岬の南側で、池底のバラスが円形に乱れた部分を2ヶ所検出した。断割の結果、現存深さは深い北側のものでも15cm程度と浅かったが、園池南岸建物へ渡るための橋の遺構の可能性もある。

**SX17706**　園池西岸の岬の付け根部分南側に残るチャートの景石群。これらの景石が原形を保っているかどうか（現状では地面に水平な状態であるが、本来垂直に立てられていた可能性を含めて）の確認のため、景石下部にトレンチをあけた。その結果、池底のバラスは石の下にはおよばず、石の下には水田耕土が入っていない状況を確認できたが、池底のバラスが現状のように池底にたまった時期についてはなお検討を要する。また、岬の南斜面の傾斜と同じ傾斜で南下がりに景石がのり、しかも岬側の高い方の下部に拳大の石が入っているのは景石の据え方としては不自然である。また、凸凹が激しく景石として見映えのする面が下面になっている。これらの点から、景石群SX17706は原形態を保っていないと結論づけたが、この解釈についても意見が分かれ、その後SX17706周辺で第284次補足調査を実施したので参照されたい(35頁)。

南区の遺構

南面大垣部分では、大垣基礎の掘込地業SX17716、大垣南雨落溝SD9375とその下層の東西溝SD17717などを検出した。また壕地以南では、二条条間路北側溝SD5200A・Bの他、壕地上で建物5棟、2時期の南北溝などを検出した。

**①南面大垣関連遺構**　南面大垣部分は約10mぶんを調査できたにとどまる（断面図は図30参照）。

**SA5505**　東院南限を画する築地塀。北面の犬走りは積み土がよく残っているが、築地本体以南は後世の削平により築地本体の積み土はほとんど残らない。第276次調査同様、築地下部で掘込地業SX17716を検出した。幅約6m、現存深さ約30～40cmで、掘込の底の標高は60.5～60.6m。砂や粘土の混じった暗灰褐色の粘質土が主体で一層の厚さも10cm近くあり、あまり締まった状態ではない。

**SD9375**　SA5505の南雨落溝。幅約60cm、現存深さ約25cm。堆積土は瓦を含む砂質土。平安時代初頭まで存続。

**SD17717**　SD17584下層の東西溝。幅約50cm現存深さ約30cm。上部をSA5505の掘込地業SX17716に覆われており、築地塀SA5505造成以前のもの。大垣断面の他、調査区東部で約3mにわたって平面的にも検出したが、東にいくほど浅くなる。東院南門SB16000以西では築地塀SA5505に先行する掘立柱塀SA5010を確認しており、門以東にこれが延びるかどうかが課題になっていた。SD17717はSA9272Aとともに大垣に先行する何らかの区画施設にともなう可能性があり、本調査区内でも東西約6mにわたって大垣心の位置に断割トレンチを入れたが、区画施設そのものは確認できなかった。第276次調査の成果も同様であり、また本年の第280次調査で東院東南隅部分でも下層区画施設の柱穴がないことが判明したので、排水施設としてSD17717やSD9272Aが掘られたものの、SB16000以東の区画施設は当初から築地塀が造成されたことになる。

**②壕地以南の遺構**　壕地以南の遺構は、二条条間路北側溝SD5200の改修によって大きくⅠ～Ⅳの4時期に分けられるので、初めにSD5200の変遷（図32参照）について述べてから、各時期の遺構を紹介する。

SD5200Aは、遷都当初に掘られた二条条間路北側溝で、

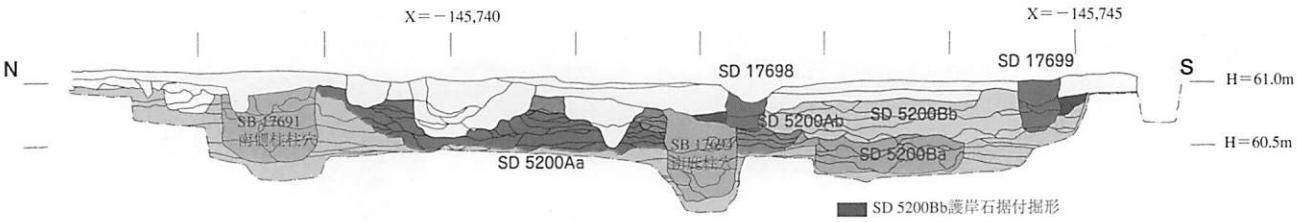



図32　二条条間路北側溝SD5200断面図　1：60

西隣の第120次調査において初めて確認したものである。今回新たに第44次調査区と第120次調査区の間で20mぶんを検出した。平面的には確認できなかったが、断面観察によると当初の溝（SD5200Aaとする）と、これを北岸で約1.7m南にずらした浅い溝（SD5200Abとする）の2時期がある。SD5200Aaは幅3m現存深さ50cm、SD5200Abは幅1.6m現存深さ30cmである。いずれも後述のSD5200Bに破壊されていて当初の幅は不詳。第120次調査で和銅および養老の年紀のある木簡が出土しており、今回も養老六年の年紀のある木簡（後述の木簡②）が出土した（出土位置・層位からみてSD5200Aa）。但し、郷制下の可能性がある荷札木簡も出土している（木簡③）ので、SD5200AbからSD5200Baへの改修が天平12年以降に降る可能性も全く皆無ではない。

SD5200Bは、SD5200Aを南に約3mずらして掘り直した東西溝である。従来石組の護岸をともなうことが知られていたが、後述のように、この護岸石の据付掘形（裏込め）が壕地上の最も新しい建物SB17694の掘形より新しいので、壕地のスペースを南に広げて建物を建て、かつSD5200Bが石組でない時期があったはずで、これをSD5200Ba、従来の石組溝SD5200BをSD5200Bbと称することにする。

SD5200Baは、溝下部の2段掘りになっている部分がその痕跡と考えられるが、基本的にはSD5200Baの位置を踏襲してSD5200Bbへの改修がおこなわれ、その際にSD5200Baはほとんど失われたと考えられる。

SD5200Bbは、東隣の第44次調査区西端では両岸に護岸石が1段現存していたが、今回の調査区内では、南北両岸とも護岸石は全て抜き取られており、その抜き取りのための東西溝SD17698・SD17699を確認した。いずれも中世以降の耕作にともなうものであろう。

次にこれらに対応する各時期の様相について述べる。

〈Ⅰ期〉SD5200Aaに対応する時期である。和銅・養老の木簡が出土しており、奈良時代初頭の時期である。この時期には壕地は空閑地であった。

〈Ⅱ期〉SD5200Abに対応する、奈良時代前半の時期である。この時期も壕地は空閑地である。

〈Ⅲ1期〉Ⅲ期はSD5200Baが機能していた奈良時代半ばから後半の時期である。その正確な開始年代は未確定で

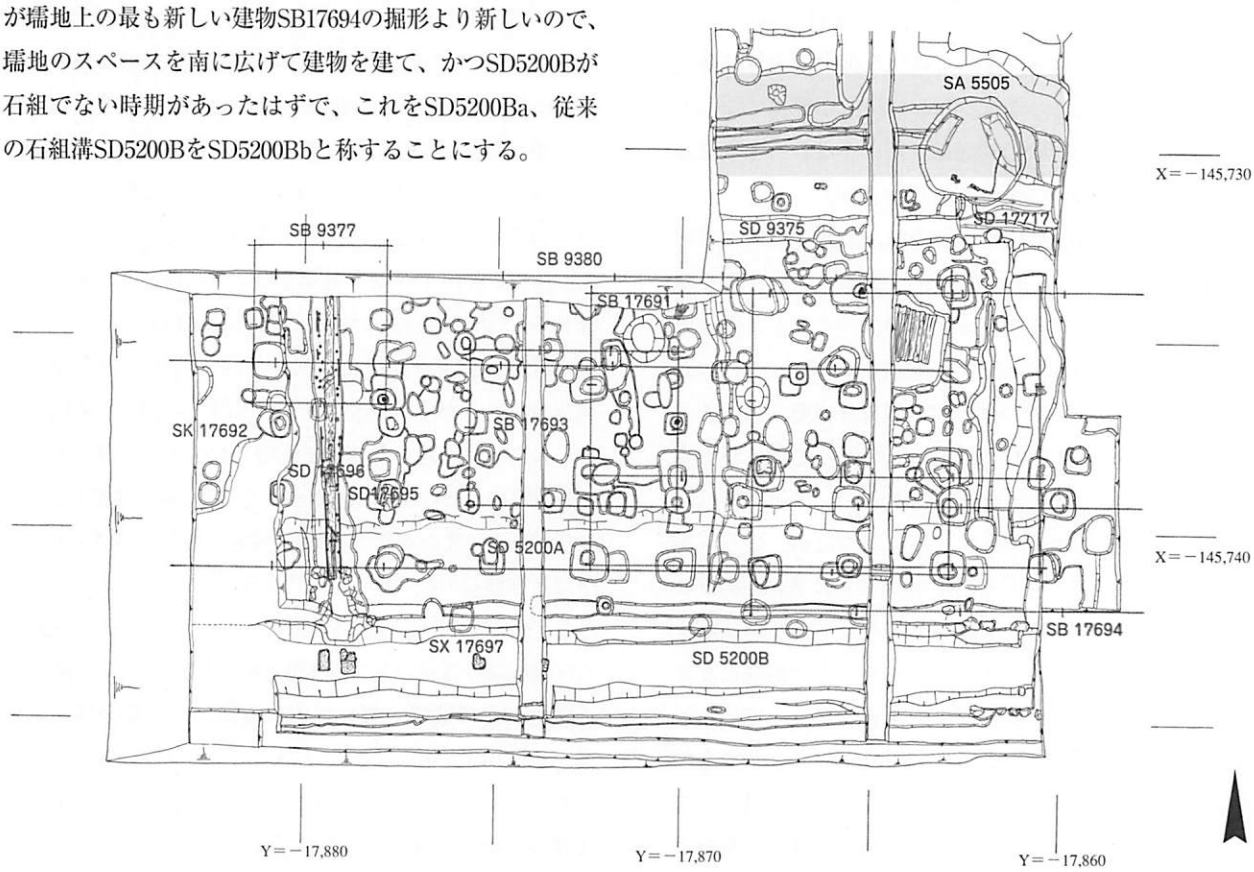



図33　第284次調査南区　遺構平面図　1：200

あるが、恭仁遷都前の天平年間前半と考えておく。

Ⅲ期には、Ⅱ期の二条条間路北側溝SD5200Abを埋め立て、新たに約3m南にずらしてSD5200Baを掘削する。その結果、南北幅の広がった墻地には比較的密集して建物が建てられる。Ⅲ期には切り合い関係から概ね4時期にわたる変遷があり、これらをⅢ1期からⅢ4期とする。

**SD17695**　調査区西部で検出した墻地上を横切る南北溝。両岸に板の護岸が部分的に残る。この溝を造り替えた後述のSD17696とともに、南面大垣の南雨落溝SD9375の排水を二条条間路北側溝に流すためのバイパス的な溝。幅は調査区北端で50cm、南端で35cm、現存深さ約30cm。護岸板の掘形まで含めると幅約60cm。溝の内側で護岸板を固定するための杭を、東岸で17本、西岸で18本検出した。瓦・土器を含む砂礫で一気に埋め立てている。埋土から帯金具2点と平城宮土器Ⅱ期の土器が出土した。

なおSD17695は、南面大垣下の暗渠南北溝SD9281と大垣南雨落溝の合流点のやや東から南下すると考えられる。

**〈Ⅲ2期〉**　平城遷都から天平勝宝年間頃の時期である。

**SB9380**　墻地上に建つ掘立柱東西棟建物。桁行8間×梁間2間の身舎に北庇が付く。柱間は桁行方向が10尺等間、梁間方向が9尺等間、北庇の出は8尺。第120次調査で桁行2間以上×梁間3間として検出していた遺構。西妻から2間ぶんは第120次調査区内で、今回新たに6間ぶんを検出した。北庇柱穴のうち、西より3～6番めの4基は調査区外となり未確認。柱穴掘形は不整形であるが、深さは現状で80cmから100cmあり、本調査区内にある遺構では最も深い。

**SB9377**　調査区西部で検出した、墻地上に建つ2間×2間の掘立柱建物。柱間は南北方向は7尺等間、東西方向は6尺等間。第120次調査で西辺の柱穴のみ検出していた遺構。北面の柱穴は第120次調査区にかかるが、その中央の柱穴は未確認。南東隅の柱穴には柱根が残存。南面中央の柱との関係から、南北溝SD17695よりは新しく、南北溝SD17696よりは古い。Ⅲ3期への過渡期の建物か。

**〈Ⅲ3期〉**天平宝字年間頃の時期である。

**SB17691**　調査区東部で検出した、墻地上に建つ掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁間2間の身舎に南庇が付く。柱間は8尺等間、南庇の出も8尺。柱掘形は一辺80～90cmの隅丸方形で、本調査区内では最も大ぶりながら現存深さは60～90cmと比較的浅い。東妻、身舎の南東隅、北側柱列の西から2基めの各柱穴では、断割により礎板を確認した。なお、このうち北側柱列の西から2基めの柱抜取穴からは、軒瓦が9点まとまって出土した。第120次調査区のSB9390Aと併存か。

図34　二条条間路北側溝SD5200Bと墻地上の建物（東から）

**SD17696**　調査区西部で検出した墻地上を横切る木樋による南北溝。SB9377廃絶後、一部に瓦を敷き地堅めをした上にSD17695と同じ位置に設ける。木樋は腐蝕が著しいが、一木刳り抜き（半截か）で南北に2本現存。幅25～30cm、長さは北側のもの4.5m、南側のもの3.0m。

**SX17697**　南北溝SD17695・SD17696の南延長上のSD5200溝底に据えられた凝灰岩2基。南北溝からの排水によってSD5200溝底が抉れるのを防ぐための設備か。

**〈Ⅲ4期〉**天平神護・神護景雲年間頃の時期である。

**SB17693**　調査区中央で検出した墻地上に建つ掘立柱東西棟建物。桁行3間×梁間2間、柱間は桁行方向6.5尺等間、梁間方向7尺等間。東妻柱穴には柱根残存。南西隅の柱穴から平城宮土器Ⅳ～Ⅴ期の土器が出土した。

**SB17694**　調査区東端で検出した墻地上に建つ掘立柱東西棟建物。桁行3間以上×梁間2間の身舎に南庇が付く。柱間は桁行方向9尺等間×梁間方向9.5尺等間、南庇の出も9.5尺。第44次調査区内に延び、東妻は未確認。北側柱の西から2基めの柱穴には柱根残存。南庇の西から2基めの柱穴から木簡1点出土。SB17691の建て替えで、第120次調査区のSB9390Bと併存か。SB17694は南区内では最も新しいが、南庇の柱穴が石組溝SD5200Bbの北岸護岸石据付掘形に壊されていることを2ヶ所で確認した。SB17694はSD5200Bbとは併存せず、従って石組溝SD5200Bbの時期には墻地上の建物は全て撤去されていたことになる。

**〈Ⅳ期〉**SD5200Bbが機能していた、奈良時代末期の楊梅宮以後の時期である。再び墻地は空閑地となる。

**〈その他〉**時期不明の遺構である。

**SK17692**　調査区西辺の第120次調査区内の円形土坑。直径50cm、深さ約20cm。木簡1点出土。

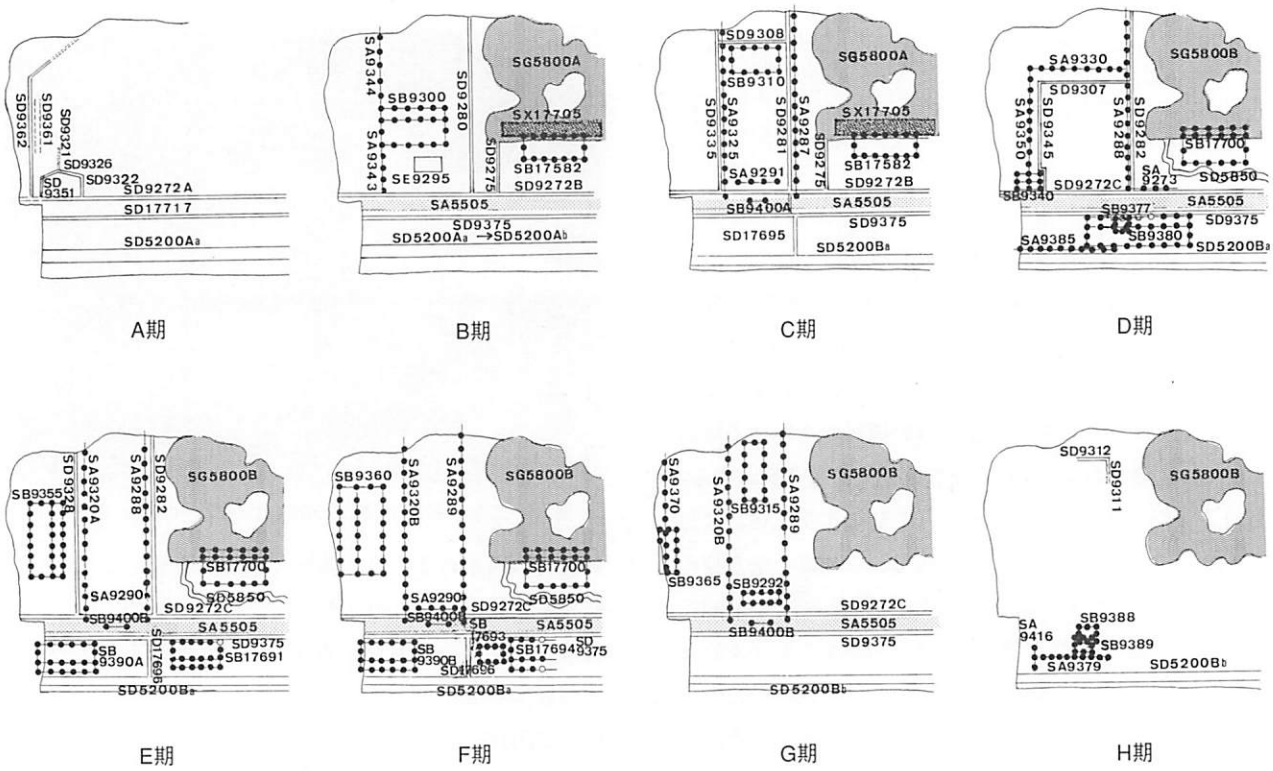



図35　東院園池南西部周辺遺構変遷図

| 第120次調査所見 | A | B | C | D | E | F | G | H |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本調査の北区 | | α | | β | | | γ | |
| 本調査の南区 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ1 | Ⅲ2 | Ⅲ3 | Ⅲ4 | Ⅳ | |

表8　時期変遷対照表

北区と南区の遺構変遷の対応関係

北区と南区は南面大垣で分断されており、層位的な対応の確認はできないが、北区と南区の遺構変遷の時期的な対応関係を、第120次調査の遺構変遷（『年報1980』による）と対応させて整理しておく。

**〈A期〉** 平城遷都直後。東院南面の区画施設は未造成であるが、排水のための２条の東西溝SD9272A・SD17717、および二条条間路北側溝SD5200Aaを掘る。この時期には東院園池も未造成。

**〈B期〉** 和銅～神亀年間。掘込地業をともなう南面大垣SA5505を造成し、その北側に下層の東院園池SG5800Aを造る。その南西隅からは排水のための南北溝SD9275が南流し、これに接続すべくSD9272Aを石組溝SD9272Bに造り替え、大垣の北雨落溝と池の排水溝を兼ねる。また、SG5800A南岸には、掘立柱東西棟建物SB17582を建て、池に張り出す北側柱は石敷SX17705で化粧する。一方、SD17717を大垣南雨落溝SD9375に造り替え、この時期の最終段階までに、二条条間路北側溝SD5200AaをSD5200Abに改修する。

**〈C期〉** 天平前半から恭仁遷都まで。SG5800AはB期を踏襲する。南面大垣SA5505に穴門SB9400Aを開け、東院園池西辺を限る南北塀SA9287の西雨落溝SD9281を、SB9400Aの東を暗渠で南に抜けて南雨落溝SD9375に接続させる。一方、二条条間路北側溝SD5200Abを南にずらしてSD5200Baに改修し瑞地を拡張する。また、瑞地を南流しSD9375とSD5200Baとをバイパス的に結ぶ板の護岸をもつ南北溝SD17695を設ける。

**〈D期〉** 平城還都から天平勝宝年間頃。東院下層園池SG5800Aを上層園池SG5800Bに改修し、これにともなって南岸建物SB17582も礎石・掘立柱併用の特異な構造をもつ北縁付き東西棟建物SB17700に建て替える。池南西部からの排水溝SD9275を撤去し、かわりにほぼ同位置から蛇行する石組溝SD5850を設ける（園池南岸の状況は以下Ｆ期まで踏襲。なお、従来の見解ではSD5850への付け替えはC期）。SD9275に接続していた大垣北雨落溝SD9272Bを9272Cに改修する（従来の見解ではC期）。C期に拡張された瑞地上の南北溝SD17695を埋め立て、一旦SB9377を建てる。その後これを撤去し北庇付き東西棟建物SB9380を建てる。瑞地南限のSD5200Ba際の東西塀SA9385も同時期で、目隠塀的機能を果たしたか。なお、南面大垣の穴門SD9400Aは一旦閉じられる。

**〈E期〉** 天平宝字年間頃。南面大垣に再び穴門を設ける（SB9400B）。C期のSD17695の位置に、木樋による南北溝SD17696を設け、瑞地上の建物をSB17691に建て替える。穴門SB9400Bを挟んだ西側にも同規模の南庇付東西棟建物SB9390Aを建てる。

**〈F期〉** 天平神護・神護景雲年間頃。E期を踏襲するが、瑞地上の建物SB17691をSB17693とSB17694に、SB9390AをSB9390Bに建て替える。SD17696は存続する。

〈G期〉宝亀年間以降。園池南岸の建物SB17700を撤去し、その跡地の園池南岸の汀線を大きく湾曲させて、新たに大ぶりの石を用いた洲浜SX17710を造成する。これにともない、蛇行溝SD5850もこの時期に埋め立てたと考えられる（従来の見解ではD期）。一方、壖地上の建物と南北溝を全て撤去して本来の空閑地とし、二条条間路北側溝SD5200Baを石組護岸をもつSD5200Bbに改修する。

〈H期〉奈良時代末から平安時代初頭。壖地上に再び小規模な建物や塀を建てる。なお、第120次調査の変遷図にみえる建物のうち、SB9376は本調査区では確認できず、またSB9377は壖地上の南北溝との関係からC期からD期への過渡期の建物と考えた。

以上、今回の第284次調査の成果に基づく試案として呈示しておく。（渡邊晃宏）

出土遺物

**①木製品・金属製品**（図36）　木製品はSD5200Aから20点、SD5200Bから12点など、合計50点出土した。以下に代表的なものを示す。いずれもヒノキ製。1は馬形。SD5200A出土。2は斎串。やや厚めの板を粗く削った大型のもの。布掘地業SX17701出土。ここからは同様の大型の斎串がもう3点出土している。3は人形。SD5200B出土。4・5は不明部材。いずれも2ヶ所穿孔されている。4は出土地点不明、5はSD5200B出土。6は不明木器。端部を欠損するが、尖端をもつ事例が他の遺跡で散見される。SD5200A出土。7は容器の蓋。蓋本体に方形の穿孔を施し、つまみを差込み、木釘で留めている。SD5200A出土。

8・9は銅鋳帯金具。8は平板形式の巡方表金具。9は鉈尾裏金具。先端の孔は開け損じたためか、2孔。基部の2孔には折損した鋲足をとどめる。いずれもSD17695出土。（加藤真二・次山　淳）

**②土器**　SD5200を中心にコンテナ23箱ぶんの土器が出土したが、ほとんどが小片である。

SD5200Aでは量が少なく、年代を判別する資料に乏しい。SD5200Bは本報告において石組護岸の施工以前と以後の2時期に分けている。この点を土器についてみると、石組護岸後のSD5200Bb堆積土内では平城宮土器Ⅳ～Ⅴ期と考えられる土師器坏等が出土している。一方護岸施工以前の層からは土器がほとんど出土していないものの、護岸石の裏込めから平城宮Ⅲ期と考えられる土師器坏、須恵器蓋等が出土しており、2時期に分ける調査所見を裏づけるものとなり得る。ただ、いずれも小片であり、確実な時間差の指摘は今後の調査成果をまちたい。

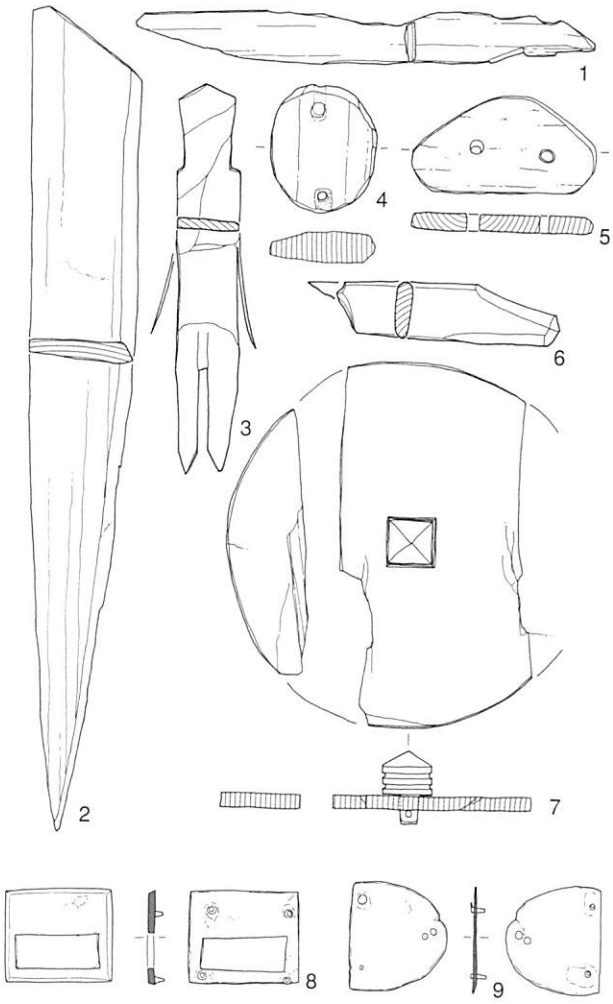


図36　第284次調査出土　木製品・金属製品実測図
（1～7は1：3、8・9は2：3）

奈良時代以降の遺物では、築地南雨落溝の上層から、灰釉陶器椀の破片が出土した。（金田明大）

**③瓦塼類**　新規に調査した南区の瓦塼類の様相を記す。

軒瓦は南面大垣SA5505の南側で20点、SD5200付近で25点、壖地部分で41点が出土した。

SA5505南側では6225Aが4点、6721Gbが6点と多いが、この付近でのSA5505の軒瓦の組み合わせとは断定できない。既に竣工したSA5505の復原建物では6308B－6663Aを葺くが、本調査では1点ずつしか出ていない。

SD5200Bからは軒丸瓦8点、軒平瓦7点が出土した。うち11点が養老～天平勝宝の瓦で、東院南門SB16000C所用の6311Da、東院玉殿所用と推定される6151Aの同笵品が1点ずつ含まれる。

Ⅲ1期のSD17695の掘形から6664F、同埋土から6284Ec・6308B・6664Cが出ており、恭仁遷都前との所見と合致する。

Ⅲ3期（天平宝字頃）のSB17691の抜取穴から10点、Ⅲ4期（天平神護・神護景雲頃）のSB17694の掘形から

第二八四次調査出土木簡

**SD五二〇〇A出土木簡**

①［符ヵ］［駅ヵ］
・□山陽道□長等□　(142)・(11)・3　081
・「□　」

②・若狭国遠敷郡野□□□□［郷嶋田里ヵ］
・養老□　□□　174・14・3　031
［六　八月ヵ］

③・［遠佐郷ヵ］
近江国印勘郡□□□　179・28・4　033
・穴太子人俵

④・□右美作国英多郡
・秦人部□万呂三斗［□□］　(129)・18・3　059

**SD五二〇〇B出土木簡**

⑤　」郡野田郷膳部□」　(197)・28・7　081

**SD五二〇〇Bb北岸護岸石裏込め出土木簡**

⑥・「　」□□□
・　養老四年八月一□　(203)・19・4　081

⑦　貽酢　111・(20)・2　031

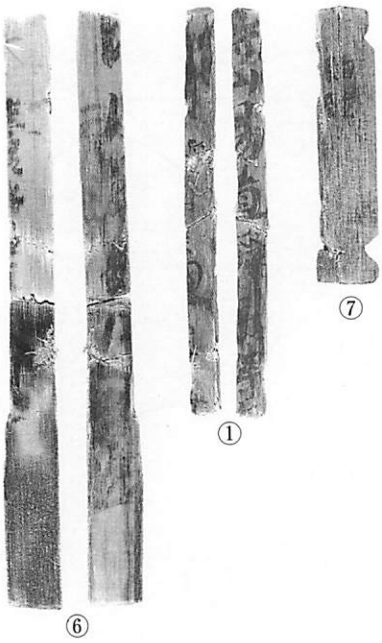


図37　第284次調査　出土木簡

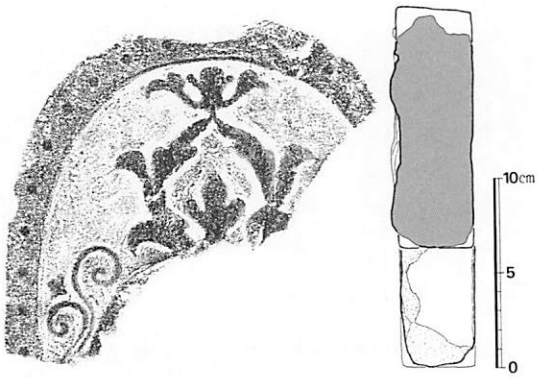



図38　第284次調査　出土鬼瓦実測図　1：4

| 軒丸瓦 | | | | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 404.6kg |
| 6132 | B | 1 | 6313 | Ab | 1 | 6641 | F | 1 | 点数 | 3,104 |
| 6133 | D | 4 | | H | 1 | 6663 | A | 1 | 平瓦 | |
| | M | 1 | 6314 | B | 1 | | B | 1 | 重量 | 1202.6kg |
| | ? | 2 | 型式不明 | | 16 | | C | 6 | 点数 | 8,311 |
| 6151 | Ab | 1 | | | | 6664 | C | 2 | 塼 | |
| 6225 | A | 5 | | | | | D | 2 | 重量 | 32.9kg |
| | ? | 1 | | | | | F | 4 | 点数 | 28 |
| 6273 | A | 1 | | | | 6666 | A | 2 | 凝灰岩 | |
| 6281 | Ba | 2 | | | | 6685 | B | 3 | 重量 | 3.5kg |
| 6282 | B | 2 | | | | | C | 1 | 点数 | 5 |
| | Ca | 1 | | | | 6688 | Ab | 1 | 道具瓦・その他 | |
| | E | 2 | | | | 6691 | A | 2 | 刻印瓦 | 18 |
| | G | 1 | | | | 6694 | A | 1 | 面戸瓦 | 2 |
| | Ia | 1 | | | | 6721 | C | 3 | 鬼瓦 | 1 |
| | ? | 1 | | | | | Ga | 13 | | |
| 6284 | Ec | 3 | | | | 6726 | E | 1 | | |
| 6308 | A | 3 | | | | 6732 | C | 3 | | |
| | B | 1 | | | | | ? | 1 | | |
| | D | 1 | | | | 6759 | 新 | 1 | | |
| 6311 | Aa | 1 | | | | 型式不明 | | 8 | | |
| | Ba | 2 | | | | 中近世 | | 1 | | |
| 軒丸瓦計 | | | | | 56 | 軒平瓦計 | | 58 | | |

表9　第284次調査　出土瓦塼類集計表

2点、同抜取穴から3点の軒瓦が出土したが、いずれも建物の年代より古い天平勝宝以前の瓦のみで、型式も1型式1点が多くばらつく。

新型式の唐草文鬼瓦が1点ある（図38）。復元幅23cm、復元高19cm、厚4cmの小型品で、宝相華文を表す。主文様は肉厚で、中央下方に上向き三葉形を置き、その両側から内包するように半葉状の対葉が伸びて頂点で接する。脚部には枝分かれする蔓の間に三葉を置く単位文様を突線で表現する。外縁は低い平縁で上面に疎らに珠文を置く。

刻印瓦が18点ある。うち16点が「理」である。瑞地部分に散在する。　（岩永省三）

**④木簡**　SD5200Aから19点、SD5200Bから1点、同北岸護岸石裏込めから2点、SK17692から1点、SB17694の南庇の西から2基めの柱穴から1点、出土地不明1点、計25点出土した。主なものの釈文を上に掲げる。

SD5200Bからの木簡の出土は今回が初めてである。③の印勘郡は伊香郡か。郷制の木簡であるとすれば、SD5200Aが天平中頃まで存続したことになり、SD5200Bへの改修とこれにともなうSD17695の設置年代がやや降る可能性もある。⑥の養老の年紀のある木簡は、本来SD5200Aの遺物であったものが、SD5200Bbの裏込めに混入したものか。

まとめ

第284次調査の主な成果を箇条書きにしてまとめとする。

①2時期にわたる東院園池南岸建物SB17582・SB17700をはじめ、大きく3時期にわたる園池南西部の様相とその変遷をあきらかにしたこと。

②東院南門以東では下層の東院南限区画施設が存在しない可能性が高くなったこと。園池の造成にともない、当初から築地塀が設けられたのであろう。

③瑞地上の建物の変遷をあきらかにし、二条条間路北側溝SD5200が石組護岸になる奈良時代末期には、瑞地上の建物が撤去され再び空閑地になることを解明したこと。

④二条条間路北側溝SD5200の4時期にわたる変遷を解明したこと。　（渡邉晃宏）

## 4　第284次補足調査

**調査の概要**　園池南西部の西岬において、現状の位置にある景石と岬築成の様子を検証するために、断割調査をおこなった。調査期間は11月10日～28日、断割トレンチは、面積約８㎡、分岐する形で設定し、分節する場所で便宜上１～５の番号をつけた（図39）。

トレンチ１の西部で東院庭園の園池造成の初期におこなわれた掘込み、いわゆる「逆L字形の池」の岸とみられる立ち上がりを再確認した。岸部分の地山は青灰白色または橙白色のシルト質で、この下に粗砂の地山を認める。掘込みの底はこの粗砂の地山で、地山の直上に青白色粘土層が薄く入る箇所があるが、基本的にこの地山の上には枝などを含む黒褐粘質土層を確認した。

同様にこの他の断割の所見も併せて層序をみると、この黒褐粘質土層の上に淡褐灰砂層、青灰白粘土層、黄色粘土層の順で層を成し、この粘土層の上に小石・砂の混じる灰褐土を積み、上層の洲浜敷の仕上げを施して岬を形成しているのを観察した。とくに黄色粘土層はトレンチ全体で面的な広がりを確認し、岬全体を傘のように覆っているものと考えられる。岬築成土および池から土器片が数点出土したが、時期を確認できるものはなかった。

**園池西南部西岬付近の池と岬形状の変遷**　粗砂の地山の上に積層する黒褐粘質土が、堆積なのか岬造成のための積み土なのかは、岸から離れた地点でも堆積らしい水平の天端をもたないなど、断面の様子だけでは明確に判断はできない。枝などを含み、場所によっては20cm近くの厚さをもつことから、この黒褐粘質土を堆積土と解釈すれば、逆L字形の池の掘込みは園池造営のための単なる一工程ではなく、ある程度の期間存続していたと考えられ、この付近での園池の変遷はおおまかに３時期を想定できる。

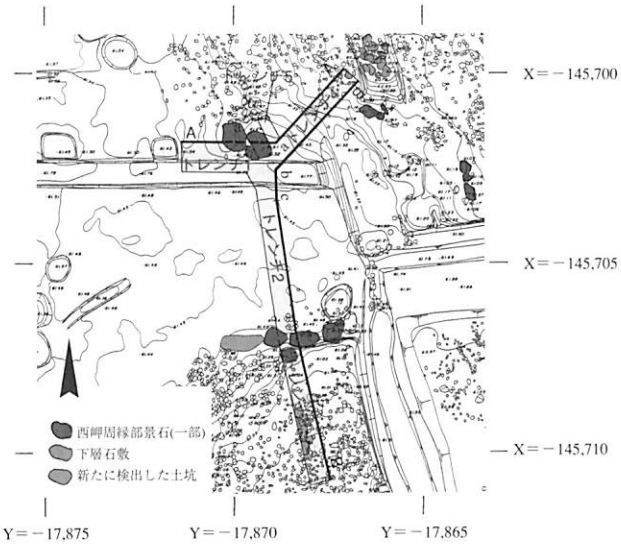



図39　第284次補足調査　トレンチ位置図　1：200

岬の築成土について、後期園池の復原水位61.15mに対して、前期に想定される水位の方がより高いという従来の説で考えると、黄色粘土層が止水の役割を果たしうるのは、せいぜい後期の園池においてである。試案としては、水位が下がって、それまでにできた池底の堆積が水面に見え隠れするところへ黄色粘土で止水、盛土をして岬を形成し、その上に後期の洲浜の仕上げをした可能性が考えられる。北側の景石２つについては、西側の片麻岩がこの洲浜の仕上層より下の層から掘り込んだ土坑に納まっているのに対し、東側のチャート（岬南岸にあるのと同様のもの）は洲浜の仕上層と片麻岩の納まる土坑を切り込んでいた。いずれの土坑中にも景石を支える根石などはなく、とくにチャートの納まる土坑が景石の据付穴なのか、景石を倒し込むために掘った穴なのかについては、岬南岸の景石と同様、本調査成果のみでは決定的な判断を下すことができなかった。

東院庭園は、前・後期にかけて複雑な空間構成の変化をとげており、園池の形状も前・後期の２時期では十分に理解できない。当時の園池・岬形状の築成方法や景石を据える位置・技術などに着目しながら、とくに園池の各所の地形造成の様子をつぶさに捉え直し、建物の建て替えなどと併せて、庭園全体の景観変遷像のなかで西岬築成を考えなければならない。　（平澤　毅）

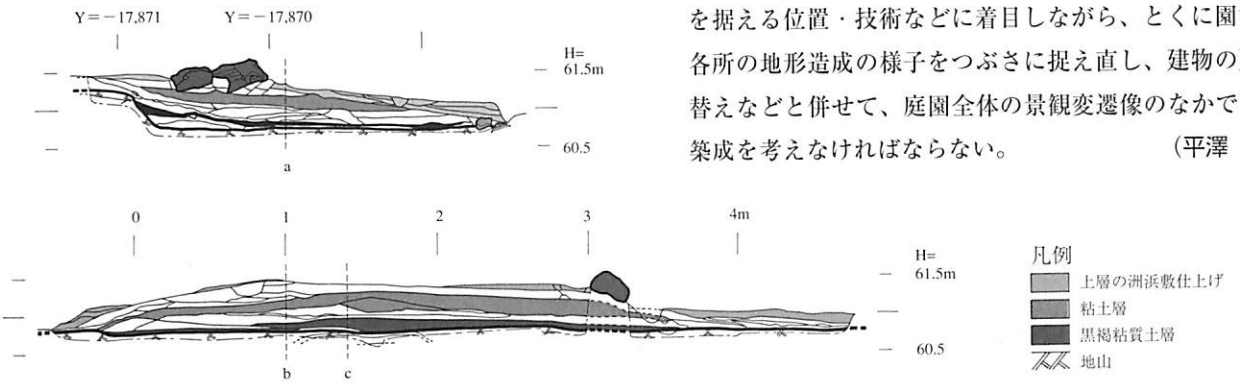



図40　断面図A-A'（上）、断面図B-B'（下）1：100

## 5　宇奈多理神社境内の調査（第283次）

宇奈多理神社門小屋・座小屋改築のための事前調査である。発掘位置は宇奈多理神社本殿の正面西側にあたり、曲尺形のトレンチ（61㎡）を設定し、東側に約７㎡の拡張をおこなった。トレンチの方位は、門小屋・座小屋のそれとあわせているので、東で北に約６度振れている。本調査区では、海抜65.4m前後で江戸時代の遺構、海抜65.0m前後で奈良時代の遺構がみつかった。

上層では、以下のような遺構を検出した。

**SX17660**　トレンチ北側の中央で東西にならぶ３個の石列。東で北に約12度振れる。両端の２つの石は上面が平らで、柱もしくは床束・縁束をたてた礎石と思われる。

**SX17661**　トレンチ北側の東壁際で南北にならぶ３個の石列。北で西に約12度振れる。SX17660の石よりも小振りだが、相接してならんでおり、地覆石の痕跡であろう。SX17661とSX17660はあきらかに直交しており、いずれも座小屋の前身建物遺構と思われる。

**SX17662・17663**　SX17662はトレンチ中央の東壁際から拡張区にのびる東西方向の５個の石列、SX17663は拡張区の東側で東西方向にのびる３個の石列である。石はSX17661よりもさらに小さい。いずれの石列も東で北に約12度振れるが、両者は直線上にならぶわけではなく、SX17663がわずかに南に位置する。解体された座小屋では、床下に石組の配水溝が通っていたが、SX17662・17663も、SX17661とSX17660で構成される建物の床下を通る溝の側石と推定される。

**SX17665**　SX17660の西端の石と中央の石の間に据え付けられた甕の底部分。上端の径が40cm、底径20cm、高さ22～31cm。据付位置からみて、胞衣壷的性格をもつ呪具の可能性がある。

**SD17666**　トレンチ西北隅西端の南北溝。長さ3.6m以上、幅約20cm。北で西に約６度振れる。解体された座小屋と同じ方位を示すので、近代の遺構と思われる。

**SX17667**　トレンチ北部西南隅でみつかった凝灰岩切石の破片。幅33cm、長さ36cm以上、厚さ15cmであり、基壇の化粧材であるのは間違いなく、下層遺構にともなう遺物であろう（この辺りの地山面はかなり高い）。

なお、上層検出面直上の包含層からは、寛永通宝２枚と18世紀の小皿が出土した。

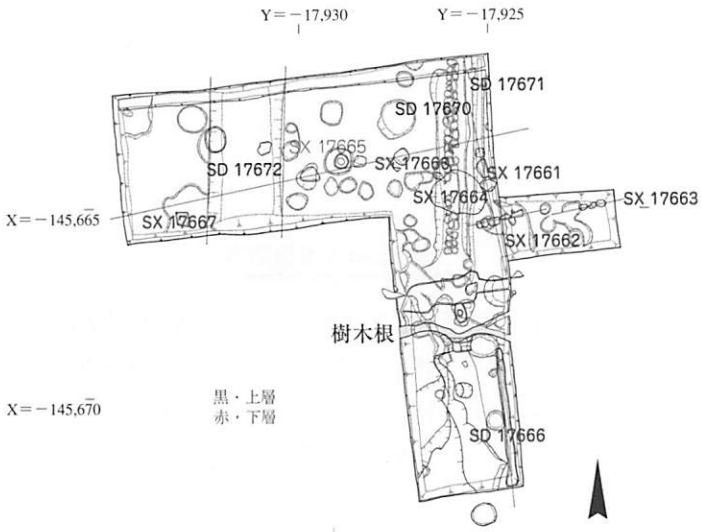



図41　第283次調査　遺構平面図　1：200

一方、下層では、溝状の遺構を３条検出した。

**SD17670**　トレンチ北東端の南北溝で、２列にならべた底石を残す。長さ510cm以上、溝の上端全幅が85cm前後、底石部分の幅約35cmである。底石の左右にある素掘状の部分は側石の抜取痕跡と思われる。

**SD17671**　SD17670の東側に近接してそれと平行に通る南北方向の溝状遺構。長さ550cm以上、幅25cm前後で、東の肩は北壁から約460cmの位置で東に折れる。ただし、拡張区では中世以降の攪乱が激しく、溝状遺構の続きを検出できなかった。このように不確定な状況ではあるが、SD17671は基壇地覆の抜取痕跡であり、底石の残るSD17670は基壇建物の雨落溝であろう。凝灰岩切石の破片SX17667も、この基壇建物に用いられていた可能性が高い。なお、東院南門SB16000Cの中軸線座標値はＹ＝－17,924.46であり、地覆抜取溝の心までは約80cmしかなく、ここに基壇建物が建っていたとしても、それは東院南門と中軸線をずらしていたことになる。

**SD17672**　トレンチ北西で検出した南北溝。幅約190cm、長さ330cm以上。北で東に約２度振れる。埋土が乾燥して遺物を含んでおらず、中世の空濠の可能性がある。

このほか土坑状の穴が数多く検出されたが、大半は樹木根の痕跡もしくは抜取穴である。また、トレンチの南半部では地山面が大きく沈み込んでおり、現状の宇奈多理の杜は、中世以降大量に盛土したことがわかる。

以上のように、宇奈多理神社の境内で、奈良時代の基壇建物跡がみつかったのは注目に値する。ただし、「東院玉殿」の決め手となる緑釉や三彩の瓦はみつからなかった。奈良時代の軒丸瓦は３点（6133Ab・6133B・6282G型式各１点）、軒平瓦は４点（6663A・6714A・6732・6760A型式各１点）出土した。　（浅川滋男）

# ◆東面大垣(東院地区)の調査―第286次

**はじめに**　宇奈多理神社上水道工事にともなう事前調査。調査地は、東院東南部と東面大垣の２ヶ所だが、前者は遺構の残りが悪いのでここでは省略する。面積は77.5㎡、期間は９月８日～12日。

**検出した遺構と出土遺物**　南北に長い調査区のほぼ中央に幅５㎝程度の灰白粘土が筋状に残る。周辺における従来の調査結果から、位置的にみてこれは東面大垣SA5900の築地堰板痕跡と考えられる。堰板痕跡の断面は若干東面大垣築地心々側（東側）に傾く。部分的に認められる幅の変化、屈曲、底面レベルの違いは、堰板単位を反映しているものと推定される。

堰板痕跡を挟んでその東西の土層はほぼ平行に縞状をなし、その下層は調査区内東西端まで一連の土層で、上層より単位の厚い縞状土層であった。本調査区は幅が狭いうえ、地山を確認することができなかったので断言はできないが、従来の調査結果からみて、東側が築地本体、西側は犬走り築成土、下層は掘込地業内にあたるものと思われる。

SS16303はSA5900の西側に沿って検出したピット群である。本調査区のすぐ南側にあたる第245-2次調査（平成５年度）でも同様の柱穴列を検出しており、一連のものと考えられる。調査区が狭いためか、掘形ははっきりしなかった。間隔はふぞろいであるが、位置的にみて築地添柱もしくは寄柱の可能性がある。

遺物は掘込地業内から軒丸瓦6314Ａ、6308Ｂ型式、塼各１点を含め、瓦塼類計35点が出土した。

**まとめ**　本調査では、堰板痕跡などを検出し、東面大垣の築造方法を知る手がかりを得た。また、掘込地業から出土した軒丸瓦は平城宮軒瓦編年Ⅱ-２期にあたり、東面大垣がつくられた年代の上限を示す資料として注目すべきものである。

（清野孝之）

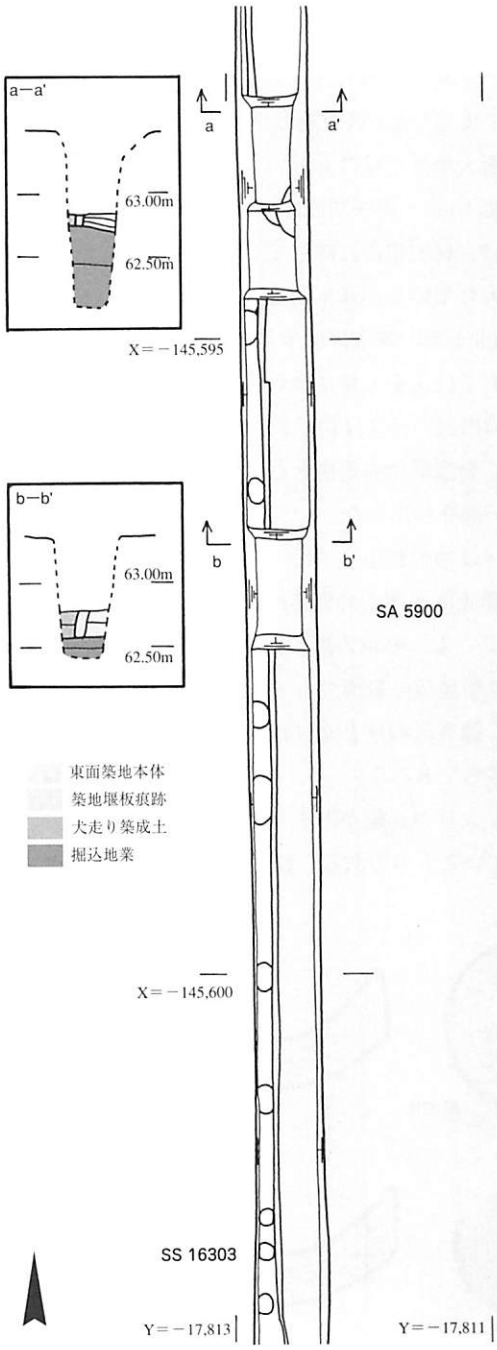



図42　第286次調査　遺構平面図　1：60

# ◆平城宮北西隅の調査―第282-7次

**はじめに**　本調査は個人住宅の建設にともなって、奈良市佐紀町で実施した。調査地は平城宮の北西隅にあたり、平城宮北面大垣推定線にも近い。調査面積は32㎡（東西8ｍ×南北4ｍ）、調査期間は9月12日～9月22日。

調査地は、住宅建設に際して表土等を除去した後、新たに土を入れている。基本的な層序は、置土の下、現地表下30～40cmで、調査区北半は礫を含む黄褐砂（地山）となり、南半は瓦を大量に含む黄褐粘質土の整地層となる。遺構検出面の標高は約72.8～72.7ｍである。

**検出遺構**　奈良時代の遺構としては、東西溝1条と掘立柱建物の一部を検出した。

SD17740は幅約1.2ｍ、深さ約15cmの東西溝。溝底の標高は、調査区西端が約72.5ｍ、東端が約72.4ｍで、東へ傾斜している。整地の際に、溝も同時に埋めている。SB17745は整地後の遺構で、8尺(約2.4ｍ)間隔で並ぶ2個の柱穴。調査区の東と北には続かない。掘立柱建物の一部になるのであろう。（小林謙一）

**出土遺物**　大量の瓦類が出土したが、ほとんどが整地土に含まれていたものである。軒丸瓦では6307Bが5点、6307Hが3点、軒平瓦では6727Aが1点、6727Bが10点あり、いずれも従来の出土数が少ない型式で注目される。したがって、6307B･Hのいずれかと6727Bが調査地近辺での組合せを示す可能性もあるが、『平城報告Ⅻ』では6307Bを平城宮軒瓦編年Ⅲ期前半、6307HをⅢ期後半、6727をⅡ期後半と、別時期にあてる点で問題がある。今後の当調査地周辺での出土傾向に注意する必要があろう。

（岩永省三）

**まとめ**　調査地は南に緩やかに傾斜する地形に位置しており、溝を境にして北側は地山が高く残っている。また、瓦類の出土も多いことから、そこに築地等があり、SD17740は、築地の南雨落溝であった可能性も考えられる。SD17740の溝心の座標はX＝-144,985.5であり、約400ｍ東方の第191-4次調査（昭和63年度）で検出した平城宮造営当初の北面区画施設の心は、X＝-144,971.5付近に位置している。したがって、SD17740を雨落溝とした場合、築地は宮内の官衙を区画するものであった可能性が高い。また、溝を埋めたのは、整地層出土の軒瓦から奈良時代後半と考えられる。（小林謙一）

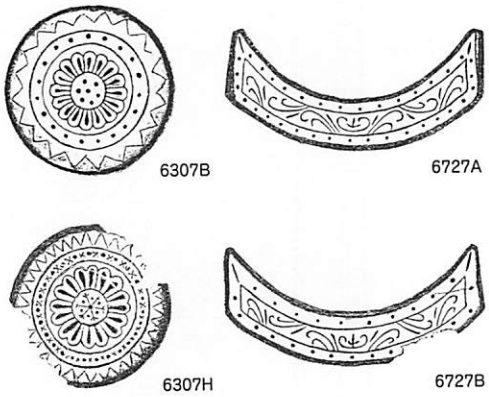



図43　第282-7次調査　出土軒瓦　1：8

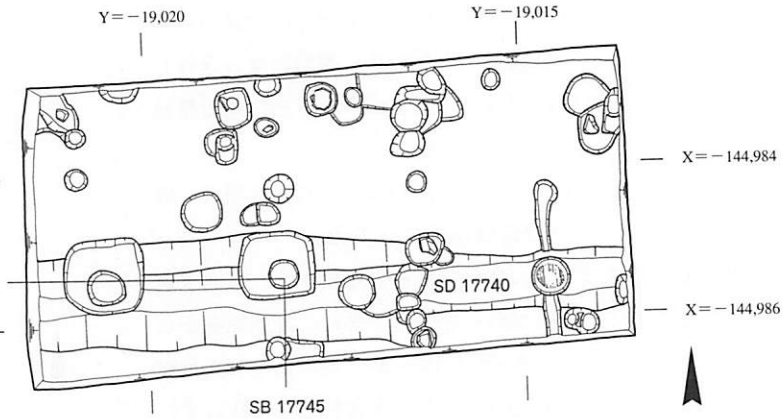



図44　第282-7次調査　遺構平面図　1：100

# Ⅱ 平城京等の調査

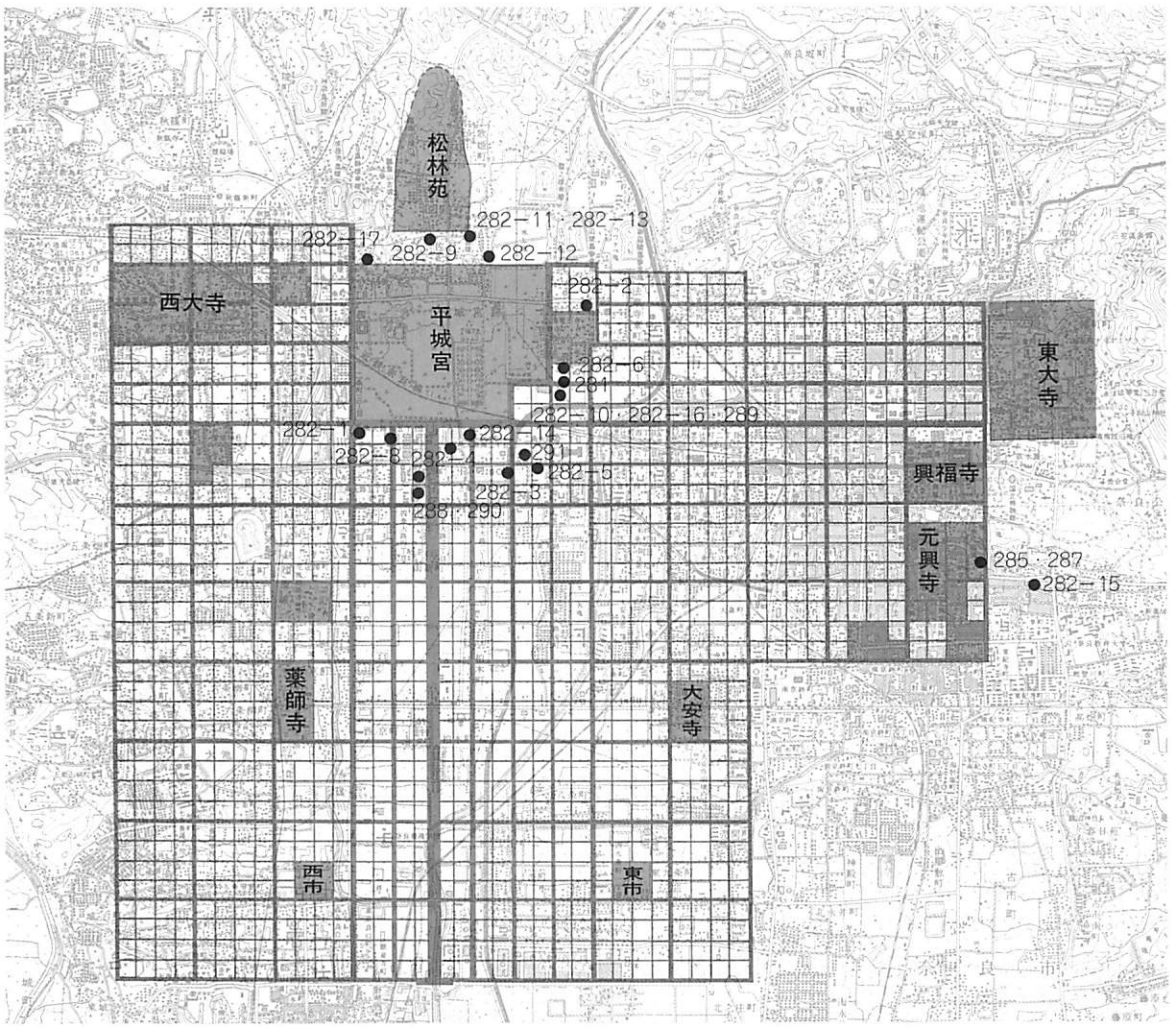



図45　1997年度　平城京内発掘調査位置図　1：50000

# ◆右京三条一坊三・四坪の調査
## ―第288次・第290次

### 1　はじめに

本調査は工場改築にともなう事前調査で、奈良県教育委員会の依頼を受け実施した。調査地は平城宮南端から400mほど南に位置し、平城京の条坊復原では朱雀大路に面する右京三条一坊三・四坪にあたる。調査は、第288次調査（11月4日～12月26日）、第290次調査（1月19日～3月16日）の２ヶ次にわたり、総面積は約2000㎡である。第288次では調査区が北区と南区にわかれ、北区（約400㎡）は朱雀大路と三条条間南小路との交差点の検出を目的として設定し、南区（約600㎡）は四坪内の宅地の様相をあきらかにすることを目的とした。また、第290次でも調査区は東区と北西区にわかれ、東区（約900㎡）は三坪内の様相をあきらかにすること、北西区（約105㎡）は西一坊坊間東小路の検出をそれぞれ目的とした。

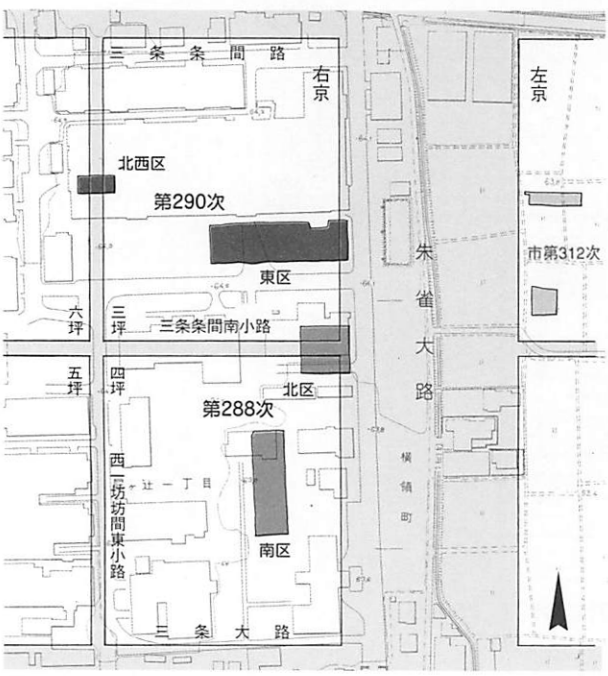



図46　右京三条一坊三・四坪　調査位置図　1：3000

### 2　基本層序

南区では上から盛土、灰色土（遺物包含層）、黄褐系砂質土（整地土）、黄褐系粘質土（地山）となり、北区では上から盛土、耕土・床土、灰色系砂質土（遺物包含層）、褐色系シルト・粘質土（地山）となる。一方、東区では上から、盛土、耕土・床土、暗黄灰褐色土（遺物包含層）、黄灰褐色砂質土（地山）、北西区では工場解体により削平されているため、上から暗灰色砂質土（遺物包含層）、橙色粘土（地山）であった。遺構はいずれもほぼ地山面で検出した。調査区の原地形は北から南・西から東に緩やかに傾斜していたと考えられる。遺構面の標高は、それぞれ南区（62.6～63.0m）、北区（62.6～62.9m）東区（63.5～63.8m）、北西区（63.3～63.4m）である。

（西山和宏）

### 3　検出遺構

北　区

**SD2600**　朱雀大路西側溝。現状で幅約3.0m、検出面からの深さ約0.9m。溝底の標高は北端で61.5m、南端で61.3m。両岸には部分的に護岸の杭が残る。

**SD2618**　北調査区中央を走る南北溝。この溝と朱雀大路西側溝との間に築地がつくられたと想像できる。三条条間南小路の設置に際し、小路上の部分を埋め立てる。幅約3.0m。

**SD2619**　調査区南側の南北溝。三条条間南小路南側溝SD2621に取り付く。幅約0.5m。

**SD2620**　調査区南西端で検出した東西溝。東端は攪乱により破壊される。幅約0.4m。

**SD2621**　三条条間南小路南側溝。朱雀大路西側溝SD2600に取り付く。幅約1.1m。

**SD2622**　三条条間南小路北側溝。ある時期に、東端

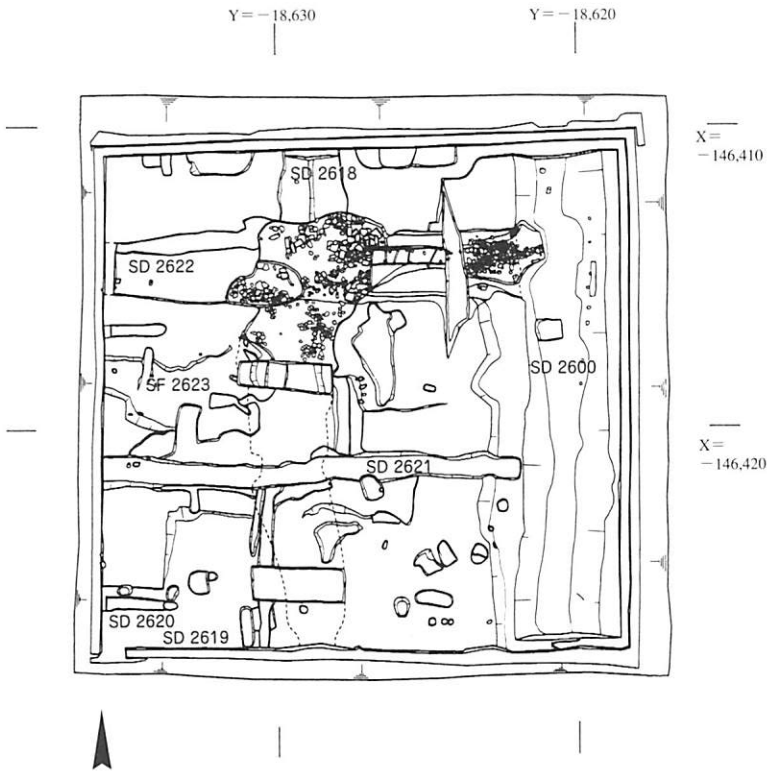



図47　第288次調査北区　遺構平面図　1：250

SD2600への合流部分の幅を狭め木樋につくり替える。幅約2.4m、木樋幅約0.5m。

**SF2623**　三条条間南小路。京造営当初は敷地を広くとるため、造成していない。道路幅は、南北両側溝の心心距離が約7mで、幅20大尺で設計されたと考えられる。

南　区

**①奈良時代の遺構**

**SB2601**　調査区南端で北妻を検出した掘立柱南北棟建物。梁間2間。柱間寸法は6尺。

**SB2602**　やはり調査区南端で北妻を検出した掘立柱南北棟建物。SB2601を建て替えたものらしい。梁間2間。柱間寸法は5尺。

**SE2604**　調査区南端近くの井戸。井戸枠は完全に抜き取られ、また抜取穴により掘形全体が破壊されているため、本来の形状は不明である。現状は平面楕円形を呈する。長さ5.1m、幅3.3m、深さ約2m。

**SB2606**　調査区南半中央に位置する、桁行4間以上×梁間2間の掘立柱東西棟建物。柱間寸法は10尺。

**SA2607**　調査区中央を走る掘立柱東西塀。4間ぶんを検出した。柱間寸法は7尺。

**SB2608**　調査区の北半東端で西側柱筋を検出した掘立柱建物。桁行5間、柱間寸法は7尺。塀の可能性もある。

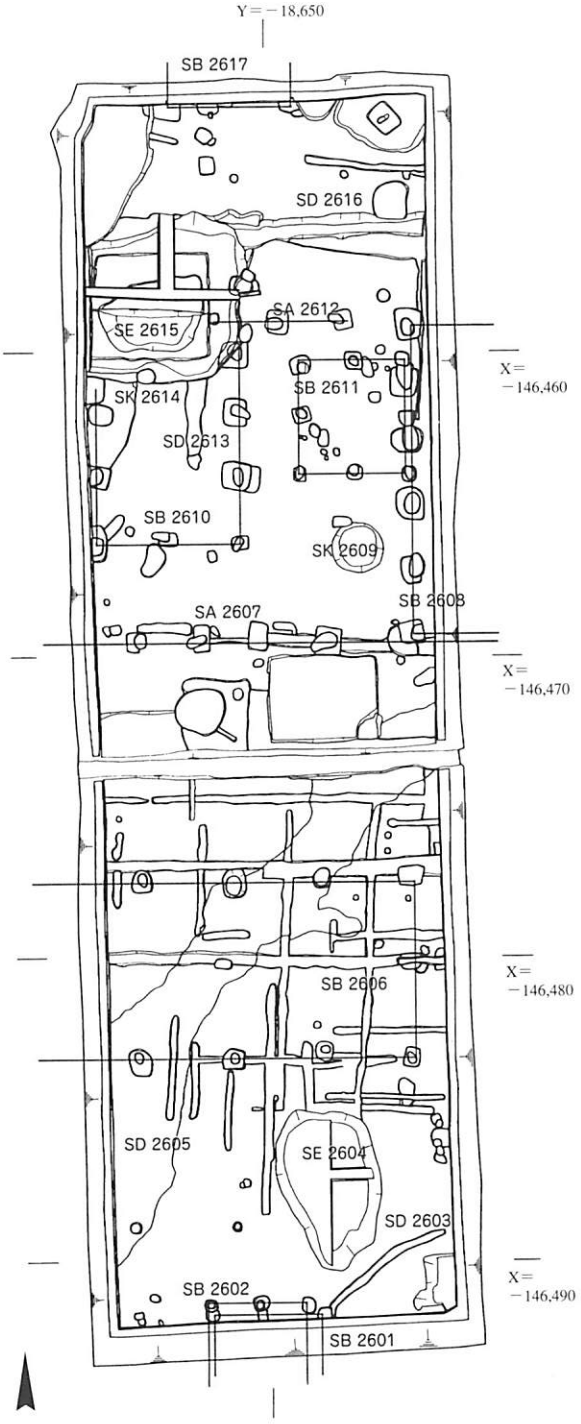



図48　第288次調査南区　遺構平面図　1：250

**SK2609**　円形の皿状土坑。径1.7m。

**SB2610**　調査区北半西側にある桁行4間×梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は7尺。

**SB2611**　調査区北半東側にある桁行2間×梁間2間の掘立柱建物。柱間寸法は6尺。

**SA2612**　SB2611の北側にある掘立柱東西塀。確認したのは2間ぶんのみであるが、SB2610の北西隅に取り付

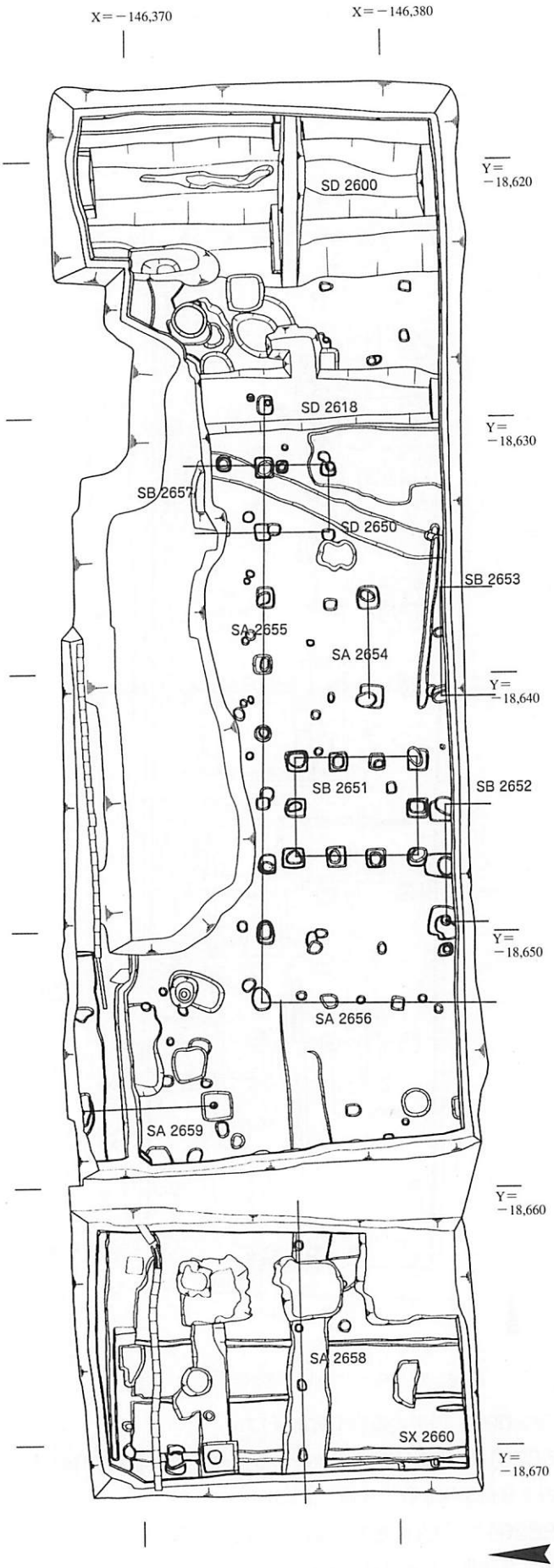



図49　第290次調査東区　遺構平面図　1：250

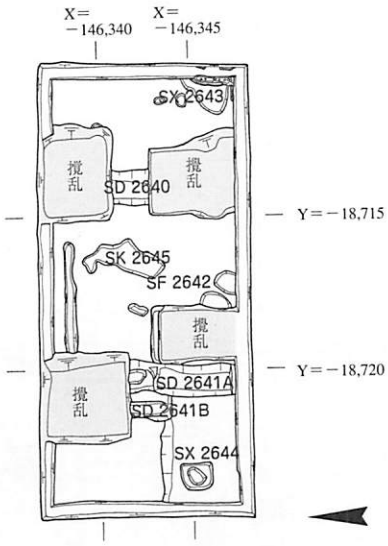



図50　第290次調査北西区　遺構平面図　1：250

く可能性がある。柱間寸法は7尺。

**SD2613**　調査区北半西側にある南北溝。約3mぶんを検出した。幅約0.7m。

**SK2614**　調査区北半西端にある大型土坑。東南部を検出したのみで規模は不明。北側はSE2615に切られる。

**SE2615**　調査区北西部にある井戸。掘形は東西4m×南北3.5mの方形。井戸枠は完全に抜き取られている。抜取穴の深さは検出面から約2.5m。

**SD2616**　調査区北東部にある東西溝。埋土がSE2615埋没時のものと同じであり、ほぼ同時に埋没したらしい。SE2615の北東部にとりつく排水溝と考えられる。

**SB2617**　調査区北端で南妻を検出した掘立柱南北棟建物。梁間2間。柱間寸法は7尺。

**②その他の遺構**

**SD2603**　調査区南東隅にある斜行溝。SB2601の柱穴を切っており、奈良時代以降の溝である。

**SD2605**　調査区の南西隅から北東に伸びる斜行溝。堆積土は砂層で、それをSB2606柱穴が掘りこんでおり、奈良時代以前の流路らしい。堆積土から弥生式土器の破片が出土しており、その時期のものと思われる。（臼杵　勲）

東　区

**①奈良時代の遺構**

**SD2600**　朱雀大路西側溝。溝底の標高は北端で62.1m、南端で62.0mである。

**SD2618**　調査区東側の南北溝。築地にかかわる遺構と考えられる。幅2.0m、深さ0.6mである。

**SB2651**　調査区中央にある桁行3間×梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに6尺。

**SB2652**　調査区中央南端で北妻の柱列を検出した梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は8尺。

**SB2653**　調査区中央東寄りにあり、南端で北妻を検出した梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は8尺。

**SA2654**　調査区中央東寄りで検出した柱間１間の掘立柱東西塀。柱間寸法は13尺。目隠塀と考えられるが、築地の間に開く棟門の可能性もある。

**SA2655**　調査区中央で検出した柱間９間の掘立柱東西塀。柱間寸法は8.5尺。西端で南に折れSA2656となる。東端の柱穴はSD2618の埋土上ではなく堆積土上で検出した。SD2618と共存していた可能性もある。

**SA2656**　調査区中央西寄りで検出した掘立柱南北塀。柱間寸法は8.5尺で柱間３間ぶんを検出した。北端で東に折れSA2655となる。

**SB2657**　調査区東側で検出した桁行２間以上×梁間１間の南北棟建物。柱間寸法は桁行が６尺、梁間が８尺。

**SA2658**　調査区西側で検出した東西塀。柱間寸法は９尺で、３間ぶんを検出した。

**SX2660**　調査区南西隅で検出した土器埋納遺構。径30cm、深さ30cmの掘形内に土師器甕を埋置し、その上に土師器杯Aを反転させて蓋としたものである。これまで平城京で検出した土器埋納遺構には、須恵器の壺や杯、土師器甕を用いることが多いが、今回のように土師器の甕と坏Aのセットは初めての例である。土器は風化が著しいが、奈良時代中頃～後半と考えられる。銭などの内容物はないが胞衣壺の可能性もあり、現在土器内外の土壌試料の分析中である。

**SA2659**　調査区西側で検出した柱間１間の掘立柱南北塀。柱間寸法は20尺。築地の間に開く棟門の可能性もある。

**②その他の遺構**

**SD2650**　調査区東側にあり、北で東に振れる幅0.8m、深さ0.6mの斜行溝。遺物を含んでいないため、時期はあきらかではないが、堆積土の性格などから古墳時代の溝と推定される。　（西山和宏）

北西区

主要な遺構は、西一坊坊間東小路の東側溝SD2640・西側溝SD2641Aおよび路面SF2642である。東西両側溝とも幅は約0.9m。側溝心および小路心の座標値は、X＝－146,341.0の地点で東側溝心がY＝－18,714.1、西側溝心がY＝－18,720.3、小路心がY＝－18,717.25。溝心心間距離は6.2mとなる。西側溝はその後、やや西よりに位置を変えて（SD2641B）機能したようだ。

これ以外の遺構としては、東側溝東方の小杭列SX2643、調査区内では単独の柱穴SX2644、路面中央部に掘られた土坑SK2645がある。SX2643とSX2644は奈良時代の遺構とみることができ、このうちSX2644は南に延びて塀

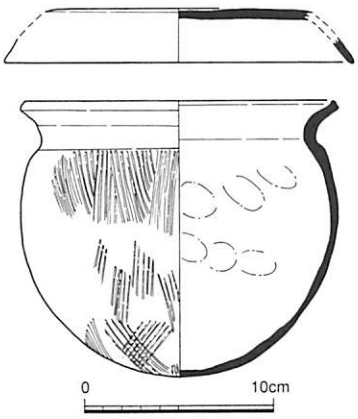



図51　土器埋納遺構SX2660出土土器実測図　1：3

図52　土器埋納遺構SX2660出土状況

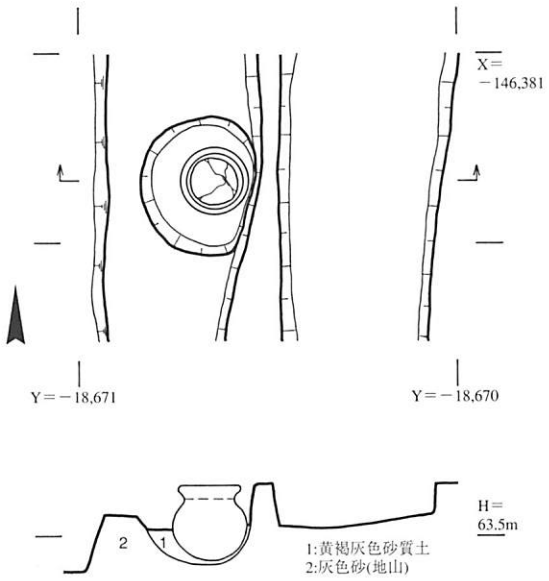



図53　土器埋納遺構SX2660遺構平面図（上）、断面図（下）　1：20

になるか、あるいは南と西に延びて建物になる可能性がある。SK2645はまったく遺物を含まないが、路面のほぼ中央という位置から考えて道路機能を失った平城廃都以後のものとみてよいだろう。　（小野健吉）

## 4　遺構変遷

調査区相互の対応が定かではないため、ここでは調査区ごとに遺構の変遷を述べる。なお、北西区については省略する。

北　区

朱雀大路西側溝SD2600は奈良時代を通して機能しているが、その他の遺構については以下の変遷がある。

**〈a期〉** 調査区中央を南北溝SD2618が通る。この時期には三条条間南小路が造られず、宅地は南北２町ぶん以上の広い占地がおこなわれたらしい。

**〈b期〉** 三条条間南小路SF2623を造り、SD2618の小路部分を埋めるが、南北の宅地部分ではそのまま小路側溝に取り付けて継続使用する。当然、この変更に際し築地塀の部分的な造り替えのあったことが推定される。

**〈c期〉** 三条条間南小路北側溝の朱雀大路西側溝取り付き部分を、幅を狭めて木樋に変える。そのためか、氾濫による浸食の痕跡がみられ、瓦片が大量に埋没する。SD2618は完全に埋め立てられ、南の宅地ではSD2619・SD2620などの小規模な溝が掘られる。

南　区

北半の井戸SE2615の周辺では、遺構の切り合いによって変遷を推定できる。最も古い時期の遺構は土坑SK2614で、SK2614埋没後に、南北棟建物SB2610と東西塀SA2612を建てる。ただし、位置的に両者は共存しないので、それぞれと共存する遺構について検討してみよう。まず、調査区北端のSB2617の建物心は、SB2610の西側柱筋と一致し、柱間寸法も両者ともに７尺である。また、両者の間隔はほぼ20尺となる。一方、SB2610と南の東西塀SA2607との間隔はほぼ10尺であり、この３者は共存していたと考える。そして、SA2607が取り付く南北棟建物SB2608の柱穴は、SA2607の柱穴を切っており、これらは上記の３者より新しい。SB2610とSA2612の柱穴を切る井戸SE2615が最も新しく、溝SD2616と、SB2608の柱穴を切る小型建物SB2611が同時期と考えられる。

一方、南半は遺構が希薄であり、北半との対応は定かでない。ただ、建物SB2606の東妻がSB2608の西側柱と柱筋をそろえているので、同時期の建物と考える。また、南端のSB2601とSB2602は同位置での建て替えらしいが、北半のSB2611とSE2616を参考にすると、SE2604と併存し、調査区内の南北で井戸の周辺に小規模な建物を置く配置をとった可能性もある。

以上をまとめると以下の変遷がたどれる。

**〈A期〉** SK2614

**〈B期〉** SA2607、SB2610、SB2617

**〈C期〉** SB2608、SA2612、SB2606

**〈D期〉** SB2611、SE2615、SD2616、SB2601、SB2602、SE2604

なお、確実な根拠に欠けるが、SE2615より古いSD2613は、SB2610・SA2612と共存しないのでA期に、土坑SK2609は周囲に顕著な建物のないD期になる可能性がある。

（臼杵　勲）

東　区

東区は遺構が大変希薄であり、なおかつ切り合い関係

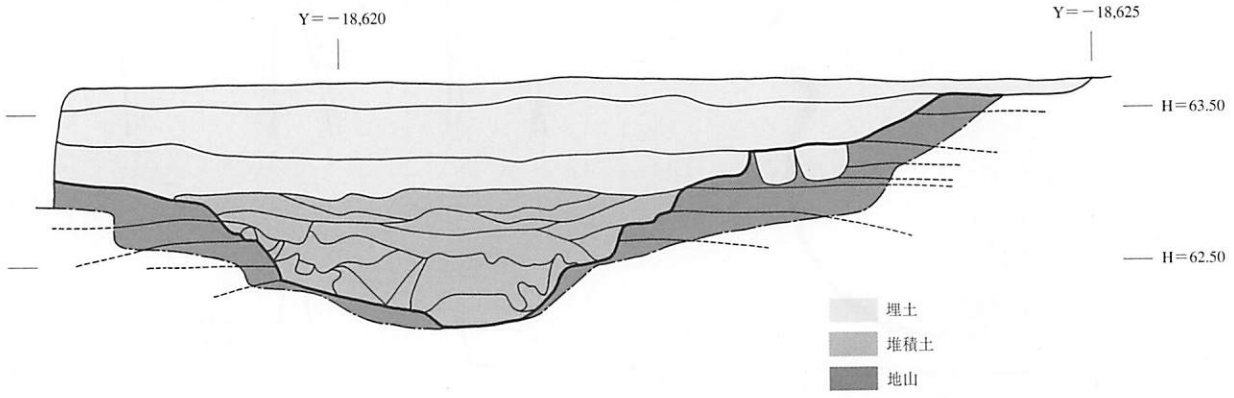



図54　朱雀大路西側溝SD2600断面図（X=-146.376）1：40

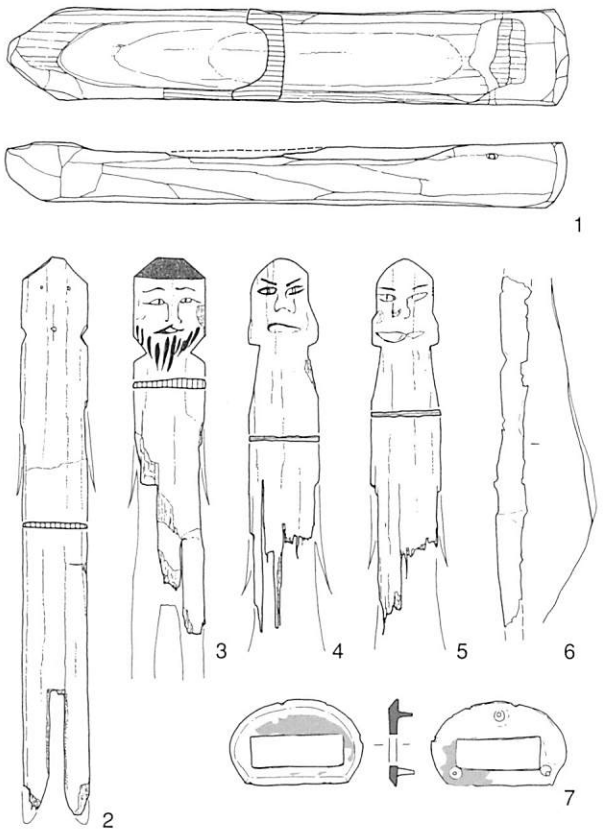



図55　第288・290次調査出土木器・金属器　1：8

もほとんどないことなどから、全体の変遷をつかむことは困難である。しかし、位置関係や数少ない切り合いから以下のような変遷が推定できる。

〈Ⅰ期〉SB2651、SA2654、SB2653、SA2658

〈Ⅱ期〉SA2655、SA2656、SB2652

〈Ⅲ期〉SB2657、SA2659

なお、土器埋納遺構SX2660の時期は、出土土器から奈良時代あるいはそれ以降と考えられるが、Ⅰ～Ⅲ期のいずれに属するかは不明である。　（西山和宏）

## 5　出土遺物

出土した遺物は、第288次、第290次ともに少量であり、そのほとんどは朱雀大路西側溝SD2600から出土したため、以下にまとめて報告する。

木製品・金属製品

木製品は朱雀大路西側溝SD2600から、人形16点、棒状木器16点（うち3点は尖端）、曲物底板3点など合計51点が出土した（図55）。以下、遺存状態の良好な舟形1点、人形4点について報告する。1は舟形。広葉樹製。角棒状の素材を荒く削って、船首と船尾を作る。両側は若干破損している。船尾両側には側面から穿孔されている。同様の位置に穿孔や削り込みをする事例が散見する。当時の舟の設備を示すものであろうか。人形はいずれもヒノキ製。2・3は柾目板を切りとってつくる。ともに頭頂は台形に作り、頸部の切り欠きは小さな二等辺三角形状で、両側縁に下から切り込みを入れ手を作る。2は浅く刻んで目・口を表現し、コ字形切り込みを入れ折り取って脚を作る。脚端を若干欠損するが、ほぼ完形。現存長22.2cm、幅3.1cm、厚さ0.3cm。3は顔面を墨描きし、脚部は欠損しているが、脚を作る際の切り込みが残り、やはりコ字形切り込みによるらしい。現存長14.9cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm。4・5は同形品。全8点の同形品が重なって出土した。すべて薄い板目材を切りとって作っており、顔面は下ぶくれにし、顔を墨描きする。頸部には下辺の長い三角形の切り欠きをいれ、なで肩に作る。両側縁には下から切り込みを入れて手とする。ともに脚部は破損している。4は現存長14.8cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm。5は現存長15.0cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm。

6が銅製人形。細板に切れ目を入れて括れ部を表現する。7は銅製丸鞆。平板形式の表金具、両面に漆が残存する。　（臼杵　勲）

瓦塼類

出土した瓦は表10・11のとおり。大半が北区のSD2618や東区のSD2600から出土した。　（西山和宏）

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 409.1kg |
| 6225 | ? | 1 | 6644 | A | 1 | 点数 | 2,455 |
| 6273 | B | 2 | 6646 | A | 1 | 平瓦 | |
| 6274 | A | 1 | 6663 | Cb | 3 | 重量 | 1,196.4kg |
| 6311 | B | 3 | 6664 | F | 1 | 点数 | 6,580 |
| 6316 | Db | 1 | 6682 | B | 4 | 塼 | |
| 型式不明 | | 6 | | C | 3 | 重量 | 5.2kg |
| | | | 6689 | A | 1 | 点数 | 8 |
| | | | 6721 | Gb | 1 | 道具瓦・その他 | |
| | | | 型式不明 | | 4 | 面戸瓦 | 2 |
| | | | | | | 熨斗瓦 | 3 |
| 軒丸瓦計 | | 13 | 軒平瓦計 | | 19 | 箆書瓦 | 1 |

表10　第288次調査　出土瓦塼類集計表

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 235.0kg |
| 6316 | C | 1 | 6682 | B | 1 | 点数 | 1,766 |
| | Db | 1 | | C | 2 | 平瓦 | |
| 型式不明 | | 1 | 型式不明 | | 1 | 重量 | 646.5kg |
| | | | | | | 点数 | 4,630 |
| | | | | | | 塼 | |
| | | | | | | 重量 | 0.8kg |
| 軒丸瓦計 | | 3 | 軒平瓦計 | | 4 | 点数 | 2 |
| 道具瓦 | | | | | | 凝灰岩 | |
| 面戸瓦 | | 1 | | | | 重量 | 1.3kg |
| 隅切平瓦 | | 1 | | | | 点数 | 1 |

表11　第290次調査　出土瓦塼類集計表

土器・土製品

SD2600からは、整理用コンテナで約20箱の土器が出土した。古墳時代の土器を少量含む以外は、すべて奈良時代の土師器、須恵器と黒色土器で、確実に平安時代まで降る土器は出土していない。その中で、祭祀用土器・土製品が一定量みられるので、それを紹介する（図57）。

1は小型模造土器の甑。把手をもち、外面は縦方向の刷毛目、内面はヨコナデと横方向の刷毛目で調整する。2は小型模造土器の甕。口縁部外面をヨコナデし、胴部外面は不調製。3は小型模造土器の竈。小破片であるが、

内外面を刷毛目で調整する。4は墨書人面土器。土師器甕を使用したもので、頸部に横方向の墨線、胴部には縦方向の墨線を描く。5・6は土馬。粘土板を折り曲げて成形する奈良時代後半のもので、5は下半身と頭部上端、6は頭部を欠失する。

SD2600から出土した祭祀用土製品は、土師器小型模造土器の甑が4点、甕が9点、竈が16点、高杯が1点と、土馬が2点、土師器壺C使用の墨書人面土器が8点、土師器甕を使用した墨書人面土器が4点ある。他には墨書人面土器用の土師器壺B・Cが多数出土した。土馬の保存が比較的良好なほかは、いずれも破片であり、完形に復せるものはない。その中で土馬は製作技法や形態が酷似しており、セットとして製作したものを同時に使用したと考えられる。その他の土製品については断片的なものであり、出土状況からみても、この周辺で祭祀がおこなわれていたことは確かであろうが、右京域におけるSD920（奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984）や左京域のSD6400（奈文研『平城京左京七条一坊発掘調査報告』1998）に比べ、大規模かつ恒常的なものではなかったと考えられる。（玉田芳英）

木　簡

朱雀大路西側溝SD2600から21点出土した。このうち主要な木簡の釈文を別掲した。①は召文の文書木簡である。裏面「内舎人尊」の記載が注意される。②は備中国下道郡からもたらされた米の付札である。六斗という量から考えると庸米付札であろうか。③は備後国西良郡からの米の付札である。④は「犬養部」の記載がある断片。⑤は隠伎国周吉郡からの軍布の付札である。養老4年（720）の年紀をもつ。⑥は阿波国の生鰒の付札である。⑦は米の付札であるが、断片のため詳細は不明。（古尾谷知浩）

## 6　まとめ

これまで朱雀大路に面する地点の発掘例は少なく、四条大路以北ではほとんどおこなわれていない。今回の調査は、貴重な事例を追加したといえよう。とくに右京三条一坊三・四坪を、ある時期に2坪全体を占有していた点は重要である。本調査地は、平城京では宮に近い一等地であり、長屋王クラスの最上級貴族の邸宅があってもおかしくない。また、宮外官衙の可能性も考慮すべきである。三坪は、平安京にあてはめると右京三条一坊三町であり、『拾芥抄』西京図によれば右京の行政をつかさどる役所（右京職）が存在した。また四坪は『拾芥抄』本文によれば、西三条第であった。残念ながら、本調査

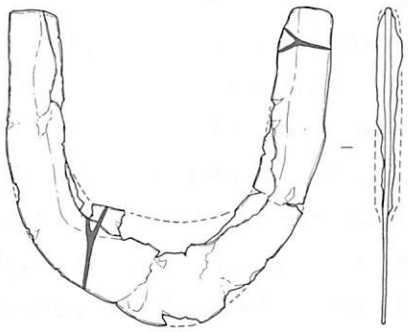
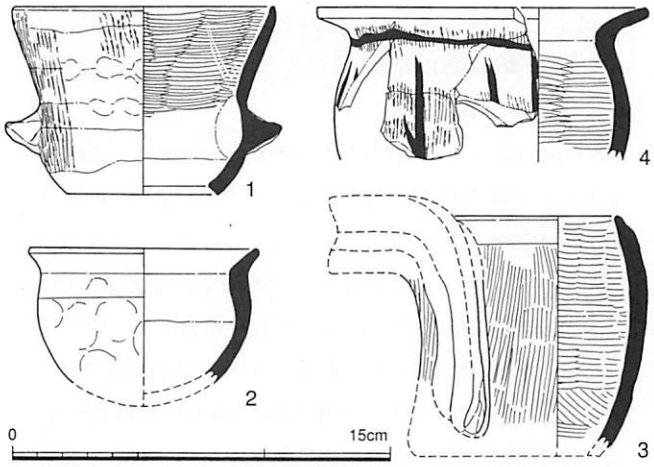


図56　朱雀大路西側溝SD2600出土鋤先実測図　1：3



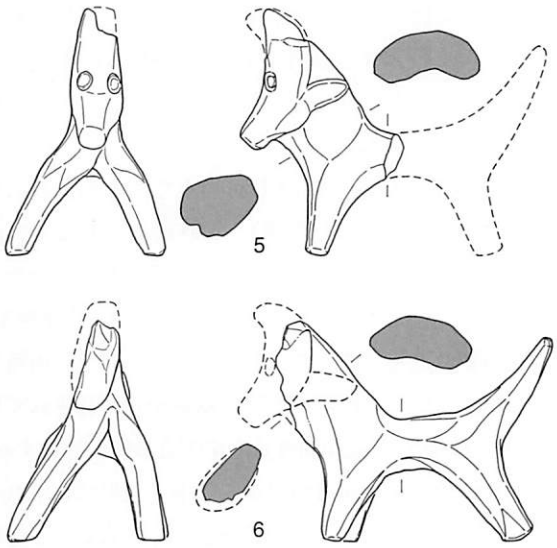




図57　朱雀大路西側溝SD2600出土祭祀用土器・土製品実測図　1：3

第二八八次調査出土木簡

**朱雀大路西側溝SD二六〇〇**

①・召　氷□　［戸カ］
・内舎人尊　(77)・29・5　019

②・下道郡□　□□□下道臣三止
［米　斗カ］
・□□六□　165・21・4　011

③・備後国西良郡□□米
・□　□　(109)・(12)・5　039

④　犬養部　(72)・(13)・3　081

第二九〇次調査出土木簡

**朱雀大路西側溝SD二六〇〇**

⑤・隠伎国周吉郡奄可郷吉城里
・服部屎人軍布六斤養老四年　128・26・3　031

⑥　阿波国生鰒五十貝　126・23・5　033

⑦　□波米五斗　(114)・24・5　039

区の遺構は大変希薄であり、出土遺物も少ないため、どのような機能をもった施設が存在したかを推し量ることは困難である。ところで、大学寮に推定されている左京三条一坊七坪（奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）は、やはり建物の密度が低い。宮外官衙を想定するならば、宮付近では空閑地が多い構造という共通性が存在した可能性もあろう。いずれにしても、本調査区が奈良時代においてどのような利用をされていたのかは、今後の研究課題である。

条坊関係では、北西区で検出した西一坊坊間東小路と朱雀大路との関係について触れておきたい。朱雀大路は、平城宮の正門（南面中門）・朱雀門から平城京の正門・羅城門まで一直線に伸びる平城京のメインストリートである。したがって、その道路心は、朱雀門心と羅城門心を結んだ直線と考えるのが最も適切であろう。朱雀門心の座標値は（X＝－145,994.49，Y＝－18,586.31）［奈文研『平城報告IX』1978］であり、羅城門心の座標値は井上和人氏の最新研究成果によれば（X＝－149,771.38，Y＝－18,569.12）［「平城京羅城門の再検討」『年報1998－I』］である。この２点を結んだ直線の国土方眼方位に対する振れはN0°15’39”Wとなる。一方、西一坊坊間東小路は、今回の調査で得た道路心の座標値（X＝－146,341.0，Y＝－18,717.25）と平城宮跡第125次調査で得た九条大路北側溝付近での道路心の座標値（X＝－149,738.32，Y＝－18,701.87）［奈文研『平城京九条大路』1981］から、国土方眼方位に対してN0°15’34”Wの振れをもつことがあきらかになった。この２つの値はきわめて近似しており、朱雀大路心と西一坊坊間東小路心がほぼ正しく平行に施工されていることを確認した。また、今回の調査地点で西一坊坊間東小路と朱雀大路との心々間距離は132.50mという値を得る。これは１大尺=0.354mと仮定すると374.3大尺にあたり、西一坊坊間東小路が朱雀大路から心々間距離375大尺の計画線通りに施工されたことを示している。

（西山和宏・小野健吉）

## 平　城　専（こらむ）欄　①

現場班メンバー一覧

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|---|---|---|---|---|
| 考古第１ | 加藤真二 | 小林謙一 | 臼杵　勲 | 高妻洋成 |
| 考古第２ | 玉田芳英 | 金田明大 | 川越俊一 | |
| 考古第３ | 清野孝之 | 岩永省三 | 井上和人 | 山崎信二 |
| 遺　構 | 箱崎和久 | 浅川滋男 | 蓮沼麻衣子 | 西山和宏 |
| 計測修景 | 高瀬要一 | 平澤　毅 | 内田和伸 | 小野健吉 |
| 史　料 | 山下信一郎 | 渡邉晃宏 | 舘野和己 | 古尾谷知浩 |

色つきは総担当者

**◆現場班ラインアップ**

本年度は、秋を除く３現場で、95年度・96年度入所の新人がはじめての総担当者をつとめた。東面大垣とそれをはさむ２本の溝を掘った春現場（第274次）は、木簡ザクザクに総担当者、大興奮！ご満悦の日々がしばらく続いた。酷暑にたたられた夏現場は、東西一町ぶん（長さ110m）の溝（第281次）と東院園池の掘り残し部分（第284次）。作業員さんの呼ぶ声に、総担当者、東へ西へ◎往復。アルバイトの女子学生に、この総担当者の姿はどう映ったのか!? 奈文研初の女性発掘調査員を迎えた秋現場は、東院隅周辺（第280次）。復原すすむ庭園をよこ目に、隅楼の遺構解釈は大苦戦。あやうし、H女史！中規模調査２本をメインとした冬現場は、小規模現状変更調査の雨あられ。総担当者の好采配が光る！　（H）

# ◆左京二条二坊十一坪の調査
## ―第289次・第282-16次・第282-10次

### 1　はじめに

本年度は左京二条二坊十一坪に関わる調査を３ヶ所で実施した。いずれも宅地造成にともなうもので、昨年度におこなった十一坪東北部の調査（第279次）ともども、平城宮の東南に接するこの地域に急速におしよせつつある宅地化の波に対応しての調査である。第279次調査では正殿を中心としたコの字型配置をもつ建物群の存在を推定しており、今年度の調査でもそれを裏付ける遺構の発見が期待されていた。

第289次調査では、十一坪北辺の門に関わる遺構を発見し、第282-10次調査では、坪東北角の区画施設に関する知見が得られた。また、坪北半西部で実施した第282-16次調査では、第279次調査で検出した正殿に付属する、後殿と西脇殿に相当する建物の一部を検出し、十一坪１町を占地した大規模施設の様相解明に重要な知見をもたらした。以下、第289次、第282-16次、第282-10次の順に述べる。

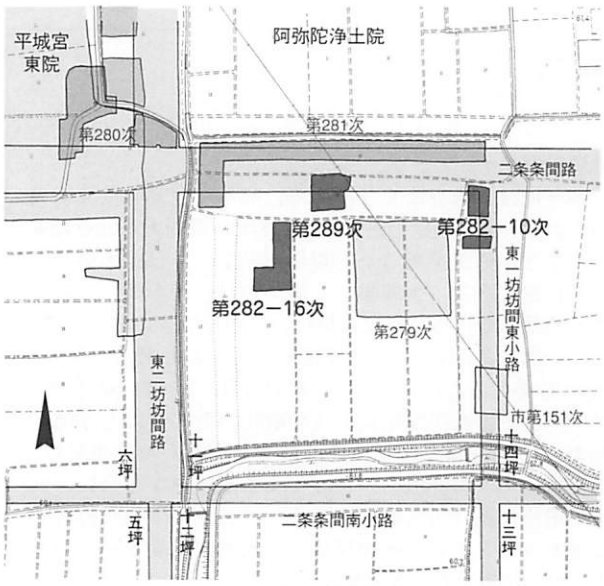


図58　左京二条二坊十一坪調査位置図　1：3000

### 2　第289次調査

調査区の概要

調査区は左京二条二坊十一坪を東西に二分する地点を含み、二条条間路南側溝にかかるように設定した。規模は東西約13m×南北約14mの約182㎡であるが、東北隅部分に近代以降の大きな攪乱があり、実質的には約150㎡であった。調査期間は１月８日～２月３日である。

基本層序

十一坪内にあたる調査区南壁断面においては、表土（約15cm）、耕土（約20cm）、床土（約30cm）の下に、茶灰砂質土または灰褐砂質粘土の遺物包含層（約５cm～10cm）、灰色粘質土または黒灰色粘質土の整地層（約５～30cm）があり、その下の地表下約90cm（標高約60.3m）のところで黄灰色砂の地山を検出した。

検出遺構

検出した奈良時代の遺構は、道路１条、溝６条、門１棟、掘立柱建物２棟などがあり、大きくⅠ・Ⅱの２時期に分けられる。

〈Ⅰ期〉奈良時代前半

**SF7095**　二条条間路。Ⅱ期まで存続。南端のみ検出。

**SD7100**　二条条間路南側溝。Ⅱ期まで存続。幅4.5m、深さ0.7mの素掘りの東西溝。土層は大きく上層・下層に分けられる。上層堆積土は上から順に灰褐粘質土、暗灰粘質土で、下層は灰色粘質土、灰褐砂質粘土、灰色粘質土、暗灰粘質土、灰色砂、砂・炭混灰色粘質土である。

**SD7290**　素掘りの東西溝。A、Bの２小期に分けられる。SD7290Aは幅0.4m、深さ0.5m。調査区西端のみで検出し、大部分はSD7290Bと重なっているが、本来は調査区を東西に貫流していたと思われる。

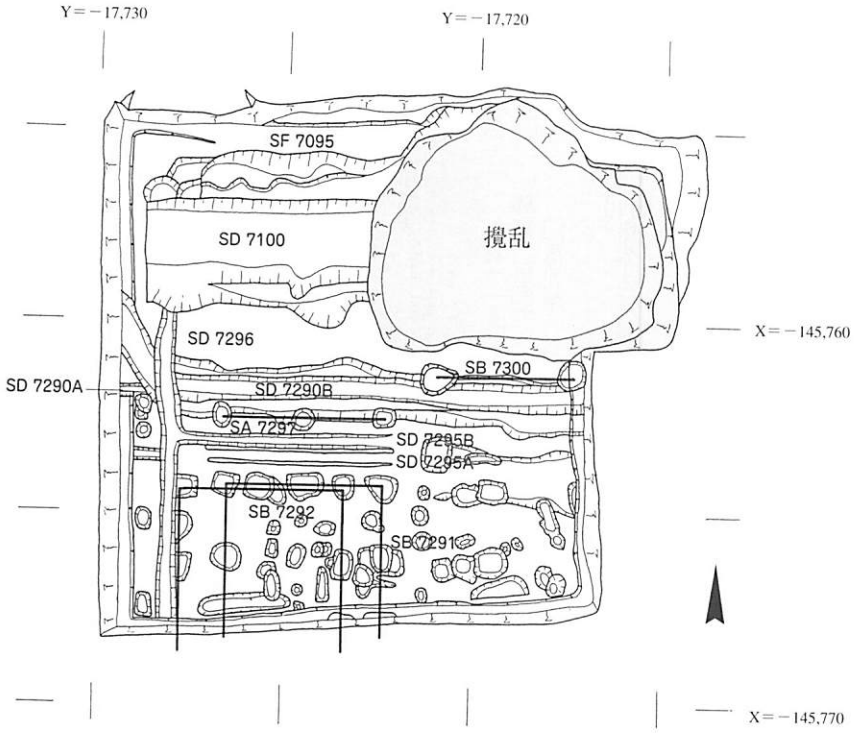



図59　第289次調査　遺構平面図　1：200

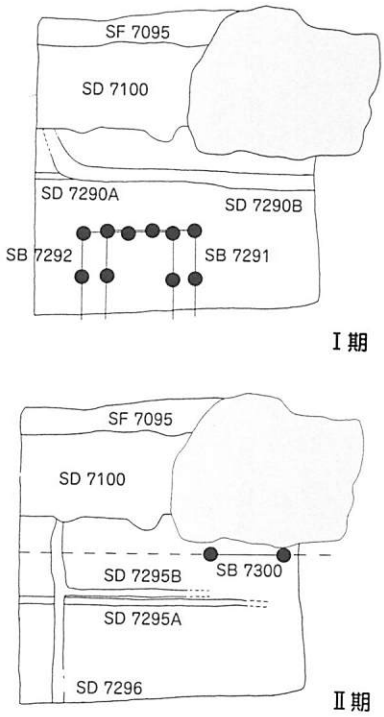



図60　遺構変遷図

SD7290Bは幅1.6m、深さ0.6m。SD7290Aと同じく南側溝SD7100の南肩から約2.0mの間隔をおいて流れる。SD7290Aを拡幅して調査区西端で北折させたもの。土層は大きく上層、下層に分けられる。上層は人為的な埋土で、上から順に明灰粘土混黒灰砂質粘土、明灰粘土混灰色砂質粘土となっており、下層は堆積土で、灰色砂質粘土、黒灰粘質土、灰色粘質土、灰色粘土である。調査区西半では、最下層に木屑を多く含む砂層を検出した。

下層から郡里制下の付札が出土し、最上層から奈良時代初頭の土師器が出土しているので、比較的に短期間で埋め戻されていることがわかる。十一坪内の排水を南側溝に流すために設けられた溝と思われる。

**SB7291・SB7292**　いずれも十一坪内の掘立柱南北棟建物で、桁行3間以上×梁間2間、柱間は7尺等間である。東西にわずかにずらして建て替えているが、柱穴の重複はなく、いずれが古いかは決められない。

**〈Ⅱ期〉**奈良時代後半

**SB7300**　左京二条二坊十一坪の北に開く棟門。柱間約3.9m（13尺）。門の心の国土方眼座標はX＝-145,761.4、Y＝-17,719.2である。東西溝SD7290Bを埋め戻した後に築かれている。東側の柱穴では、掘形の底に石の礎板、その上に木の礎板を2枚重ねて据え、西側の柱穴では、底に木の礎板を2枚、次に石の礎板、その上に木の礎板1枚を重ねて据えていることが確認できた。

この門の存在から、この東西延長上、つまりSD7290Bを埋めた上に十一坪の北面築地が造られたことが想定できるが、積み土は削平されていて検出できなかった。

**SD7295**　門SB7300に続く築地の南雨落溝。A、Bの2小期に分けられる。SD7295Aは調査区を東西に貫流しており、調査区中央部分では幅約45cm、現存長約4.0mの木樋を設けているが、それ以外は幅約0.6m、深さ約15cmの素掘溝である。木樋据付の状況を断面で観察すると、SB7291・SB7292の柱を抜き取った後に設置していることがわかる。木樋の四隅に沈下防止用の瓦を敷いており、うち一点は軒平瓦6663Cbである。なお、築地北雨落溝は検出されず、二条条間路南側溝SD7100と兼用していたと考えられる。

SD7295BはSD7295Aを北にずらして付け替えたもの。後述する南北溝SD7296とはT字に接続し、これより西では検出できなかった。削平された可能性もある。調査区中央部では幅40cmの木樋を設けている。北側板は現存長約0.8mであり、南側板はSD7295Aの木樋北側板をそのまま用いている。木樋以外の部分では幅0.4m、深さ15cmの素掘溝である。

**SD7296**　幅0.6m、深さ30cmの素掘溝。調査区を南北に貫流し、南側溝SD7100に注ぐ。最終段階でSD7295Aを切っており、SD7295BとT字に接続しているが、堆積状況をみると、SD7295Aが機能していた時期にはこれと併存して十字に接続していた可能性がある。

南側溝SD7100に注ぐ位置で堰板を検出した。長さ1.4mの東側のものだけが残る。十一坪の北面築地下を暗渠で通していたと考えられる。

**〈その他の時期〉**具体的な時期は不明である。

**SA7297**　十一坪北面築地廃絶後に設けられた東西の柱列。

（古尾谷知浩）

第二八九次調査出土木簡

二条条間路南側溝SD七一〇〇

①・美濃国片県郡□□
　　［神カ］
　　□□　(155)・21・3　019

②［尾治　愛知郡カ］□□郷戸主□
　□□国□□□　(153)・(15)・6　039

③・□□□□郷高□里□
　　［郡カ］　［倉カ］
　　□亀元年　(145)・(10)・3　081

④白髪部大万呂
　白□部□　庸米六斗俵
　　［髪カ］　165・26・4　011

⑤・□□□□□□□□□
　［庸米六斗カ］
　・□□□□　(168)・(5)・3　081

東西溝SD七二九〇B

⑥・□□食三升　右二領人□充□
　　［等カ］
　・付大伴部鳥万呂　廿七日　午時　293・(31)・3　081

⑦山背国相楽郡□□里　149・(12)・5　032

掘立柱建物SB七二九二柱穴

⑧・丹波国多紀郡宗部□
　・戸主和尓部黒麻呂庸□　(120)・27・5　039

出土遺物

**①木製品**　木製品はSD7290から棒状木器47、板5、付札状木器・曲物各2、杓子・竪櫛未製品各1、SD7100から棒状木器・曲物各3、人形・箆各1、SD7296から棒状木器8など合計75点が出土している。このうち、図61はSD7290出土の竪櫛未製品である。ヒノキの板材の両面を丁寧に削った上、両側縁を抉りこみ、柄を作り出す。ついで柄部と歯部を分ける沈線を両面に入れる。歯の作り出しは表面のみ、ノミで沈線を削り込んだうえ、沈線間を削る。また、先端側から鋸で沈線間を切削した痕跡もみられる。このように歯をつけた後、仕上げに磨きをかけたのだろう。　（加藤真二）

**②瓦塼類**　瓦塼類は、表12の如く軒丸瓦11点、軒平瓦6点などが出土した。遺構にともなうものは多くないが、東西溝SD7295Aの木樋下に据えられていた平城宮軒瓦編年Ⅲ期の軒平瓦6663Cbは、木樋設置時期の上限（平城京遷都後）を示すものとして重要である。

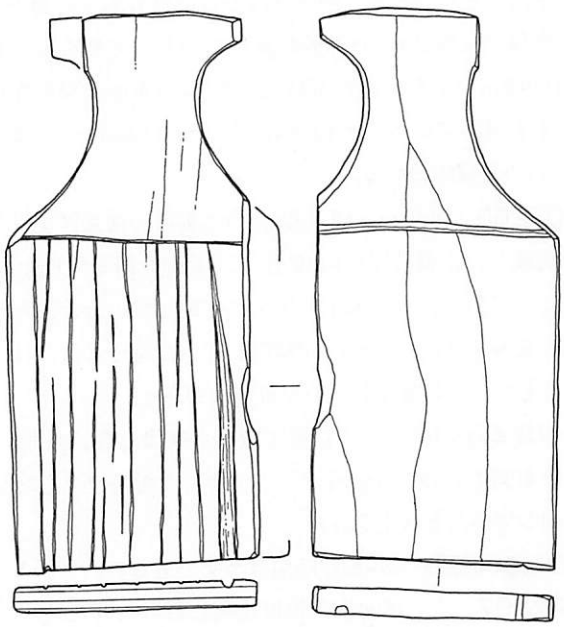


図61　第289次調査出土　竪櫛木製品実測図　1：2

**③木簡**　木簡はSD7100から13点、SD7290Bから18点（うち削屑1点）、SB7292柱穴から1点の計32点が出土した。SD7100出土木簡の中には、郷里制下、恐らく神亀元年（724）と見られる年紀をもつもの③がある。また、庸米付札も見られ（④・⑤）、第281次調査の二条条間路北側溝SD7090出土木簡と共通する傾向がうかがえる。SD7290B出土木簡には、時刻を記した文書木簡⑥のほか、郡里制（～霊亀3年［717］）の地名表記を持つ山背国の荷札⑦がみられ、伴出土器とともに、SD7290Bが短期間で埋め戻されたことを示している。

まとめ

今回の調査で、左京二条二坊十一坪における北辺中央付近の状況があきらかとなった。

奈良時代前半には十一坪北辺部に排水のためとみられる東西溝SD7290A・Bと、掘立柱建物SB7291・SB7292がある。この時期の坪北辺区画施設についてはあきらかでないが、SD7290A・Bが機能していた段階では、この南側ではSB7291・SB7292との間が2mしかなくSD7290A・Bを北雨落溝とする築地は想定できない。一方、この北側も二条条間路南側溝SD7100との間に2mほどの空間しかなく、またSD7290Bは北折してSD7100と合流しており、北折部分に暗渠の痕跡もないので、この部分に築地は考えにくい。またSD7290Bは早い時期に埋め戻されているが、その後の段階でもSB7291・SB7292の北妻と、奈良時代後半に築かれた築地の南雨落溝SD7295Aとの間が60～70cmしかないことを考慮すると、SB7291・SB7292が存在している間は、何らかの区画施設があったとしても、それが築地であったとは考えがたい。

奈良時代後半になると築地を造り、十一坪をほぼ二分す

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 25.1kg |
| 6238 | A | 1 | 6663 | B | 1 | 点数 | 207 |
| 6273 | B | 1 | | Cb | 2 | 平瓦 | |
| 6311 | Aa | 3 | 6664 | G | 1 | 重量 | 60.8kg |
| | Ba | 1 | 6682 | B | 1 | 点数 | 522 |
| 型式不明 | | 5 | 6732 | C | 1 | 塼 | |
| | | | | | | 重量 | 4.8kg |
| 軒丸瓦計 | | 11 | 軒平瓦計 | | 6 | 点数 | 3 |

表12　第289次調査　出土瓦塼類集計表

る位置に棟門SB7300を設ける。築地には木樋暗渠を有する南雨落溝SD7295A・Bがともない、SD7295Aの木樋設置時期は平城京還都（745年）以後と考えられる。また、南雨落溝の水および十一坪内の排水を二条条間路南側溝SD7100に排出するための南北溝SD7296があり、暗渠により北面築地の下を通していたことも判明した。　（古尾谷知浩）

## 3　第282-16次調査

調査区の概要

調査地は左京二条二坊十一坪内の西側に位置する。第279次調査において、正殿を中心として左右対称の配置をとると推定した一連の建物群のうち、西半部の様相をあきらかにする目的で調査区を設定した。調査面積は253㎡、調査は1998年3月11日に開始し4月3日に終了した。

基本層序

調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、その下に整地土層である暗灰色砂質土がある。遺構は、おおむねこの整地土層の上面で検出したが、調査区北側には整地土層がなく、地山である茶褐色砂層面で検出した。遺構面の標高は60.1～60.3mである。

検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀6条、井戸1基、溝1条、土坑1基である。遺構の切り合い関係などからA期からD期まで4時期の変遷を推定できる。

〈A期〉奈良時代以前

**SD7331**　調査区西端にある幅0.4m、深さ0.4mの素掘りの南北溝。奈良時代の整地土層の下にある。

〈B期〉奈良時代中頃（第279次調査所見のD期）

**SB7330**　調査区東南にある桁行3間以上×梁間2間の掘立柱南北棟。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺。第279次で確認した東脇殿SB6957に対応する西脇殿と考えられる。東庇をもつと思われるが調査区内では確認できない。

**SB6994**　第279次で検出した南庇をもつ掘立柱東西棟建物SB6994西妻の柱列で、調査区北側で桁行1間ぶんを検出した。柱間寸法は桁行11尺、梁間9尺、庇の出9尺である。これによりSB6994は桁行15間の規模をもち、東西両端間のみ11尺、それ以外の柱間は9尺等間で、桁行総長139尺の長大な建物であったと考えられる。

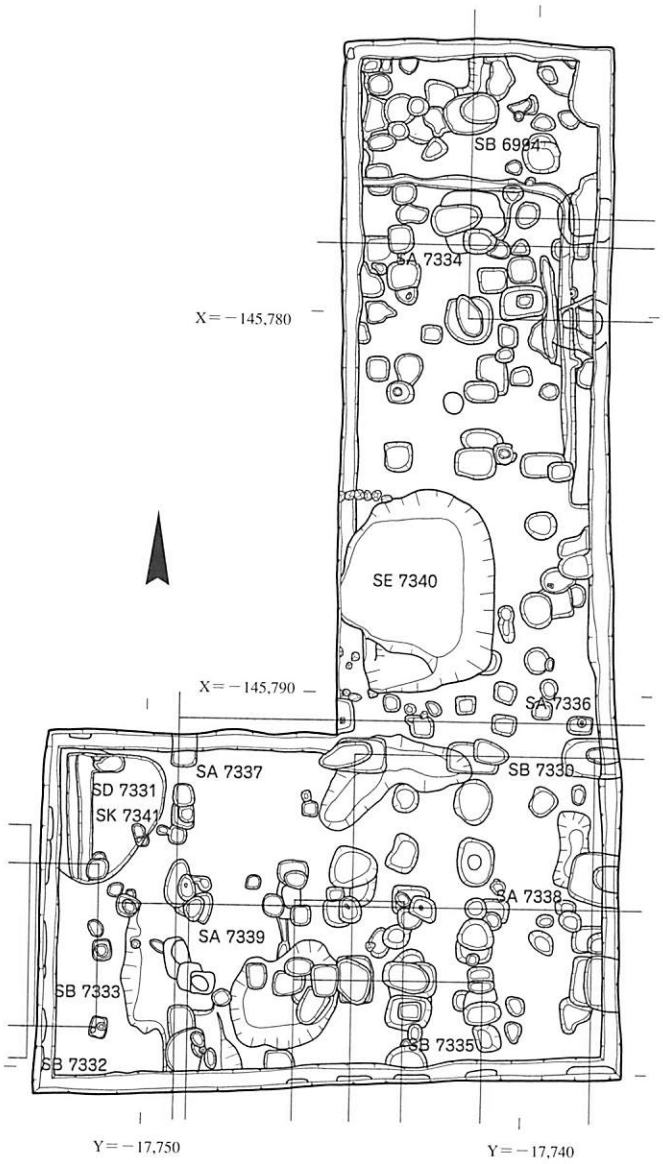



図62　第282-16次調査　遺構平面図　1：200

**SB7332**　掘立柱東西棟建物。調査区西端において東妻の柱列を検出した。梁間は2間で柱間寸法は10尺。南北棟になる可能性もあるが、後に規模を縮小しSB7333に建て替えられたと考え、東西棟としておく。

〈C期〉奈良時代後半

**SB7333**　調査区西端において東妻の柱列および東庇を検出した掘立柱東西棟。桁行1間以上×梁間2間で、柱間寸法は梁間・庇の出ともに7.5尺。

**SB7335**　調査区南端にある桁行1間以上×梁間1間の掘立柱南北棟。北と東にそれぞれ庇をもつが、隅には庇がつかない。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺、庇の出は7尺である。

**SA7334**　調査区北側にある掘立柱東西塀。柱間2間ぶんを検出した。柱間寸法は7尺である。

**SA7336**　調査区中央にある掘立柱東西塀。柱間寸法は7尺。確認したのは柱間3間ぶんであり、うち2つの柱穴で柱根が残る。調査区外に続くため未確認だが、西

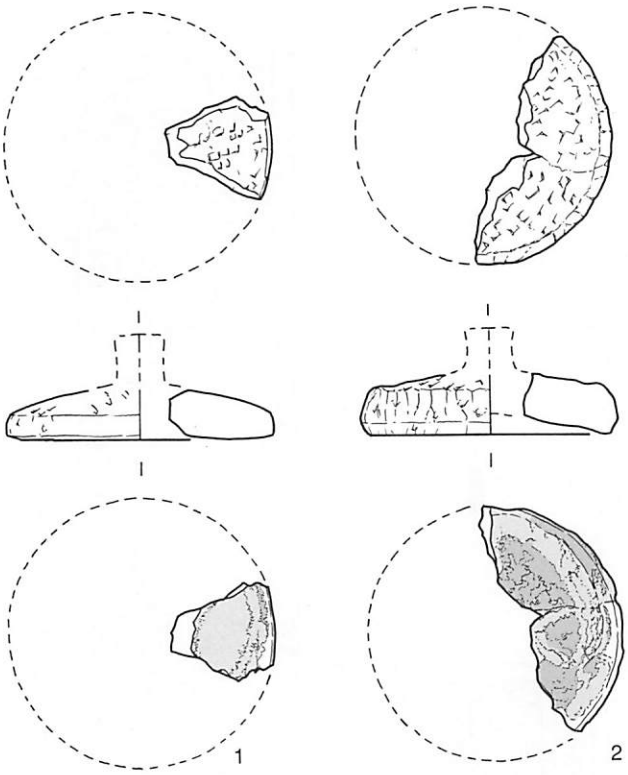



図63　ガラス坩堝蓋実測図　1：3

端で次に述べるSA7337と接続すると考えられる。

**SA7337**　調査区西側にある掘立柱南北塀。柱間3間ぶんを検出し、柱間寸法は7尺。北でSA7336に接続するものと考えられるが調査区外のため確認できない。

**SE7340**　調査区中央にある井戸。掘形は一辺5mの方形を呈し、遺構面から約1.7mの深さがある。掘形外縁の北と南に東西方向の石列（人頭大）が一部残る。井戸枠は抜き取られていて残存しない。

**〈D期〉**奈良時代末期

**SA7338**　調査区南側にある掘立柱東西塀。柱間6間ぶんを検出した。柱間寸法は6.5尺。西から2本目の柱位置で、次に述べる南北塀SA7339と接続する。

**SA7339**　調査区南側にある掘立柱南北塀。2間ぶんを検出した。柱間寸法は6.5尺。北端で東西塀SA7338に接続する。

**SK7341**　調査区西端にある多量の土器を含む大土坑。

（西山和宏）

出土遺物

**①ガラス坩堝蓋**（図63）1は、外面を斜格子タタキで調整し、内面は平滑で坩堝本体口縁の痕跡が残る。最大径10.6cmに復元でき、胎土には石英、長石などの砂粒を多量に含む。また痕跡から復元される坩堝の内径は8cm前後と推定される。包含層出土。2は、1967年平城宮東南部の小子門周辺でおこなわれた第39次調査で出土していたものである。調整方法、胎土は今回出土例と同様で

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 32.8kg |
| 6284 | Ea | 1 | 6644 | A | 2 | 点数 | 293 |
| 6308 | B | 1 | 6663 | C | 1 | 平瓦 | |
| | I | 3 | | ? | 1 | 重量 | 97.0kg |
| 6311 | Aa | 1 | 6664 | D | 1 | 点数 | 847 |
| | B | 2 | 6667 | A | 1 | 塼 | |
| 6313 | C | 1 | 6671 | C | 1 | 重量 | 3.2kg |
| 型式不明 | | 3 | 6682 | B | 2 | 点数 | 6 |
| | | | 6721 | ? | 2 | | |
| | | | 6723 | A | 1 | | |
| 軒丸瓦計 | | 12 | 軒平瓦計 | | 12 | | |

表13　第282-16次調査　出土瓦塼類集計表

あるが、内面の傾斜や斜格子叩きの格子の大きさに相違が認められる。最大径10.2cm。包含層出土。

ガラス坩堝に蓋がともなうことは、天武朝期の工房遺跡である明日香村にある飛鳥池遺跡の発掘調査によってはじめてあきらかになった（『藤原概報22』）が、それが奈良時代にも存続することを確認した意義は大きい。形態的には大差ないものの手法的には飛鳥池遺跡例が蓋部の側縁を切り落とすのに対して、この2例は斜格子叩きを残す点が異なる。この差異は時期差をあらわしているものとも推定され、今後資料の増加を待って検討したい。なお、肥塚隆保氏（当研究所埋蔵文化財センター）の分析によると、蓋内面に残るガラスはいずれも鉛ガラスである。

（川越俊一）

**②土器・瓦塼類**　奈良時代の土器はSE7340やSK7341などから出土しているが、小片ばかりで特筆すべきものはない。墨書土器は、SK7341から「□厨」「酒」、SB7332の柱抜取穴から「花寺」（図65）などの3点が出土した。

出土した瓦塼類は表13の通りである。軒瓦の多くは井戸SE7340から出土した。第279次では施釉瓦が大量に出土したが、本調査区では軒丸瓦の小片（型式不明）が1点出土したにすぎない。

まとめ

本調査では、第279次調査で検出した正殿にともなう西脇殿SB7330と、東端を発見していた後殿SB6994の西端部分を確認した（図64）。注目すべきことに、このSB6994の建物中軸線は条坊計画における中軸線とは合わず、十一坪東西にある条坊道路側溝間の中軸線（ここでは「坪心」とよぶ）と一致している。左右対称に配置された建物群もこの坪心に中軸線をあわせてたつとすれば、正殿SB6950は桁行63尺（9尺×7間ヵ）、後殿SB6994と正殿の間にある東西棟SB6990は桁行66.5尺（9.5尺×7間ヵ）となる。なお、この坪心は東二坊坊間東小路心から西へ220尺の位置にあたる。十一坪に接する十二坪では、中央に四面庇の建物を配し、それを回廊がとり囲むという特徴的な建物群が営まれる（奈良市教委『平城京左京二条二坊十二坪－発掘調査概要－』1997）

が、その東西計画心も東小路心から西へ220尺であることがすでにわかっている。ただし、十二坪では西に接する東二坊坊間路が十一坪よりも狭くなっているため、この建物群の中軸線は十二坪の坪心とは一致しない。さらに、十二坪における建物群の中軸線は、条坊計画における中軸線とも一致せず、十一坪の坪心と一致しているのである。十一、十二坪の関係については、すでに第279次調査所見において、両坪出土の所用軒瓦などの様相が酷似していることから、「いわば二卵性双生児のような」密接な関連性のあったことを指摘している。本調査によってあきらかになった建物中軸線の一致は、それをいっそう裏付けるものといえるだろう。　（西山和宏）

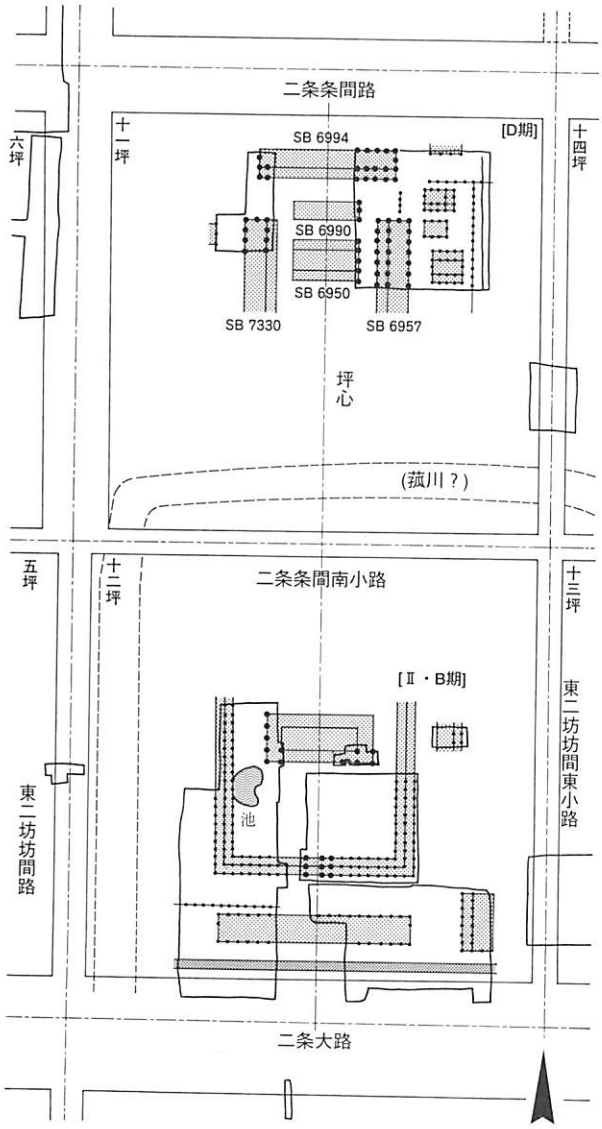



図64　左京二条二坊十一・十二坪遺構概念図

図65　「花寺」墨書土器

## 4　第282-10次調査

### 調査区の概要

この調査は個人住宅建設と駐車場建設にともなうもので、南北に近接したそれぞれの対象地に分けて調査区を設定した。ここではそれぞれ北区、南区と称する。調査面積は150㎡で調査期間は10月22日から11月12日。調査地の現状は水田であり、遺存地割では左京二条二坊十一坪の東に通じる東二坊坊間東小路と、北に通じる二条条間路の交差する地点、およびその西南部分にあたる。調査では各条坊道路の側溝と、十一坪の敷地を区画する施設に関わると考えられる溝数条などを検出した。

### 基本層序

調査地の現地表の標高は61.0mであり、水田耕土、床土の下に、部分的に粗砂、細礫を含む砂質土層が3～4層、ほぼ水平に堆積している。遺構は地表下約80cmで検出した。地盤層（地山）は最上層が60cm厚の黒褐色粘土層で、その下に粗砂および砂層が続く。

### 検出遺構

東二坊坊間東小路西側溝SD7115は上端幅2.0m、底部幅1.4m、深さ約0.7mの南北溝。溝底は、調査区の中では、北端から南端へ下がる、およそ10cmの比高差のある傾斜をなす。側溝の西肩に約30～70cm間隔で、直径5cmほどの杭列SX7279が続く。北区のなかほどで東西溝SD7274が西側溝SD7115に流れ込む。SD7274は幅0.8m、深さは15cm。底部には直径20cm前後の浅いくぼみが連続しており、敷石を抜き取った痕跡とも考えられる。西側溝SD7115の東側は東二坊坊間東小路SF7280の路面にあたる。やや東に向かって高くなるが、舗装を施した形跡はない。二条条間路南側溝SD7100については溝の南肩を検出したにとどまる。溝の堆積土は西側溝SD7115と一体となっている。

南北溝SD7270は西側溝SD7115の西肩から1.9～2.0mの間隔をおいて西にある、断面が箱形の南北溝で、北端は西に延びる東西溝SD7271に接続する。東西溝SD7274よりも古い。幅40～60cm、深さは25cmほどあり、北区の中で1.2mの間途切れている。この部分に向かっては、南北から溝底が次第に浅くなっている。溝の中には南区で

第二八二－一〇次調査出土木簡

東二坊坊間東小路西側溝ＳＤ七一一五

①・美濃国安八郡大田郷
［田　酒カ］
・大□君□□□米六斗　232・18・7　033

②・播磨国鴨郡
［猪甘カ］
・□□部□六□　(117)・25・4　039

［木カ］　［鯛カ］
③　□本村御贄□　(82)・18・3　081

土坑ＳＫ七二七六

④　参河国宝飫郡度津郷□□六斤大
［海松カ］　145・21・2　032

東西溝ＳＤ七二七四

⑤　隠伎国智夫郡□由良郷□
□　(87)・29・3　039

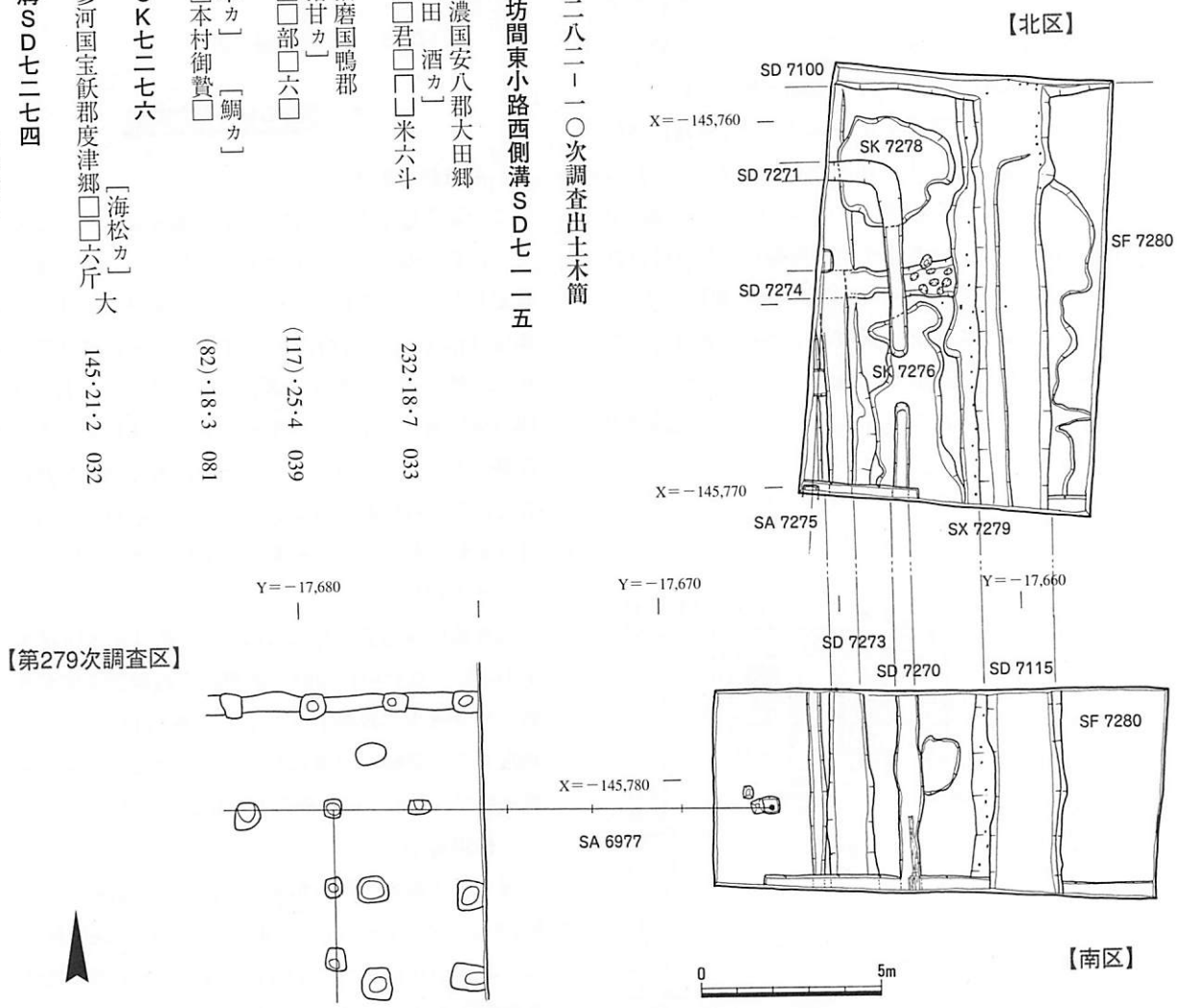



図66　第282-10次調査　遺構平面図　1：200

薄い板材が重なった状態で埋まっており、また平城宮土器Ⅰ期ないしⅡ期に属する時期の土師器片が多く出土した。東西溝SD7271も二条条間路南側溝SD7100の南肩から約２ｍの位置にある。このL形に続く溝は、後述するように、坪を区画する施設と推定される。

南北溝SD7273は西側溝SD7115の西肩から3.1～3.6ｍの間隔をおいた位置にある。幅80～120cm、深さ約20cm。北端は新しい時期の溝と重なっており、あきらかではない。この溝はSD7115との間に想定される築地塀の西側雨落溝と考えられる。なお、この築地塀想定位置には築地の痕跡はなく、浅い不整形の土坑SK7276があり、木簡や木製品などが腐植質土とともに堆積していた。

SA7275は北区西辺にある南北方向の柱列で、SD7273、SD7274よりも時期的に古い。3.3ｍ間隔の三つの柱穴は北で東に約3.5度傾く方位を示す。この方位であれば、北には続かない。

南区西端近くで掘立柱掘形を検出したが、位置的にみて、この西側の第279次調査（平成８年度）で確認した建物群のうちD期とした時期の東西塀SA6977と一連のものと考えられる。SA6977は柱間10間、８尺等間の塀であったことになる。

出土遺物

**①木簡**　木簡は東二坊坊間東小路西側溝SD7115から41点（うち削屑１点）、土坑SK7276から６点、東西溝

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 179.5kg |
| 6131 | A | 1 | 6663 | B | 1 | 点数 | 1,382 |
| 6138 | A | 1 | | C | 2 | 平瓦 | |
| 6272 | B | 1 | | ? | 1 | 重量 | 439.6kg |
| 6282 | Bb | 1 | 6667 | A | 2 | 点数 | 3,130 |
| 6285 | A | 2 | 6682 | B | 2 | 塼 | |
| 6291 | Ab | 1 | 6685 | B | 5 | 重量 | 16.2kg |
| 6301 | A | 1 | 6691 | A | 2 | 点数 | 22 |
| 6308 | I | 1 | 6694 | A | 1 | 道具瓦・その他 | |
| | ? | 1 | 6713 | A | 1 | 刻印平瓦「三」 | 1 |
| 6311 | Ba | 1 | 6721 | Gb | 1 | 面戸瓦 | 3 |
| 6313 | Aa | 3 | | J | 1 | | |
| | C | 3 | 型式不明 | | 22 | | |
| | G | 1 | | | | | |
| 型式不明 | | 15 | | | | | |
| 軒丸瓦計 | | 33 | 軒平瓦計 | | 41 | | |

表14　第282-10次調査　出土瓦塼類集計表

SD7274から3点のほか、出土遺構不明のもの4点の、計54点が出土した。主なものの釈文は別掲したが、SD7115のものでは、村を単位に貢納されたと思われる贄の付札③が注目される。そのほか郡郷里制施行（717年）以後の美濃国のおそらく庸米付札とみられるもの①、播磨国の付札②がある。SK7276からは参河国④の、SD7274からは隠伎国の荷札⑤などが出土した。両者とも郡郷里制以後のものである。

**②木製品**　木製品は小路西側溝やその西側の築地塀廃絶後に形成された土坑SK7276から出土した。鍬形、琴柱、横櫛、ヘアピン、鎌柄、曲物、杓子、糸巻、箸などのほか、数十点の籌木がある。

**③瓦塼類**　瓦類の出土数量は表14に示す通りである。軒瓦については、型式のあきらかな37点のうち、西に隣接する第279次調査区で出土した247点（型式の判明したのは189点）と同型式のものは半数の18点であった。それ以外のものの中には法華寺創建時の軒丸瓦6301Aや法華寺阿弥陀浄土院所用軒平瓦6713Aなどがあり、十一坪以外の周辺の場所で使用されていたものが含まれていると考えられる。

## まとめ

本調査および第289次調査では、十一坪の外周を区画する施設に関わるいくつかの遺構を確認した。その中で注目されるのは、奈良時代初期の区画施設が坪北辺では東西溝SD7290A・B、東辺では南北溝SD7270であり、いずれも周囲の条坊道路の側溝とは2m前後の間隔をおいて設定されていることである。先述のように第289次調査では、このSD7290の南側のさらに間隔をおいた位置に同時期の東西溝はなく、しかもSD7290の2mほど南に同じ時期の南北棟の北妻がある。したがってSD7290を築地塀の北雨落溝とはみなしがたい。そうすると、SD7290と二条条間路南側溝SD7100との間に築地塀を想定しうるか否かということになる。

平城京内での確認例をみると、たとえば左京三条二坊坊間路西辺の築地塀は、条坊道路西側溝を東雨落溝とし、基部幅2m前後の規模をもち（奈文研『平城京左京三条二坊』1975)、今回の検出例に近似した状況をみせる。この場合、2mのうちに築地本体とその両側の犬走り（壇地）をとる必要がある。延喜木工寮式築垣条には、屋根架構部を除いた高さ1丈3尺から7尺までの築地幅と必要工人数が記されているが、そのうち最低の高さ7尺の場合、築地本径つまり築地本体の基底部幅は3尺とある。これであれば、基部幅2mの上に築地がたちうるかもしれない。しかしこの例は坊の中央に通じる坊間路とはいえ、側溝心々間距離が6mの小路クラスの道路であり、大路クラスの幅員をもつ二条条間路に面する区画施設としては不相応な規模であることは否めない。その上、第289次調査区の27m西方でおこなった第281次調査区において、SD7290の延長位置に該当する溝は存在しないことが確認されている（本書56～64頁参照)。十一坪の東辺の南北溝SD7270は北端で西に90度屈曲して東西溝SD7271となるが、この東西溝は位置的にみて第289次調査区のSD7290に連なるとみられる。坪の東辺に通じる条坊道路は、側溝心心間距離がおよそ7.1mの南北小路であり、上述の左京三条二坊坊間路と同クラスといえるが、幅約2mの帯状の空間は十一坪の北辺から同じ規模で連続している。こうしたことから、SD7290およびSD7270は築地塀に関わる溝ではなく、坪の外周を区画するとともに、坪内の排水に関連する施設と考えておきたい。

この2条の溝には平城宮土器Ⅰ期ないしⅡ期の土師器だけが出土したことを考えると、奈良時代のはじめのある期間には、十一坪の周囲（の一部）は細い溝によってのみ画されており、後に東西溝SD7295および南北溝SD7273を坪内側の雨落溝に、条坊道路側溝を外側の雨落溝とする築地塀を坪の区画施設として造営する、という過程を推定できる。その改作の時期が、第279次調査で判明したコの字型大規模建物施設の造営される天平初年であるとすれば、平城京遷都後20年ほどの間、この十一坪は立体的な区画施設のない場所であったことになり、平城宮に隣接する坪として特殊な位置づけがなされていた可能性も想定できる。ただし、第289次調査では、この築地塀の南雨落溝は平城京還都（745年）以後につくられたとされており、築地塀造営の年代については、なお検討の余地がある。

（井上和人）

# ◆二条条間路の調査―第281次

## 1　はじめに

分譲住宅建設にともなう事前調査である。面積は約870㎡、基本層序は上から盛土、旧耕土、床土、瓦敷で、瓦敷下が奈良時代の遺構検出面になる。遺構検出面は標高約60.7m～60.3m。

二条条間路は左京域では平城宮小子部門の南側正面より東院の南側を通り、東大寺の西面中門に至る道路である。本調査区は平城宮東南に隣接する左京二条二坊十坪と十一坪の境界部分にあたる。調査区北側の十坪は西北隅[1]（第80次調査：昭和47年度）・北辺部[2]（第282-6次調査：平成９年度）が調査され、多数の建物を検出している。南側の十一坪の調査[3]（第279次調査：平成８年度）では「コ」の字形の配置をもつ大型の建物が確認され、緑釉瓦が多量に出土している。

## 2　検出遺構

**SD7090**　二条条間路北側溝。長さ約110mにわたり検出した東西溝。奈良時代中頃に大幅な改修があり、改修前の溝をSD7090A、改修後の溝をSD7090Bとする。

SD7090Aは幅約3.8m、溝底は調査区東端で標高59.2m、西端で59.5mをはかり、開削当初は西より東に向かって流れていたことがわかる。溝の断面形状は東側では逆三角形を呈し、西へ向かうにつれ逆台形へと変化する。これは地山が東側の灰白色粘土から調査区中央より西にかけて砂へ変化することに関係すると思われる。灰～灰褐色の砂が堆積し、最下層は植物遺存体を多量に含む灰茶色粘土である。

SD7090Bは幅約2.0m、溝底は約60.0m前後で改修前に比べ細く、浅い。調査区西側では両岸に堰板（SX7093・SX7094）とこれを固定するための丸木の杭列（SX7091・SX7092）が存在し、溝岸の崩落を防ぐものと考えられる。堆積は暗褐色粘質土が中心で、澱んでいた有様がうかがえる。粘質土の堆積を参考にすると、東から西への流れが想定でき、当初と流水方向が逆転している。これは後述する門の建設による変更であろう。門の基壇は下層溝を埋め立てた上に構築されており、下層溝から上層溝への改修は門の造営にあわせておこなわれたと考えられる。

**SD7100**　二条条間路南側溝。長さ約13mにわたり検出した東西溝。幅約4.6m、溝底の標高は約59.3mである。断面形状は逆台形を呈する。幾度か改修がおこなわれており、最終的には当初の位置よりやや北側に寄っている。

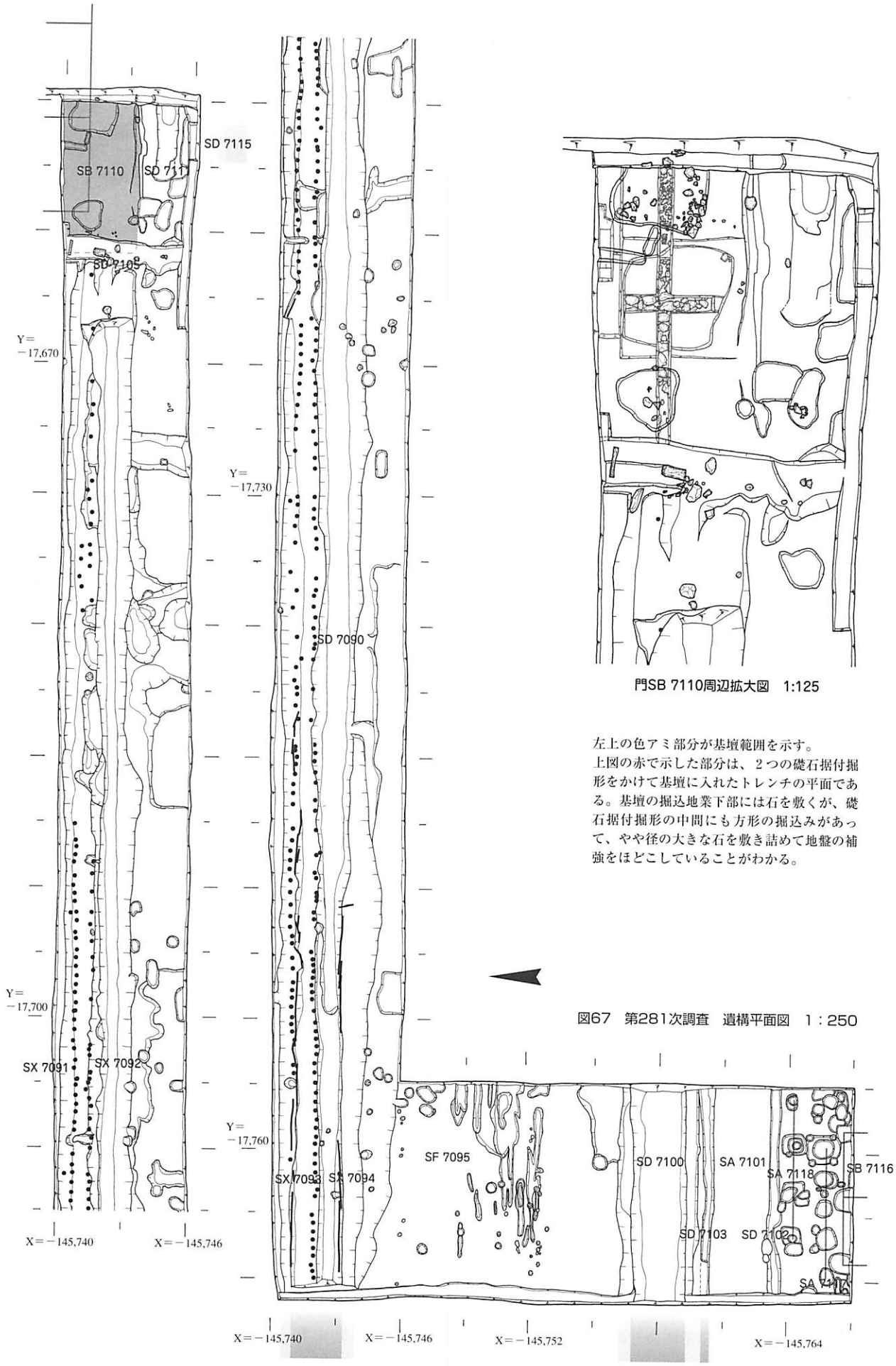
**SF7095**　二条条間路。路面幅員約12m、両側溝心心間で幅約16.2mをはかる。後世の瓦敷と削平のため路面状況は明確でない。

**SD7115**　東二坊坊間東小路西側溝。幅約1.6mの南北溝で、溝底の標高は約59.8mである。奈良市の調査[4]（1988年）で検出した坊間東小路西側溝の北側延長部にあたる。本調査で造成当初は二条条間路上を横断していたことを確認した。溝は白色粘質土で埋め戻されており、門造営にともなって埋められたと考えられる。

**SA7101**　築地塀。条間路南側溝SD7100とその南側の東西溝SD7102との間に幅約2.4mの部分があり、十一坪の北面を区画する築地塀を想定できる。

**SB7110**　基壇上にたつ礎石建東西棟の門。南西の一部を検出したのみで、大部分は調査区外になる。削平され、基壇の痕跡を確認したにすぎない。礎石は既に抜き取られていたが、礎石据付掘形と根石が残存する。据付掘形は1.5m程の不整円形を呈し、２基検出した。この２基の心心距離は15小尺(約4.5m)である。

基壇は二条条間路北側溝、東二坊坊間東小路西側溝を埋めた上に造成している。基壇造成土は粘質土を主体と




門SB 7110周辺拡大図　1:125

左上の色アミ部分が基壇範囲を示す。
上図の赤で示した部分は、２つの礎石据付掘形をかけて基壇に入れたトレンチの平面である。基壇の掘込地業下部には石を敷くが、礎石据付掘形の中間にも方形の掘込みがあって、やや径の大きな石を敷き詰めて地盤の補強をほどこしていることがわかる。

図67　第281次調査　遺構平面図　1：250

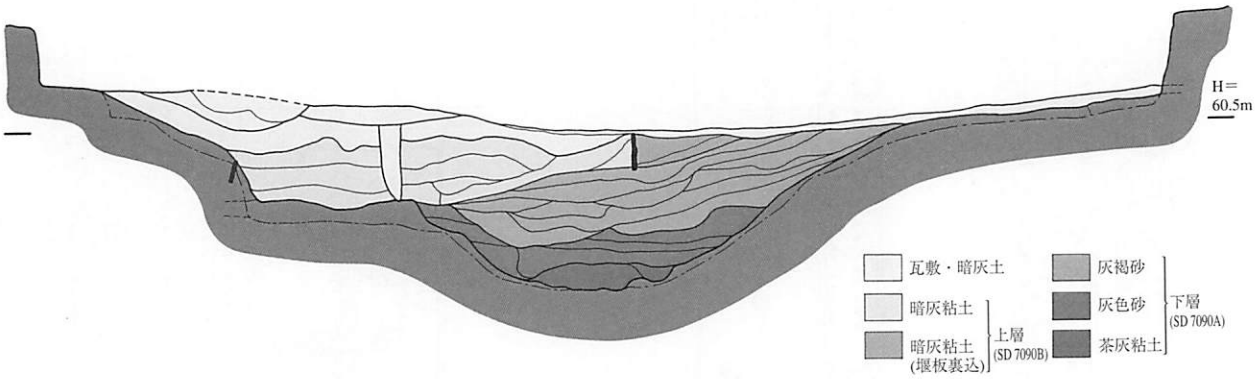



図68　二条条間路北側溝SD7090断面図（Y=-17,757）

し、砂が主体の北側溝の埋土とは明瞭に区別できる。

基壇は掘込地業をともない、最下部には直径10～30cmの両輝石安山岩を主体とした石を敷き詰めている。また、造成の途中で、方形に穴を掘り、石を組み合わせるように詰めている状況も確認できた。これは軟弱な地盤に補強をほどこしたものと考えられる。

南辺においては、地覆石の抜取痕跡と、雨落溝を検出した。雨落溝は痕跡をわずかに留める程度であった。

**SB7116・SA7117・SA7118**　調査区南西隅にある掘立柱建物、あるいは塀と考えられる遺構。いずれも一部分のみで、性格等はあきらかでない。

**SD7105**　門SB7110の基壇西辺を破壊して掘られている南北溝。溝堆積土から平安時代の緑釉陶器、墨書をもつ土師器、柱材、焼印をもつ角材が出土した。

**SX7119**　調査区内の北側一面に敷き詰められていた瓦・礫敷。また、奈良時代の丸瓦を樋状に組み合わせている状況も確認した。これらの瓦は大半が小片で、瓦敷中に緑釉陶器や瓦器の細片が混じっていることから、平安時代以降に平城宮・京の瓦を再利用して敷き詰めたものと考えられる。　（金田明大）

## 3　出土遺物

### 木　簡

木簡は合計526（232）点（括弧内は削屑。内数。以下同）出土した。内訳は、二条条間路北側溝SD7090から502（228）点、二条条間路南側溝SD7100から15（4）点、このほか出土地点不明のものが9点である。このうち、主なものの釈文を別掲した。

SD7090では、SD7090Aから475（209）点、SD7090Bから8（4）点の他、層位不明のものが19（15）点出土した。SD7090Aでは、年紀を記したものとして、⑭の和銅8年（715）、⑬の神亀5年（728）、⑨の神（亀ヵ）（724～729）、⑥・⑧・⑮の天平20年（748）、⑪の天平…（729～767）がある。これらを含め、郡里制下（大宝元年［701］～霊亀3年［717］）の年紀または地名表記をもつものが9点、郡里制または郡郷里制下（大宝元年［701］～天平12年［740］）のものが4点、郡郷里制（霊亀3年［717］～天平12年［740］）下のものが5点、郡郷里制または郡郷制下（霊亀3年［717］～）のものが9点、郡郷制下（天平12年［740］～）のものが3点ある。これらの分布をみると、調査区中央部の約40mの範囲では郡郷里制以後（717年～）のものが集中し、郡里制のものがみられないのに対し、その他の地区はほとんど郡里制のもので占められるという際だった偏りを示す。

内容をみると、後宮務所からの文書木簡②が注目される。文意は不明であるが、「後宮」の語が律令の規定通り用いられていたとすると、妃、夫人、嬪を指す。出土したのが現法華寺、つまり藤原不比等邸のすぐ南であったことを考えると、立后前にここに居住していた聖武夫人藤原光明子にあたる可能性が高く、この木

図69　第281次調査　出土木簡㉔

## 第二八一次調査出土木簡

### 二条条間路北側溝ＳＤ七〇九〇Ａ

①　宿侍司人屋万呂　火司
　　真人　　息万呂
　　右三人　六月八日　209・26・5　011

②・後宮務所　任大見治人氷乱
　　□□□九月二日□
　　［閏ヵ］　(177)・(16)・2　081

③・進上○御倉條架八枝又御垣□木二枝合十枝□□
　　□
・　鯨○　六年四月廿六日木守角万呂　242・27・4　011

④　駿河郡古家里春日部麻々呂調堅魚十一□　(204)・22・2　081

⑤・近江国浅井郡益□□□
・□□□□□□　208・24・3　032

⑥・近江国伊香郡余領郷戸主粟田臣船麻呂戸粟田臣牛麻呂庸米
・一俵　天平廿年九月廿六日　216・28・3　051

⑦・越中国羽咋郡邑知郷衛士乃止臣吉万呂
・銭六百文　151・19・6　032

⑧・越中国鳳至郡小屋郷宮作衛士車以部牛甘
　　六百文
・　天平廿年十二月十一日　202・25・5　032

⑨・青梅郷□川里□□□□連豊
　　［渋　戸主　作ヵ］
・　六斗神□□　(128)・23・4　019
　　［亀ヵ］

⑩　丹波国氷上郡春部里生部真君俵　218・20・5　031

⑪・美作国真嶋郡□
・　天平□　(89)・(14)・5　039

⑫・阿波国板野郡田上郷
・戸主宗何部麻呂庸米　172・32・5　032

⑬・讃岐国多度郡御井郷神奴鳥庸米六斗
・　神亀五年　177・18・7　051

⑭　五斗　和銅八年八月八日　(160)・25・5　039

⑮・□　□
・天平廿年九月　189・35・8　051

⑯・□部□□麻呂進交易銭一貫
・　校丸部嶋守二月廿九日　187・22・3　032

⑰　左衛士府　96・27・4　031

⑱　右大殿　115・18・4　032

⑲　七気丸求給遣无離中丸尓在　222・22・3　043

⑳・曰上「□　□」不□我学□
　　□子曰学而時習之□
　　［子ヵ］　［学ヵ］
・□□識　曰士
　　（コノ他ニ墨痕アリ）　(310)・42・4　019

㉑　孔子謂季氏八□□
　　□□　091

### 二条条間路北側溝ＳＤ七〇九〇Ｂ

㉒　□□□年□□　091
　　［銅　九月ヵ］

### 二条条間路南側溝ＳＤ七一〇〇（上層）

㉓・　秦足人恐々頓首啓　在□□侍者右令□須来月望
　　［冀件尊宅ヵ］
・　□□□□享恩沢　291・(30)・6　081
　　［日ヵ］
　　神亀元年七月十九□□　□

㉔　書□（コノ他、表裏二人面・動物画ナドアリ）　450・49・6　011

簡は光明子の家政機関から発給された文書ということになる。なお以上の推定が正しければ、日付が「閏９月２日」とすると神亀４年（727）以外に可能性はなく、光明子が皇子を出産する（閏９月29日）直前である。

光明子に関係する可能性があるものとしては、「右大殿」と記した付札⑱がある。これが右大臣を指すとすれば、藤原不比等、長屋王あるいは藤原武智麻呂が候補となろう。

また、付札が多いことが注意される。貢進地別にみると、駿河国駿河郡古家里（④など２点）、近江国浅井郡（⑤など３点）、丹波国氷上郡（⑩など２点）、阿波国板野郡（⑫など３点）に偏りがある。税目をみると、庸米付札（⑥・⑫・⑬など明記されたもの８点、その他可能性の高いもの４点）が多い。これには越中国衛士養銭付札（⑦・⑧の２点）も併せて考えるべきであろう。なお、⑧にみえる「宮作衛士」は、宮の造営に

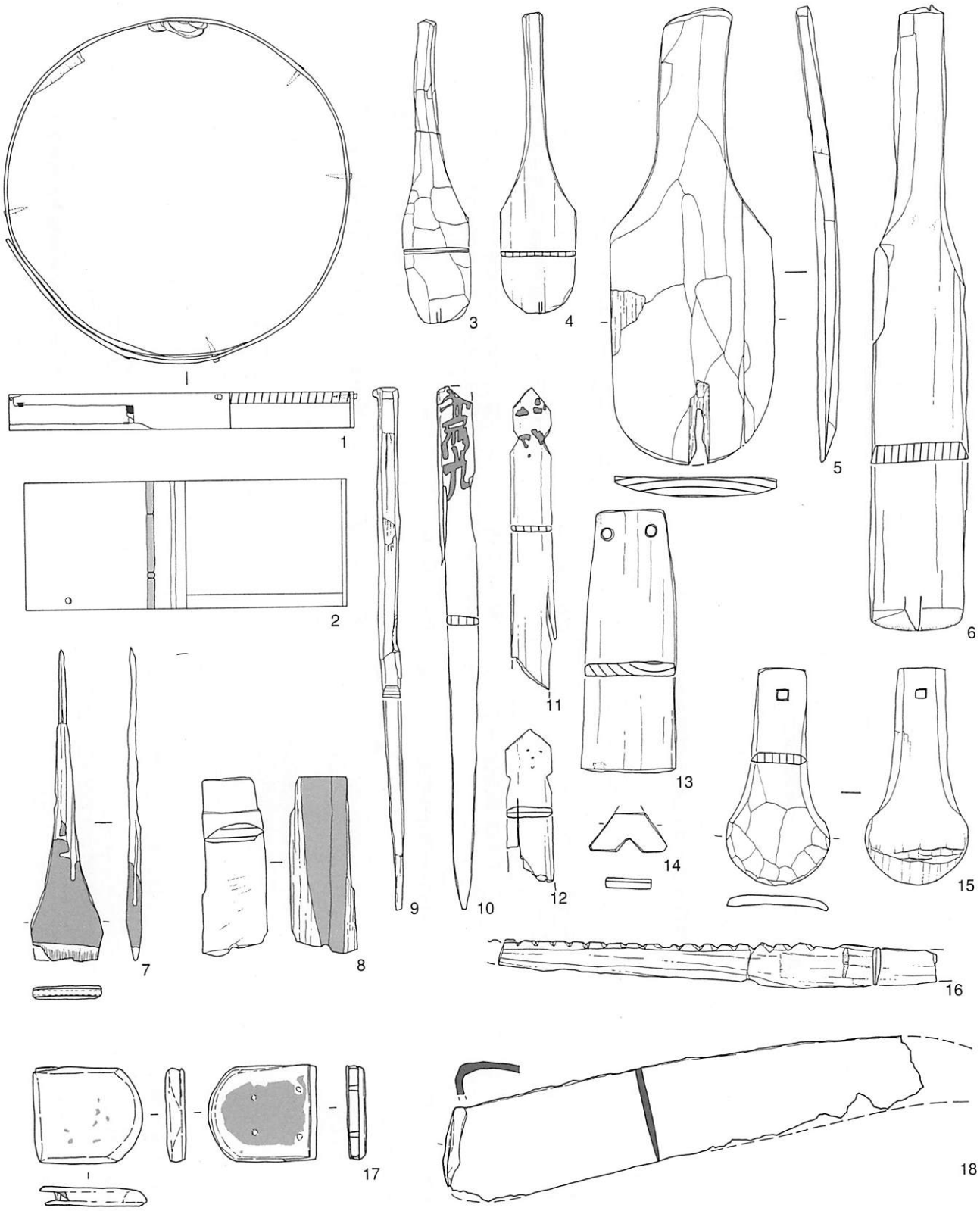



図70　第281次調査　出土木製品・金属製品（1～16は1：3，17・18は2：3）

携わるべき衛士が存在したことを示しており、軍防令第11条衛士上下条の「即非別勅、不得雑使」の規定との関わりで注意される。

この他、宿直を報告する文書木簡①、造営資材に関する木簡（③など3点）、左衛士府関係の付札⑰、薬の封緘木簡⑲、論語の習書（⑳・㉑の2点）、銭付札など銭に関するもの（⑯など4点）が注意される。なお、⑯の銭付札にみえる丸部嶋守は、正倉院文書に天平11年（739）～天平20年（748）にかけて経師などとしてみえる人物と同一人か。

SD7090Bからは和銅□年9月とみられる年紀をもつもの㉒が出土した。削屑であるため、木簡作成の日付を示すか否かはあきらかではない。

SD7100では下層から6（3）点、上層から9（1）点出土した。上層から神亀元年（724）の年紀をもつ書状㉓が出土している。

（古尾谷知浩）

木製品・金属製品

木製品はSD7090から645点など合計666点が出土した。以下に代表的な資料を示す（図70）。いずれもSD7090出土で、とくに示すもの以外はヒノキ製である。

1・2は曲物。2は底板を欠き、側板内面の痕跡より推定。SD7090では曲物底板が36点出土。3・4は匙。3はモミ属。5・6は杓子。SD7090では杓子22点、匙9点が出土。7は漆刷毛。先端を割り裂き、毛を挟む。8は工具柄。柄元はハバキを装着すべく、厚みを減ずる。下端は目釘の穴を残して欠損。裏面には身の茎の跡が変色して残る。トネリコ属。9は釘の様。10～12は人形。12の目鼻は細かな痕跡。形代・斎串はSD7090から22点出土。13は拍板。同様のもの3枚出土。数枚をつづり、左右に開閉し、打ち鳴らす楽器。14は琴柱。15は不明木器。両面とも丁寧に削る。上部に方形穿孔、裏面下端には割りあとが残る。16はすりざさら、モミ属。17は銅製鉈尾。黒漆が残る。18は鉄鎌。（加藤真二）

他にSD7090Aより和同開珎が28枚、SD7090Bより和同開珎1枚、神功開寶1枚、SD7100より神功開寶1枚が出土している。SD7090Aの和同開珎はいずれも調査区中央部に重なるような形で出土している。いずれも「隷開和同」と呼ばれているものである。いずれも調査区中央部に重なるような形で出土したことから、これらは差し銭の状態で溝内に埋没したものと考えられる。（金田明大）

瓦塼類

二条条間路北側溝SD7090Aからは、6135Aが1点、6311Baが2点出土したにすぎない。SD7090Bからは、平城宮軒瓦編年Ⅰ期（6284C）、Ⅱ期前半（6285A、6311A、6313Aa、6313G、6664D、6685A、6685C）、Ⅱ期後半～Ⅲ期（6131A、6282D、6282E、6663A、6663C、6681A、6681B）の瓦が出土したが、法華寺造営期の6137C-6716A、6138B-6714Aや阿弥陀浄土院造営期の6138A・F・H～J-6767・6768の組み合わせはみられなかった（表15）。

二条条間路南側溝SD7100からは、5点の軒瓦が出土した。検出区間が短いが、北側溝と異なり法華寺・阿弥陀浄土院期の瓦がみられないのは、この溝の瓦が主として南側の十一坪に由来するからであろう。

SD7090廃絶後の整地土（灰褐砂質土・暗灰土）からは、Ⅲ期以前の瓦に加えて、阿弥陀浄土院の6767B・6768Cや平安に下る7751Aが出土した。

さらに上の礫層が瓦の量がもっとも多く軒丸瓦17点、軒平瓦28点がある。法華寺造営期のものは6282が1点、6137Cが1点、6138Bが2点、6714Aが1点、6716Aが2点、6721Cが1点、6721Jが1点あり、阿弥陀浄土院造営期のものは、6138Aが1点、6138Fが2点、6138Hが2点、6138Jが2点、6767Aが1点、6767Bが2点、6768Aが4点、6768Bが2点があるほか、平安の7283A・7734Aと中世に下るものが1点ずつある。礫層は中世の整地土であるからどこより運んだか問題だが、瓦の組成からみて阿弥陀浄土院南面築地を南に崩した可能性があろう。

門SB7110の雨落溝からは6126Aが1点、6138Jが2点、6716Aが1点出土した。（岩永省三）

土　器

二条条間路北側溝SD7090を中心に多量の土器が出土した。一部であるが下層SD7090Aより出土したものを中心にとりあげる。

**①SD7090A出土土器**（図71）本溝出土の土器はいずれも平城宮土器Ⅱ～Ⅲ期のものを中心にしている。

**土師器坏**（1）外面はナデ調整である。内面は1段の放射状暗文を施し、底部にラセン状の暗文を施す。

**土師器壺**（2）小型のものである。手づくねで作成され、外面の胴部～底部にかけて指頭圧痕が残る。

| 軒丸瓦 | | | | | | 軒平瓦 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 |
| 6126 | A | 1 | 6285 | A | 4 | 6643 | C | 1 | 6691 | B | 2 |
| 6131 | A | 1 | 6301 | B | 1 | 6644 | A | 1 | 6694 | A | 1 |
| 6135 | A | 2 | 6308 | Aa | 1 | 6663 | A | 3 | 6714 | A | 2 |
| 6137 | C | 2 | | B | 1 | | B | 1 | 6716 | A | 3 |
| 6138 | A | 1 | | ? | 1 | | C | 3 | 6721 | A | 1 |
| | B | 2 | 6311 | A | 2 | | ? | 1 | | C | 2 |
| | F | 3 | | Ba | 2 | 6664 | D | 2 | | Ga | 1 |
| | H | 2 | 6313 | A | 2 | | F | 1 | | Ha | 1 |
| | I | 1 | | G | 1 | | N | 1 | | J | 2 |
| | J | 5 | 型式不明 | | 33 | 6667 | A | 8 | | ? | 4 |
| | ? | 4 | 白鳳時代 | | 1 | 6671 | B | 1 | 6732 | C | 1 |
| 6225 | A | 1 | 平安時代 | | 1 | 6681 | A | 2 | 6767 | A | 1 |
| 6229 | A | 1 | 巴　瓦 | | 1 | | B | 1 | | B | 4 |
| 6274 | Ac | 1 | | | | | E | 2 | 6768 | A | 5 |
| 6282 | Ba | 2 | | | | 6682 | C | 1 | | B | 2 |
| | D | 1 | | | | | F | 1 | | C | 2 |
| | E | 1 | | | | 6685 | A | 3 | | D | 1 |
| | Ia | 1 | | | | | B | 1 | 型式不明 | | 28 |
| | ? | 3 | | | | | C | 1 | 平安時代 | | 3 |
| 6284 | B | 1 | | | | 6688 | Ab | 1 | 中　世 | | 1 |
| | C | 1 | | | | 6691 | A | 4 | | | |
| 軒丸瓦計 | | | | | 88 | 軒平瓦計 | | | | | 107 |

| 丸瓦 | | 塼 | | 道具瓦・その他 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 重量 | 2,090.6kg | 重量 | 55.1kg | 面戸瓦 | 2 |
| 点数 | 14,749 | 点数 | 57 | 熨斗瓦 | 11 |
| 平瓦 | | 凝灰岩 | | 刻印平瓦「三」 | 3 |
| 重量 | 3,637.7kg | 重量 | 2.3kg | 道具瓦 | 1 |
| 点数 | 29,408 | 点数 | 7 | 瓦製円盤 | 2 |

表15　第281次調査　出土瓦塼類集計表

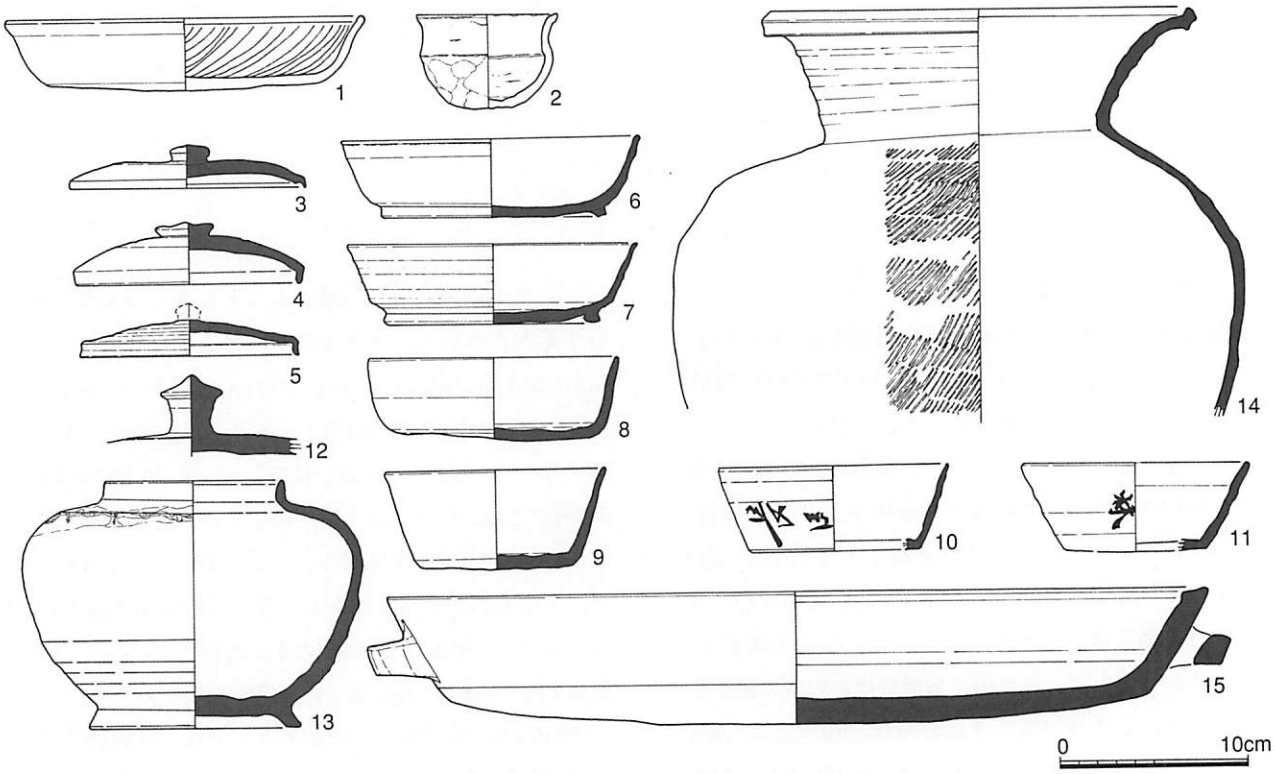



図71　SD7090A出土土器　1：4

**須恵器蓋**（3～5）　5は茶灰色を呈し、ロクロメが明瞭にみえる。尾張猿投窯の産と考えられる。

**須恵器坏**（6～11）　7は底部外面に回転ヘラケズリをおこない、高台との間に稜をもつ。10·11は墨書をもち、「長□」、「林」と書かれている。

**須恵器蓋**（12）大きなつまみをもつ、特殊な形状である。壺の蓋と考えられる。

**須恵器壺**（13）外面肩部に緑～白色の自然釉が付着する。焼成時に大きく焼け歪んでいる。

**須恵器甕**（14）明灰色を呈する。硬質に焼成されている。外面は平行タタキ、内面は同心円上の当て具痕をナデ消している。

**須恵器盤**（15）釣手が2本1対で胴部に付く。

**②調査区内出土土器**（図72）

**土師器坏**（1）内外面とも回転ナデを施している。外面に粘土輪積の痕跡が残る。SD7090B出土。

**緑釉陶器段皿**（2）白色、軟質の素地に緑釉を全面に施釉する。見込の部分にはミガキを施す。貼付高台をもつ。尾張猿投窯の製品か。瓦敷出土。

**須恵器壺**（3・4）　3は白色で軟質の焼成であるが、外面に炭素を吸着させており、表面は黒灰色を呈する。横瓶の可能性がある。SD7090B出土。4は漆が内面全体に付着している。割れ口にも一様に漆が付着しており、打ち割られて使用されたのであろう。外面も漆が滴れた状態で付着する。SD7090B出土。

**土師器皿**（5）外面はナデ調整。内面は一段の放射暗文を施している。底部外面に「養船嶋」「放鳥数百籠」「馬養」と墨書されており、放生会に関連する内容をもつものとして注目される。SD7090B出土。

**土師器皿**（6）内外面に墨書を多く施している。いずれも筆慣らし等の目的で書かれたようである。小片ではあるが緑釉陶器をともなって出土した。SD7105出土。

（金田明大）

## 4　門SB7110の性格

ここで、本調査で検出した門SB7110の性格について考察してみよう（図73）。規模は東二坊坊間東小路の中軸線[5]を参考に推定すると、桁行3間で柱間寸法は15尺等間の門を復原できる。東大寺転害門、法隆寺東大門という現存する奈良時代の門はいずれも桁行3間で、桁行柱間寸法をみると、転害門は中央間20尺・両端間17尺、法隆寺東大門は中央間13尺・両端間9尺であり、これらと比較すれば、SB7110は両者の中間に位置している。SB7110は、柱間寸法をみる限り、奈良時代の門では大型の部類に入るといえるだろう。一方、二条条間路と東二坊坊間東小路の交差点に設けられているという位置を考えると、少なくとも西限を平城宮、東限を東二坊大路、南限を二条条間路とする2町以上の敷地をもつ区画に開く門と考えることができる。また、道路上に張り出して建つ点も特筆される。

ここで考えられるのは、北側に存在する法華寺との関係である。法華寺は藤原不比等邸を娘の光明子が平城還都後の天平17年（745）以降に寺院に改めたもので、総国分尼寺として、総国分寺である東大寺と並び奈良時代

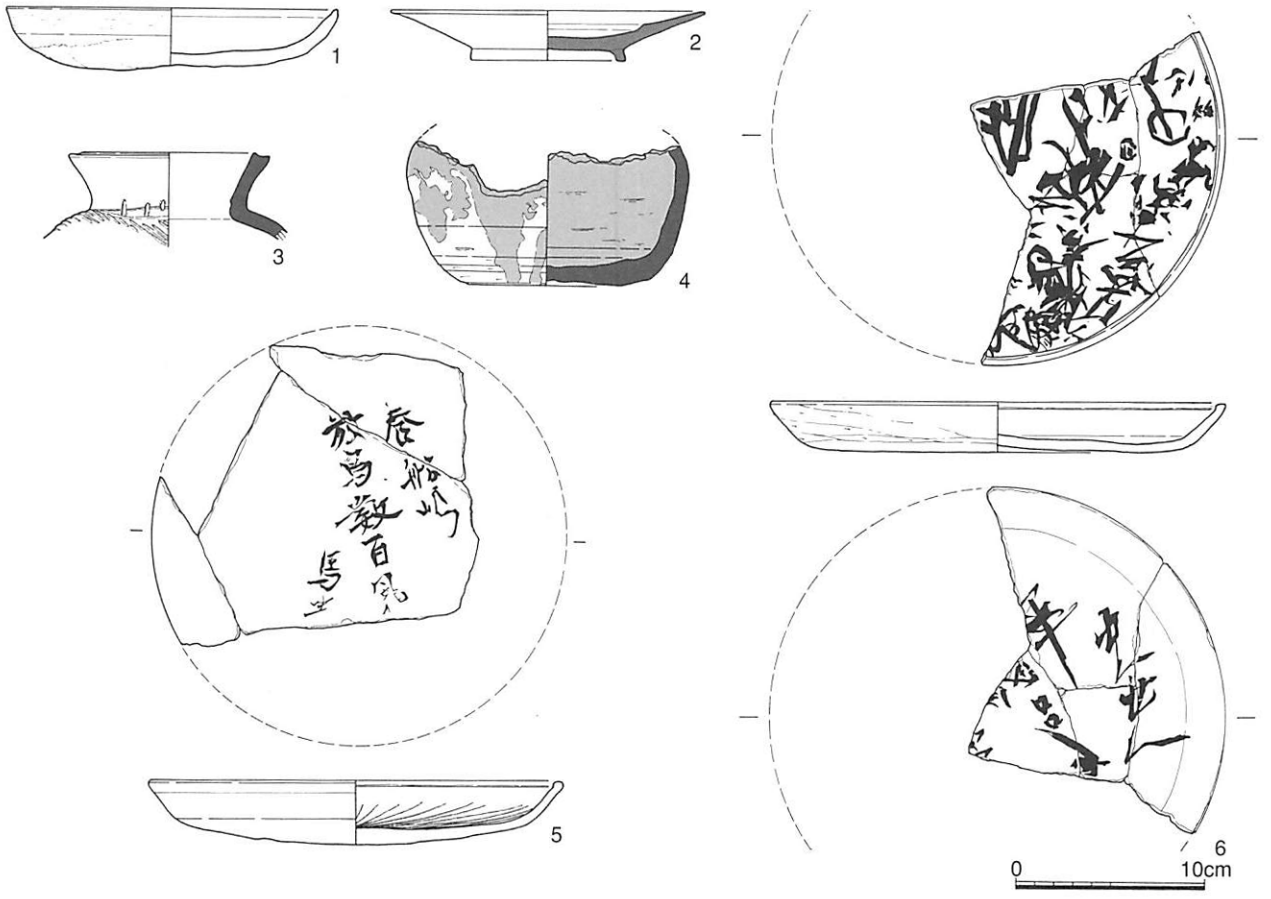



図72　第281次調査　出土土器　1：4

における中心的な寺院である。また、門の北西にあたる左京二条二坊十坪は阿弥陀浄土院の地に比定されている。阿弥陀浄土院は法華寺の西南隅に存在したことが『続日本紀』にみえ[6]、中世の「佐保新免田土帳[7]」にも「浄土院」の名称がみえること、「浄土尻」の小字名が現在もこの周辺にあることなどがその根拠である。したがって、検出したSB7110は不比等邸、不比等死後の邸宅、法華寺のいずれかに属する門である可能性が高い。

つぎに発掘調査による出土遺物をみてみよう。門の基壇造成に際して埋められたと考えられる、SD7090Aにおける最新の紀年木簡は天平20年のものであり、門の造営年代はこれ以降となる。また、門の基壇を破壊して掘られた溝SD7105の出土遺物から、門の存在下限は平安時代とすることができる。したがって、この門は奈良時代の後半に建築・使用されたといえ、不比等邸にともなう門ではなく、法華寺に関連する可能性が高い。なお、中世の「法華寺田畠本券[8]」には調査区南側の左京二条二坊十一坪を「南大門路」と呼称しており、中世までなんらかの門の存在が意識されていたようだ。

法華寺の寺域は、先行する藤原不比等の邸宅の占地や、平城宮との関連といった視点を含め、古くから議論の対象となっている。喜田貞吉氏は先述の「法華寺田畠本券」の記載から、阿弥陀浄土院を寺域内に含めず、寺域の南限を二条条間北小路と考えた[9]。これに対して太田博太郎氏は二条条間路を南限と考え、南大門が二条条間路に開かれていたとした[10]。本調査による門の発見により、法華寺の寺域が二条条間路を南限とする可能性を高めたといえるだろう。

ところで、法華寺の中心伽藍である金堂、講堂、東西両塔などは現在の寺域を中心とした二条二坊九坪に存在したと考えられ[11]、その中軸線は平城遷都以前より存在する隅寺（海竜王寺）の占地にも影響されて、条坊区画とは一致しない。一方、本調査において検出したSB7110は条坊に一致させて設けられており、その中軸推定線は法華寺中心伽藍の中軸線より東に約24mずれる。また、阿弥陀浄土院が本門と中心伽藍との間に存在することからみても、SB7110を法華寺中心伽藍の南大門と考えることは難しい。

以上から、本調査で発見した門SB7110は、法華寺の中心伽藍、付属施設、阿弥陀浄土院等を含めた寺域南辺中央部に設けられた門として理解される。条坊制に則って築かれたこの門と法華寺中心伽藍の中軸線のずれは、藤原不比等邸をもとにしながら長期にわたって継続的に建設がおこなわれた法華寺の造営過程を示す痕跡とみることができるのではないだろうか。なお、法華寺南大門は阿弥陀浄土院の区画をへだてた、一町北側の二条条間北小路に面し、中心伽藍の軸線上に存在すると理解するのが適当であろう。

図73　法華寺寺域と門SB7110の関係　1：4000

## 5　まとめ

本調査では、条坊道路の側溝をほぼ1町ぶんの長さにわたり調査することができた。門の発見により法華寺の寺域について考察できるデータを提示できたことと、側溝から木簡をはじめとする多量の遺物の出土をみたことが特筆できる。

しかし、現在では都市化の波を受け、本調査を含めて法華寺周辺の開発事前調査が増加し、1996・97年度で左京二条二坊十一坪はそれまでの水田から、住宅地へと景観が一変した。阿弥陀浄土院推定地にあたる十坪には水田内に大きな石が存在し、内部園池の立石ではないかとの意見もある。現在、この周囲だけが水田として箱庭的に残存しており、開発の手は確実に伸びてきている。いかに遺跡保存と調査成果の活用を図っていくか、という問題を浮き彫りにした調査であった。　（金田明大）

註）

1）「第80次調査」『昭47平城概報(2)』
2）本年報66-67頁
3）「左京二条二坊十一坪の調査」（『年報1997-Ⅲ』）
4）奈良市教委「左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査第151次」（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』1989年）
5）上記文献、東二坊坊間東小路の中軸線はY＝－17.656.315
6）『続日本紀』天平宝字五年六月庚申条
六月庚申、皇太后の周忌の斎を阿弥陀浄土院に設く。その院は法華寺の内、西南の隅にあり。忌の斎を設けむが為に造れり。その天下の諸国は各々国分尼寺に阿弥陀丈六像一軀、挟侍菩薩像二軀を造り奉る。（岩波書店・新日本古典文学大系本による）
7）応永13年(1406)成立。
8）『三箇院家抄』所収。成立は応仁2年(1468)～文明元年(1469)と推定されている。
9）喜田貞吉「平城京及大内裏考評論(八)」（『歴史地理』13－4　1909）
10）太田博太郎「法華寺」（『大和古寺大観第五巻』1976　岩波書店）
11）前掲註10)。このうち、西塔は宝永四年(1707)の地震まで残っていたことが知られる。

### 平　城　専（こらむ）欄　②

**◆調査日誌から**　1997年6月6日

夏を思わせる暑い日。東一坊大路西側溝から出土したばかりの木簡を見ていた某調査員は、驚きの声をあげた。その木簡は残念ながら上端が欠けていて、表裏ともに上の一文字が読めなかったが、表には「善妻娶時来」、裏には「眼見眼見不如手作」と記してあったのだ。これは、何かの文章を書き写したものか、はたまたまじないに使ったものなのか。

おりしも、この発掘調査にあたっている調査員には、総担当者をはじめ、独身者が3人いた。そのうえ、調査部初の女性調査員、花の独身H嬢も新人研修として参加していた。それからしばらくしてからでしたね、キミが来年結婚することが明るみにでたのは・・・、木簡をとり上げた今年の年報編集者・H君!!この木簡は、婚期の到来を告げ、祝福した地中からのメッセージだったのですね。

その後、もう一人の独身調査員Sも電撃的な結婚を果たし、バラ色の新婚生活を送っているらしい。まさに、木簡の霊験あらたかといったところだが、総担当者・Y君だけはまだ独身のままである。彼は、今度こそ自分の分を掘り出そうと、次の現場の二条条間路北側溝での捲土重来を期しているというもっぱらの噂である。

実は、この妻を迎える木簡、きっと本来は2枚セットだったのだと思う。もう1枚の「楽旅行往時亦来」と記した木簡は、闇から闇に葬られてしまったのではないか。そのため、HもSも結婚式は挙げたものの、新婚旅行に行くことはできずに、滅私奉公している。今度の発掘では、2枚ともに掘り出さなくてはいけませんよ、Y君!!

ともあれ、皆さん、ご結婚おめでとうございました。　（T）

# ◆左京三条一坊十四坪の調査―第282-3次

**はじめに**　店舗建設の事前調査。左京三条一坊十四坪東辺のほぼ中央部にあたる。坪内は過去に第46次（昭和42年度）、第249次調査（平成6年度）がおこなわれている。今回は、南北に2つの調査区を設定した。北区は88㎡、南区は67.5㎡。調査期間は5月6日～30日。

**検出遺構**　東一坊大路西側溝と時期不明の土坑などを検出した。東一坊大路西側溝SD4951は調査区東半にあって南に流れる。堆積土の状況から大きく2層に分かれる。

**出土遺物**　SD4951から土器、瓦、木製品、金属製品、木簡、その他が出土した。土器は数十点、瓦は6311Aaを含む軒瓦4点などが出土したが、溝各層位との対応は認められない。木製品は人形2点、桧扇13点、鳴鏑、鏃のためし各1点など計31点。金属製品は銅製人形3点、鉄製人形1点など計6点、その他に鉱滓12点、鞴羽口1点がある。また、瓜の種が9,506個出土しており、溝の上流に便所の存在を想定できよう。（清野孝之）

木簡はSD4951から、堆積土下層を中心に139点（うち削屑121点）が出土した。①は主蔵監が所管の春宮坊に宿直者名を報告した木簡。主蔵監は、皇太子の宝物や衣服を掌る官司である。②にみえる少録は八省か省レベルの官司の第四等官だが、記載位階はやや高い。③は玉の様（見本）の付札である。（山下信一郎）

**まとめ**　今回の調査では東一坊大路西側溝の位置を確認し、溝内よりさまざまな遺物が出土した。とくに春宮坊関連の木簡出土の意義は大きい。（清野孝之）

第二八二―三次調査出土木簡

**SD四九五一出土木簡**

①・主蔵監□宿□［申　侍カ］□　□
□　□
□□忌寸□□
（「主」ヨリ「寸」ノ字ノ上ニ左ノ重書アリ）
「□□」

②・「□□食右従」［間カ］　300・39・4　011
少録正六位上□　(64)・(25)・2　081

③玉様　(111)・11・4　019

④米七俵　(111)・17・5　039

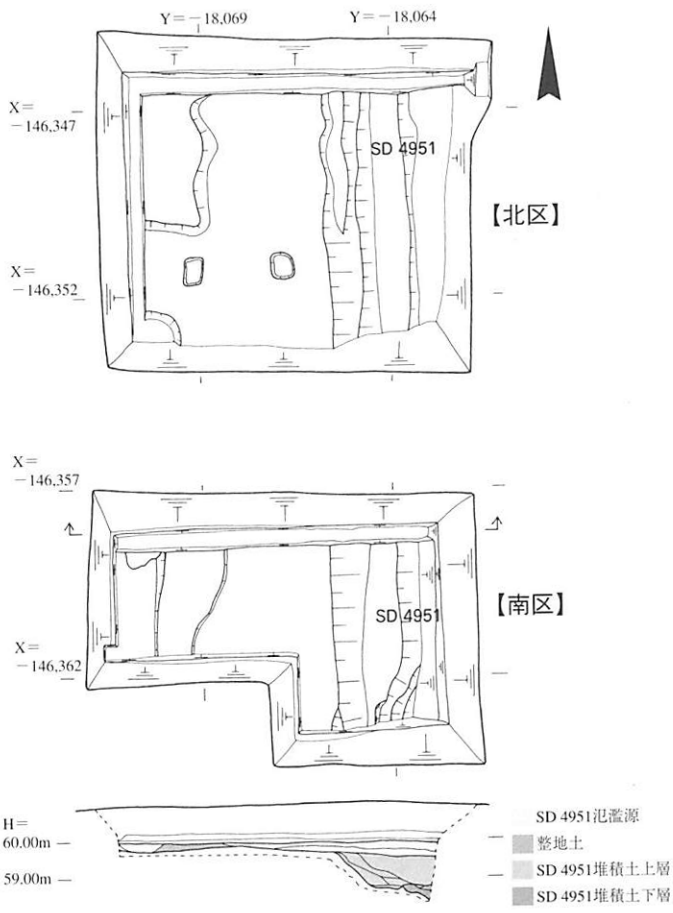



図74　第282-3次調査　遺構図　1：200

# ◆阿弥陀浄土院推定地の調査―第282-6次

## 1　はじめに

本調査は、共同住宅の建設にともない、奈良市法華寺町で実施した。調査地は、阿弥陀浄土院推定地の北半中央に近く、第80次調査（昭和47年度）の東約40m、第183-21次調査（昭和62年度）の西に接しており、南西約35mには、庭園の石と称されている立石が水田中に残っている。調査面積は133㎡（東西19m×南北7m）、調査期間は、8月18日から9月12日。

調査地の基本層序は、耕土、床土、灰褐粘質土（遺物包含層）と続き、現地表下約35cmで遺構検出面の黒褐粘質土となる。遺構検出面の標高は約60.8mである。

## 2　検出遺構

検出した主な遺構は、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑等であるが、調査区が限られているため、建築遺構については、一部を検出したにすぎない。

**SB7210**　梁間3間、東庇付き掘立柱南北棟建物の北妻になると考えられる。身舎柱間は10尺等間で、庇の出は10.5尺。庇の柱穴には、径21cmほどの柱根が残る。

**SB7220**　SB7210の北に12.5尺離れて、柱筋を揃えて建つ、梁間同規模の東庇付き掘立柱南北棟建物の南妻。

**SB7230**　桁行4間以上の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行10尺等間で、梁間は9尺と推定される。

**SB7235**　梁間2間、8尺等間で、掘立柱南北棟建物の南妻になるのであろう。西端の柱掘形から中世の平瓦が出土した。建物方位は北でやや西に振れる。

**SB7247**　一辺約1.5mほどの大型の柱掘形をもち、建物方位は北で東に振れる。東から1間目の柱掘形には礎板が残っていた。

**SB7260**　掘立柱建物の一部になると考えられる柱穴2個。柱間は9.5尺で、いずれも礎板をともなう。東の柱穴の礎板には、径約30cmの柱根の圧痕があり、西の柱穴の礎板は、年輪年代から710年頃に伐採年代が求められる。

**SA7224**　SB7210とSB7220の間にある1間の南北塀。両柱穴の間にあるSX7225の掘形のため確定できないが、一連の布掘りであった可能性を残す。あるいは、SX7225とあわせ、何らかの構築物を構成するのであろうか。

**SA7231**　南北塀で北には続かない。1間ぶんを検出。柱間は7尺。

**SA7240**　南北塀で柱間は9尺等間と推定される。2間ぶんを検出。

**SA7238・SA7239**　東西、南北とも1間の逆L字形の塀。柱間はともに11.5尺。

**SA7254・SA7255**　東西、南北とも1間のL字形の塀。柱間はともに11.5尺。SA7238とSA7254は8尺離れ、柱筋が通る。これらの塀は、確認できたものについては、柱掘形の底に石の礎板を置くという共通した特徴があり、あるいは、北辺を開けた囲いのような一体のものになる可能性も考えられる。

**SD7250**　幅約1.1m、深さ約15cmの中世の斜行溝。埋土からは、瓦類、木製品が出土した。

**SK7261**　径約1.3m、深さ約1.2mの土坑で、中世の瓦類を含む。井戸になる可能性もある。

**SK7268**　推定径約3m、深さ約1.6mの不整形土坑。井戸の抜取穴と考えられるが、井戸枠等は遺存しない。

このほか、SB7256、SX7262・SX7265等は掘立柱建物の一部になると考えられる。　（小林謙一）

## 3　出土遺物

出土遺物の多くは瓦類で、土器類は少ない。また、SD7250からは、中世の木製品が出土している。

**軒瓦**　奈良時代の瓦は、軒丸瓦４点、軒平瓦10点であるが、6768Bが３点あるほかは、１型式１点である。藤原光明子邸期のものは、6301B･6313C･6667A、宮寺期ないし法華寺創建期のものは、6691A･6721Ga･6714A･6718A、阿弥陀浄土院期のものは6133F･6726D･6768A･6768Bがある。

法華寺は平安時代に衰微したが、俊乗坊重源（12世紀末～13世紀初）、湛空（13世紀前半）による修造を経て、西大寺叡尊（13世紀中頃）による本格的復興がおこなわれた。本調査区で鎌倉以降の瓦が見られるのは、修造復興期の遺構が近辺にあることを示す。SB7235の柱掘形からは鎌倉時代の平瓦が出土している。また「東塔廊瓦嘉禄三年造之」（1227年）銘軒平瓦が、斜行溝SD7250付近で５片、他所で２片出土している。この瓦は安貞元年（1227）に完成した東大寺東塔を囲む回廊用に造られたもので、法華寺で出土する理由は定かではない。東大寺東塔では中房に「七」字を置く複弁八葉蓮華文軒丸瓦が組むと推定されているが、現在のところ、法華寺では出土していない。　（岩永省三）

**木製品**　１は草履の芯板。左右２枚からなるスギの薄板で、表裏両面には繊維の圧痕が残る。爪先側の側縁はやや内彎する。踵側は欠損するが、円弧を描くことがわかる。草履の芯板は中世（12世紀末～16世紀）の福岡・博多遺跡群や鎌倉・今小路西遺跡、千葉地遺跡、福山・草戸千軒遺跡などで出土している。２はヒノキの曲物底板。３ヶ所の木釘痕が残る。側板も一部出土しており、高さ4.7cm以上あったことが判明するが、綴じ方などは不明。

（加藤真二）

## ４　まとめ

本調査で検出した遺構には、建築としての規模をあきらかにしうるものはないが、重複関係からだけでも、SA7231→SA7230→SA7210、SB7247→SA7240→SB7220→SB7235という新旧関係があり、少なくとも４時期の変遷がある。また、SB7247とSB7260のように同時に存在しがたいものもある。

調査地は、天平宝字３年（759）、光明皇后によって発願された阿弥陀浄土院の推定地である。今回検出した遺構のいずれかがその時期にあたると考えられるが、本調査では、それを積極的に証明する資料を得ることはできなかった。しかし、奈良時代各時期の瓦が出土するとともに、中世の遺構を確認することができたことにより、当該地の重要性は、ますます高まったと言えよう。

（小林謙一）

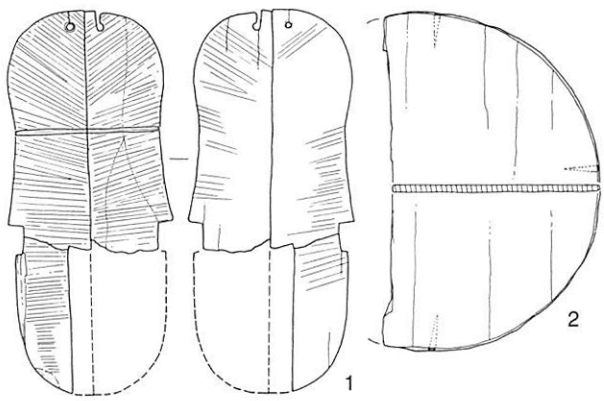



図75　中世の斜行溝SD7250出土木製品実測図　1：3

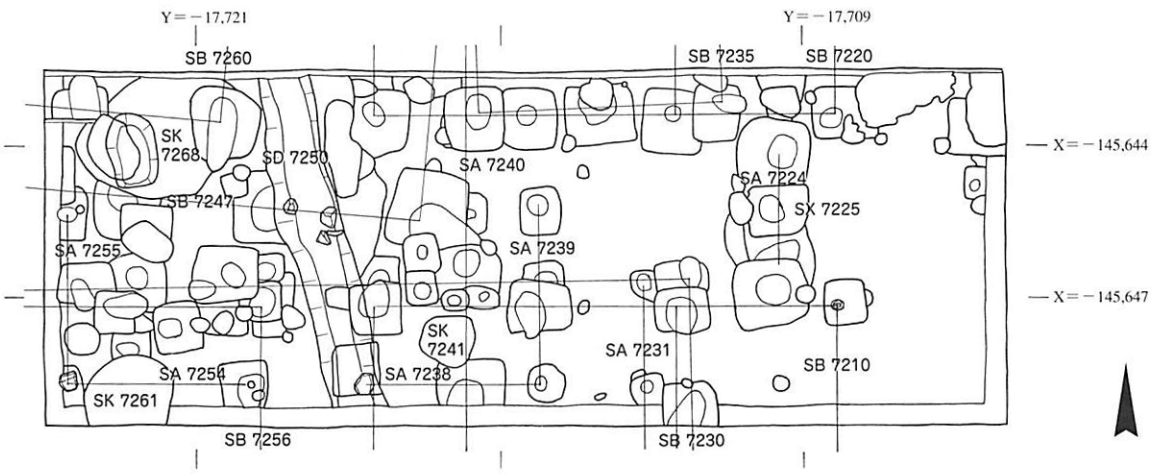



図76　第282-6次調査　遺構平面図　1：150

# ◆左京三条二坊二坪(長屋王邸)の調査
## ―第291次

### 1　はじめに

奈良市二条大路南一丁目における店舗改築にともなう事前調査。発掘面積は340㎡。調査期間は1月28日～2月18日。

調査地は、平城宮跡第178次（昭和61年度）および第269-4次（平成8年度）調査区の西方、また第186次西（昭和63年度）調査区および第118-15次（昭和54年度）調査区の南方に位置し、奈良時代の平城京左京三条二坊二坪の南部にあたる。この場所は、上記の調査等により長屋王邸の中央内郭西南部にあたると想定され、とくにA期（平城遷都から養老年間頃：710～720年頃／時期区分は、奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995による。以下同。）の中央内郭西南隅の確認に主眼をおいて調査をおこなった。

調査地の層序は、調査区北部でみると、近年の盛土、耕土の下に灰色砂質土があり、その下に地山とみられる淡黄灰粘質土、橙褐粘質土がある。遺構検出はこの地山面でおこない、検出面の標高は60.15～60.20m付近。地山面は、国土方眼座標X＝-146,237～238付近で約40cm削平されるため、それ以南では同じく地山面上の検出面の標高は59.80m付近となる。削平後の地山面の直上に部

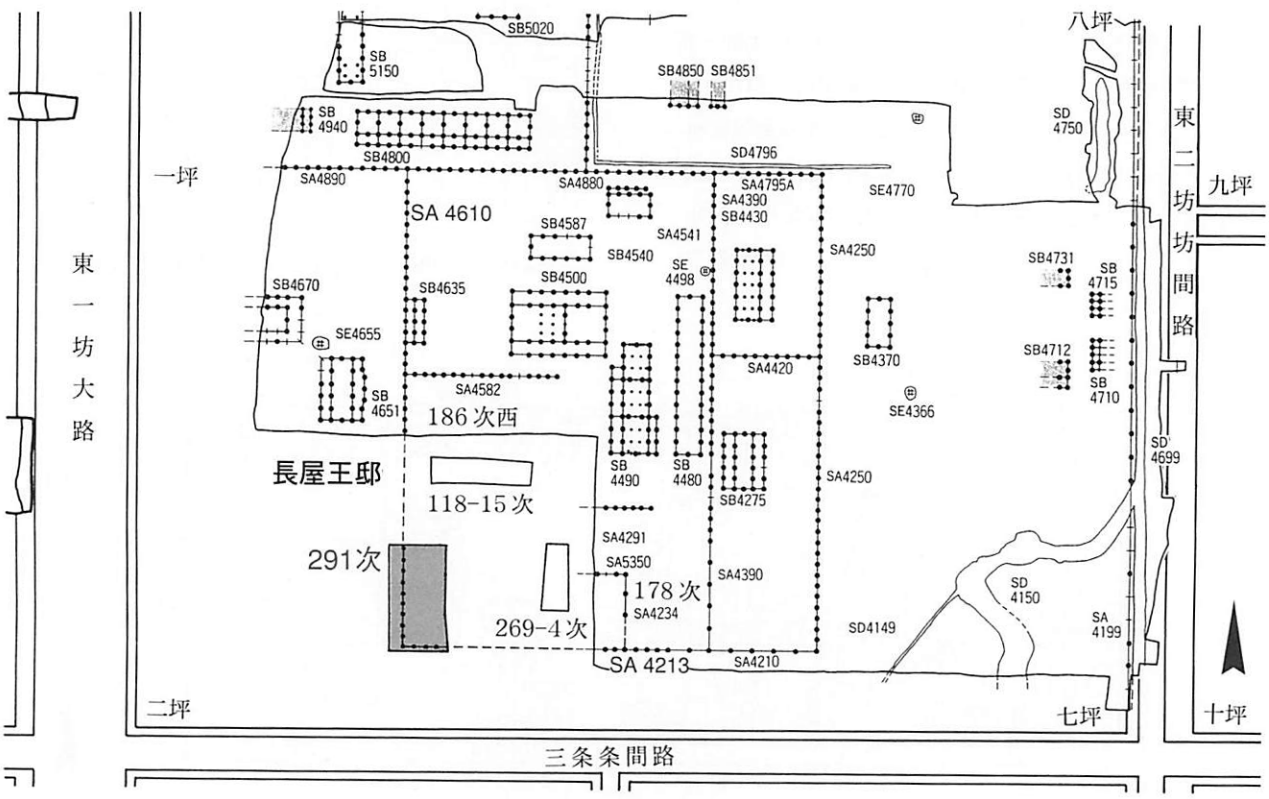



図77　第291次調査　発掘位置および周辺遺構（A期）配置図

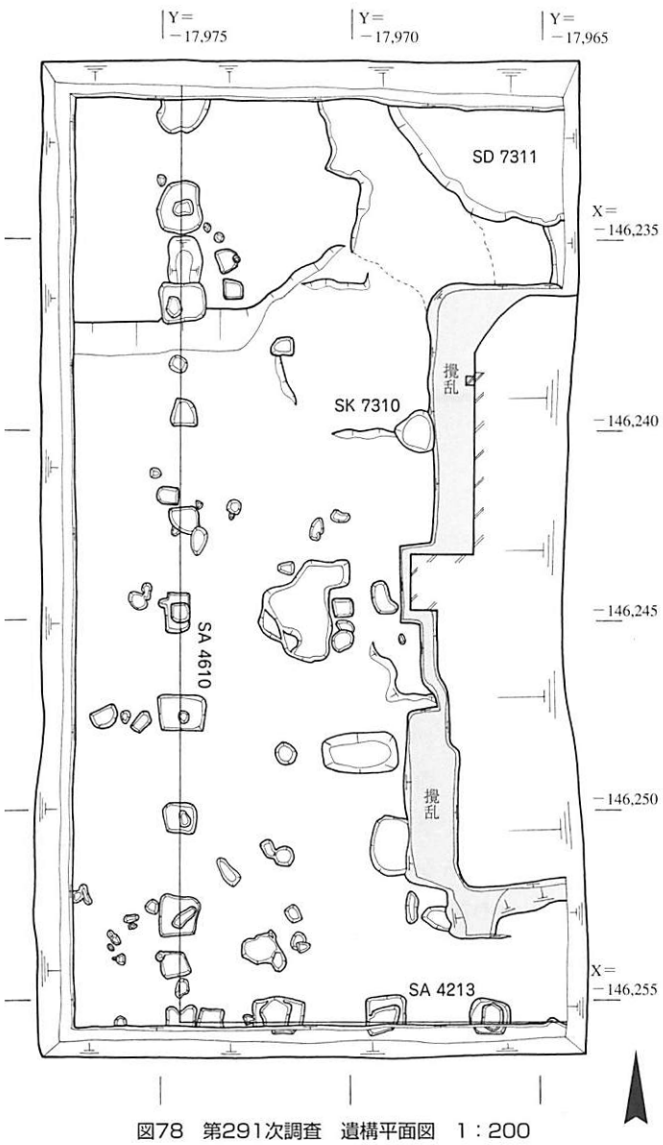



図78　第291次調査　遺構平面図　1：200

分的に遺物包含層があり、さらに削平部を埋めた暗灰褐粘質土には、奈良時代の遺物のみを若干含むことから、この削平および埋め戻しは奈良時代におこなわれた可能性が大きい。なお、調査区南東部では、削平が顕著でなく、検出面の標高は60.00～60.05mと高い。

## 2　検出遺構

A期の長屋王邸では、正殿SB4500や脇殿SB4480の建つ中央内郭は、南辺を掘立柱東西塀SA4213で、西辺を同南北塀SA4610で区画されていた。従前の調査においては、SA4213は、東端から2間ぶんを中央東郭南辺の掘立柱塀SA4210と同じ18尺（5.3m）等間、それ以西の6間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出しており、またSA4610は、北端から24間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出していた。本調査では、それぞれの延長線上でSA4213西端3間ぶんを9尺（2.65m）等間で、SA4610南端9間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出した。SA4213とSA4610の交点、すなわちA期の中央内郭西南隅の柱心の座標値は（X＝-146,255.7，Y＝-17,974.5）であり、SA4213東端およびSA4610北端の柱心の座標値がそれぞれ（X＝-146,255.1，Y＝-17,897.6）と（X＝-146,138.6，Y＝-17,974.3）であることから、総長はSA4213が76.9m、SA4610が117.1mとなる。それぞれを9尺（2.65～2.66m）で割付けると、29間と44間になるが、SA4213は東端の2間が18尺等間であるため、18尺×2間＋9尺×25間と推定できる。

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 29.9kg |
| 6135 | A | 1 | 6644 | B | 1 | 点数 | 200 |
| | ? | 3 | | C | 2 | 平瓦 | |
| 6272 | B | 3 | 6721 | Ga | 1 | 重量 | 60.4kg |
| 6291 | Aa | 1 | | I | 1 | 点数 | 298 |
| 6316 | ? | 1 | | ? | 1 | 塼 | |
| | | | | | | 重量 | 10.5kg |
| | | | | | | 点数 | 9 |
| | | | | | | 道具瓦 | |
| | | | | | | 熨斗瓦 | 4 |
| 軒丸瓦計 | | 9 | 軒平瓦計 | | 6 | 小型平瓦 | 1 |

表16　第291次調査　出土瓦塼類集計表

SA4213、SA4610以外の奈良時代の遺構としては、瓦を集中的に投棄した土坑SK7310がある程度で、これ以外に顕著な遺構はなかった。また、奈良時代より古い時代の遺構としては、調査区北東部で古墳時代の土器をごく少量含んだ旧流路SD7311を検出した。

## 3　出土遺物

出土した瓦塼類は、表16のとおり。このうち、軒丸瓦6272Bと軒平瓦6644B・Cの組合せは、A期の長屋王邸所用瓦として、従来の調査でも出土している。また、6135Aは、C期（長屋王の変から平城遷都頃まで：729～745年）の瓦である。

出土した土器は、長屋王邸の時期に相当する平城宮土器Ⅱ期のものが大半を占める。これらの土器のなかには、漆の付着したものがみられ、漆運搬用および漆塗作業用の容器として用いられていたとみられる。このことは、この付近での漆工房的な施設の存在をうかがわせるが、中央内郭の内側にそのような施設の存在は考えられず、SA4213の南方に比定できよう。

## 4　まとめ

本調査の成果は、A期・長屋王邸の中央内郭西南隅を想定通りの位置で確認したことである。また、SA4213はA期のみ、SA4610はC期までの存続であるが、それらが破棄された後、本調査区の位置は空閑地であったことをあきらかにした。　（小野健吉）

# ◆東一坊坊間路西側溝の調査
## ―第282-14次

**はじめに**　個人住宅改築にともなう事前調査である。調査地は、平城宮壬生門より南へ約120m、また東一坊坊間路とその東西の両側溝を確認した第269-5次（平成８年度）調査区の北へ約90mの位置にあたり、東隣には第258-8次、西隣には第258-9次（ともに平成７年度）調査区がある。調査区内において東一坊坊間路西側溝の存在が予想されたため、敷地西寄りに東西10m×南北５mのトレンチを設定した。

**検出した主な遺構**　奈良時代の遺構として、東一坊坊間路およびその西側溝を検出した。第269-5次調査において検出した東面築地SA7070および添柱列SS7064は検出しなかった。

東一坊坊間路SF7045を、遺物包含層を除去した黄色粘質土の地山面で検出した。整地土等はとくに確認されなかった。また、東一坊坊間路西側溝SD7050は、幅5.7m、深さ1.5mである。西側溝の堆積は大きく２層に分けることができ、下層が奈良時代前半、上層が奈良時代中～後半以降の堆積である。

**出土遺物**　SD7050より土器と瓦が出土し、木簡等は出土しなかった。土器は奈良時代中頃のものが西側溝の上層堆積土より出土した。

出土した瓦塼類は表17の通りである。西側溝の下層堆積からは藤原宮式の軒丸瓦6273Bが出土した。また、上層堆積からは軒平瓦6681Bが出土している。

**まとめ**　左京三条一坊の八坪と九坪の間にある東一坊坊間路に関する調査は、過去２回おこなわれているが、後世の削平により坊間路およびその側溝は確認されていない。南の第269-5次調査では、左京三条一坊の七坪と十坪の間にある坊間路とその東西両側溝を検出している。本調査で検出した坊間路西側溝の心は、第269-5次調査で検出した坊間路西側溝の心と一致している。壬生門心と本調査で検出した西側溝心との距離は約30大尺（10.8m）であり、壬生門心で折り返すと、東一坊坊間路の幅は約60大尺となる。

（高妻洋成）

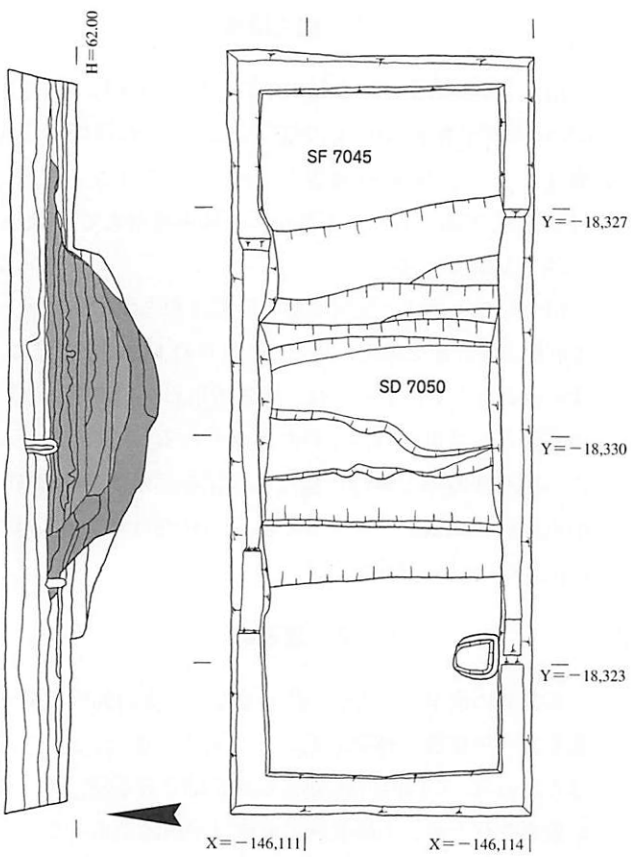



図79　第282-14次調査　遺構平図　1：150

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 重量 | 19.4kg |
| 6273 | B | 1 | 6681 | B | 1 | 点数 | 137 |
| 6316 | Da | 1 | | | | 平瓦 | |
| | | | | | | 重量 | 74.2kg |
| | | | | | | 点数 | 468 |
| | | | | | | 道具瓦 | |
| | | | | | | 隅切平瓦 | 1 |
| 軒丸瓦計 | | 2 | 軒平瓦計 | | 1 | 熨斗瓦 | 1 |

表17　第282-14次調査　出土瓦塼類集計表

# ◆市庭古墳の調査
## ―第282-13次・第282-11次・第282-12次

### 1　はじめに

今年度、市庭古墳（平城天皇楊梅陵）後円部周濠・外周濠の周辺で、３ヶ次の調査をおこなった。いずれも住宅建設にともなう事前調査である。報告は、内側の周濠の調査（第282-13次調査）を先に述べ、次いで外周濠の調査（第282-11次・第282-12次）の順とする。

### 2　周濠の調査（第282-13次）

調査区の概要

調査区は市庭古墳（平城天皇楊梅陵）後円部東側の周濠と周堤部分にあたる。周濠にほぼ直交するよう、当初、開発予定地の西半に南北３ｍ×東西22ｍの調査区と、東半にこれより北に２ｍずらして南北３ｍ×東西17.5ｍの調査区を設定したが、後に東西両調査区をつなぐように拡張したため、最終的には面積約120㎡のクランク状をなす調査区となった。調査期間は平成10年１月13日から３月４日までである。

基本層序

調査区内は各所で近代以降の大規模なゴミ捨て穴による攪乱を受けており、それ以前の土層を観察できる部分は限られている。東区では地表から表土（20～30㎝）、中世の遺物を含む橙褐色土（20～40㎝）の下に標高約75.0ｍの所で淡青灰粘土の地山を検出した。西区の東端から７ｍまでの範囲では、淡青灰粘土の地山がなくなり、その下にある淡黄灰褐土がみえる部分がある。これより西、すなわち周濠部分では表土（約50㎝）の下で奈良時代の整地土を検出した。

検出遺構

**SG2150**　市庭古墳周濠。西調査区西半において、地表下約3.5ｍ（標高72.0ｍ）で周濠の底を確認した。土層は上から表土が約0.5ｍ、奈良時代の整地土（黄褐色土、灰茶色土、赤茶褐色土）が約2.0ｍ、周濠の堆積土（灰色粘質土、木屑混暗茶色土）が約1.0ｍであった。

**SX2170**　市庭古墳周堤。淡黄灰褐土の地山を削りだして斜面を造った上に、赤褐色の土を積んで周堤を築いている状況を確認した。後世に削平を受けており、上面では地山が露出し、古墳にともなう埴輪などの施設は認められなかった。現存する周堤積み土上面の標高は74.8ｍである。

**SX230**　市庭古墳周堤の葺石。周堤内側（西斜面）には南北３ｍ、東西1.5ｍの範囲にわたって、こぶし大～直径20㎝程度の葺石の裏込石が残っていた（一部後世に欠失）。裏込石は周堤積み土の上に灰色粘質土を詰めながら据えている状況を確認できた。斜面の傾斜角度は約30度である。

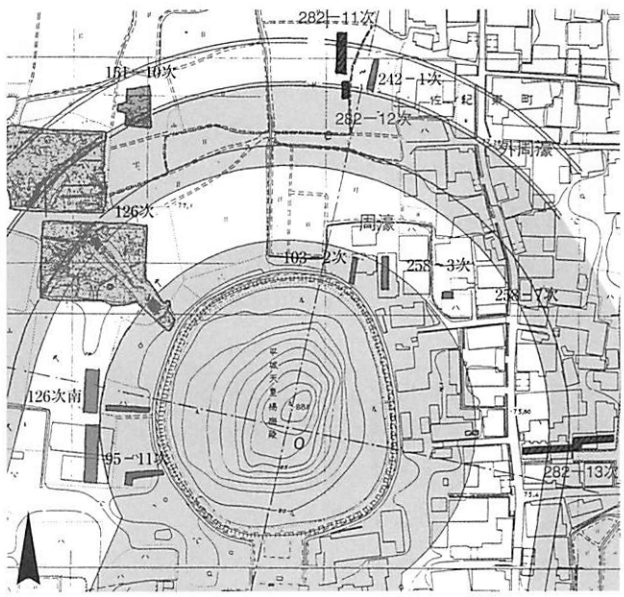



図80　調査位置と墳丘復原案　1：3000

図81　第282-13次調査区全景（西からみる）

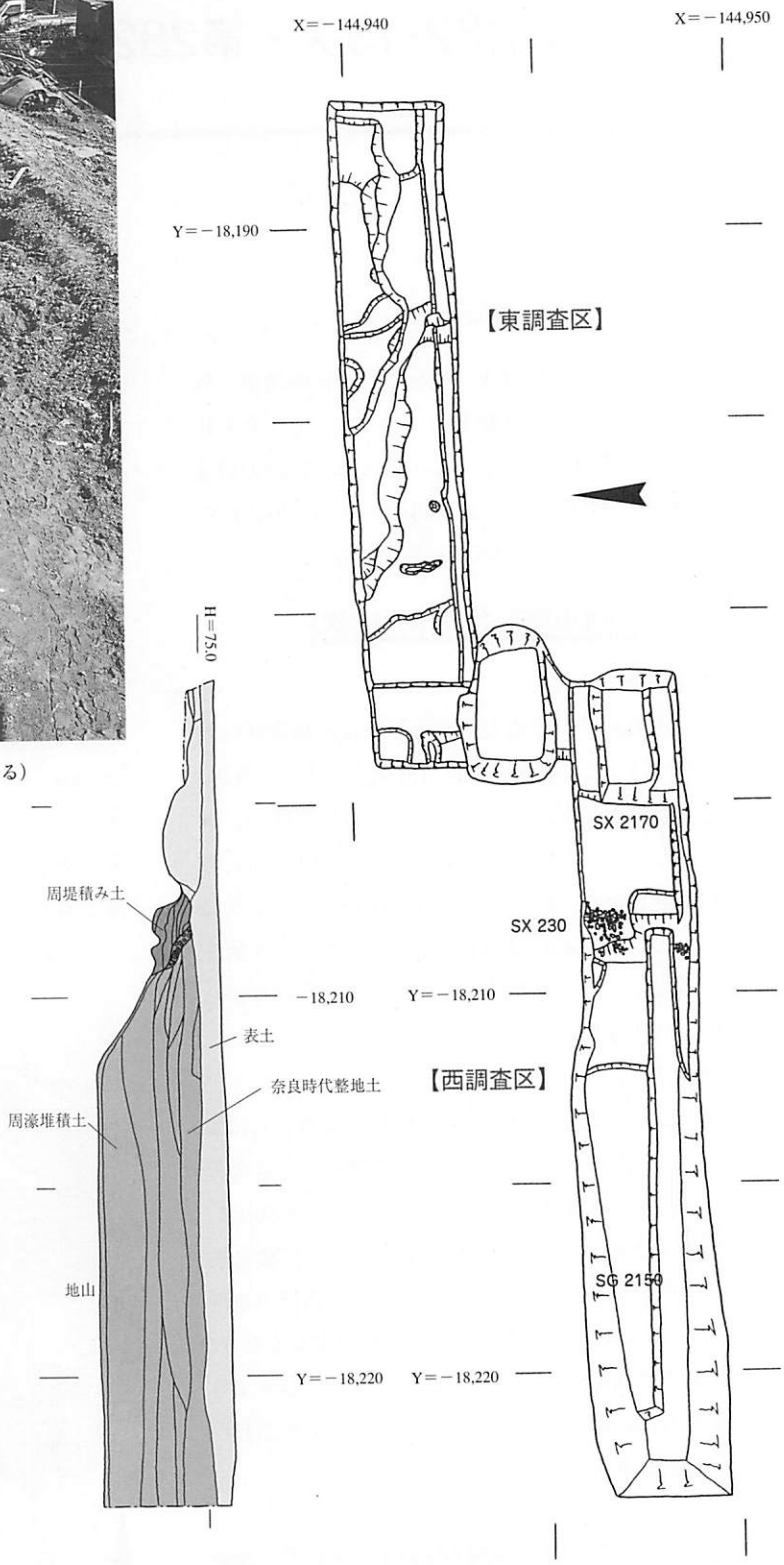



図82　第282-13次調査　西調査区南壁断面図（左）・遺構平面図（右）1：200

### 出土遺物

遺物はほとんど出土しておらず、わずかに表土に混入した埴輪片がある程度である。

### まとめ

本調査では市庭古墳後円部東側で初めて周堤西側の落ちを確認した。これは従来の市庭古墳復元案（岸本直文「市庭古墳の復元」『文化財論叢Ⅱ』1995）にほぼ整合するとみてよい。

なお、後円部東側における周堤東側の落ちの位置、および外周濠の存否については、東側に広がる水上池と重なることもあり、従来から問題とされていたが、今回の調査区の範囲ではこれを知るための手がかりは得られなかった。今後の調査に委ねたい。

（古尾谷知浩）

## 3　外周濠の調査（第282-11・-12次）

第282-11次調査

調査面積は南北17m×東西３mの51㎡である。調査区は1993年度におこなった第242-1次調査区の約10m西にあたる。調査は市庭古墳外周濠への北側外提部からの落ちを確認することを目的とした。調査区の北端では地山面を現地表下約0.7mで確認し、北から約３分の１の地点から地山面が南へ緩く傾斜し始め、南端では約1.1mの深さとなる。これは外周濠への明確な落ちとはいえないが、外堤部が削平された外周濠の痕跡（SX217）であろう。なお、地山面の北半は黄白色粘土、南半は黄褐色バラスである。

この他に検出した主な遺構は、調査区北端にある土坑とそれを切る幅１m、深さ0.2mの東西溝SD215である。ただし、遺物が含まれていないため、いずれも時期は不明だが、奈良時代に遡る可能性もある。

第282-12次調査

本調査では、市庭古墳の内堤から外周濠への落ちを確認し、北接する第282-11次調査の成果と合わせて、外周濠の幅を推定することを目的とした。

検出した主な遺構は、幅40cm、深さ50cmの斜行溝SD220と斜行溝北端における落ち込みSX225である。溝内から遺物は出土していないが、堆積土の状況からみて、この溝は奈良時代のものと思われる。また、斜行溝北端における落ち込みSX225では、堆積土は下から①地山（黄褐色バラス）の落ち込み、②下層堆積土、③15～20cmの大きさの石列、④上層堆積土に混じる５～10cmの小礫を含む層、に分けられる。斜行溝SD220の堆積土は、②の下層堆積土と基本的に同じであり、③の石列が斜行溝の入口を止めるように置かれている。市庭古墳の外周濠は奈良時代に庭園への再利用が考えられるため、斜行溝、北端の石列および落ち込みは庭園に関係する遺構の可能性もある。また、発掘区中央付近より北に向かって地山が緩やかに傾斜しており、内堤から外周濠への落ちの痕跡と考えられる。第282-11次調査で推定された外周濠北端の傾斜変換線と本調査の外周濠南端と思われる傾斜変換線間の距離は約17mとなる。これは第126次調査（昭和55年度）で確認された外周濠の幅（肩部で18m、溝底で16m）に近い。　（舘野和己・高妻洋成）

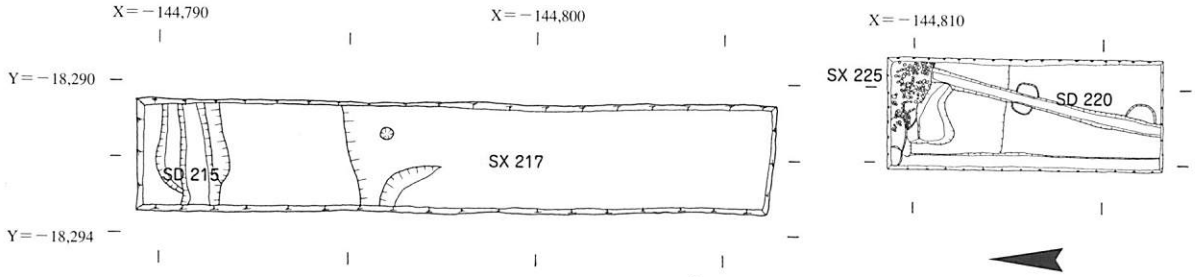



図83　第282-11次（左）・282-12次（右）調査　遺構平面図　1：200

### 平　城　専（こらむ）欄　③

**◆伊東太作さん退官記念サッカー**

奈文研サッカー部設立当初からのメンバーで、ゴールキーパーとして大活躍された伊東太作さんが本年３月末日をもって定年退官された。それに先立つ３月14日（土）、伊東さんの退官記念歓送サッカー大会を開催した。この日は吉備池廃寺の現地説明会と重なり、藤原サッカー部員が参加できなかったのは残念であった。しかし、それでも20人以上の関係者が試合に集結し、伊東さんの退官を祝った。相手は奈文研OBのU氏率いる某女子大学サッカー部コーチ陣チーム。要するに、下心の固まりのような男どもの集団？であり、われら硬派の平城サイトスの敵ではなく、試合は３対０で圧勝！伊東さんも10分ばかりゴールマウスにたち、みごと敵の攻撃を零封した。

なお、ここ数年、サイトスの得点源として奮闘してきたＪ通信の寺沢記者をはじめ、Ｋ通信の福嶋記者、Ｙ新聞の渡辺記者が、いずれも人事異動で転出。この日は、この３人のジャーナリストの歓送サッカー試合ともなった。試合後は、お好み焼き屋「萬福亭」で祝賀会。記念品として、伊東さんには寄書きしたフランスワールドカップ専用ボール、他の３名には恒例のミニ・ボールを贈呈した。　（A）

# ◆旧大乗院庭園の調査―第285次・第287次

## 1　はじめに

本調査は、名勝旧大乗院庭園保護管理委員会と（財）日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園の保存修理事業」（平成６年度～）にともなう事前調査である。発掘調査は既に平成７年度に第260次・第268次、平成８年度に第275次の各調査がおこなわれている。

本年度の調査は、庭園敷地の北東部を中心におこなった。調査区は、園池北東の陸部（A地区、約300㎡）、園池東岸中央北部（B地区、約100㎡）、園池東岸北端（C地区、約20㎡）、北中島（D地区、約60㎡）、北岸中央（E地区、約50㎡）の５ヶ所を設定し、A・B地区を第285次、C・D・E地区を第287次とした。

## 2　各調査区の様相と検出遺構

園池東岸（B・C地区）

東岸陸部は、森蘊が『中世庭園文化史』（1959）で東御所跡と推定しており、中世・近世の大乗院庭園の骨格をもっとも良好に残している。基本的な変遷は南岸と同様で、当初は東に緩やかにのぼる洲浜石敷の斜面を形成していたものに、中世以降、洲浜の上に堆状に盛土をして護岸の汀線を形成している。陸部には近世の盛土層が60cm程度あり、第275次および本調査ではこの面を保存するために、それ以前の遺構を検出するにはいたらなかった。この面上に近代以降の造作がそのままなされている。漆喰叩き状の帯状遺構SX7191・円形遺構SX7192・ドーナツ形状遺構SX7193、金属管をともなう石組遺構SX7194を検出した。

園池北岸および北方陸部（A・E地区）

A地区の調査では、園池東岸陸部と同様、表土直下には漆喰叩き状の帯状遺構SX7170・SX7171・SX7172・SX7173や円盤形状の遺構SX7175・SX7176・SX7177を検出した。円形遺構SX7175・SX7176の中心部に金属製の筒状遺物が据えられていることなどから、帯状遺構・円形遺構を併せて、昭和６年頃に造られたミニゴルフ（ベビーゴルフ）のコース跡であることがあきらかになった。昭和初期に流行したミニゴルフに関する文献によると、SX7170・SX7171上にある煉瓦と石とモルタルで組まれた構造物SX7184・

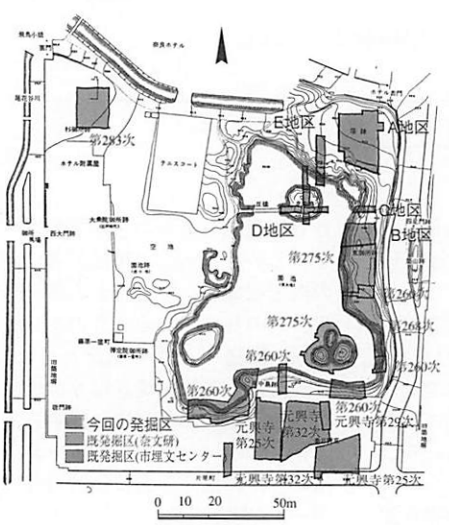



図84　第285・287次調査　発掘区位置図　1：3000

図85　A地区　SX7170，SX7175，SX7184など（南からみる）

図86　E地区　SX7195土器出土状況（南からみる）

SX7185は、ハザードと呼ばれるコース途中の障害物であることがわかる。コース脇にある鉄管をともなう石組の遺構SX7178・SX7179・SX7180・SX7181は、SX7178を断ち割った結果、排水をするための自然浸透式暗渠桝であることがわかった。さらに、このミニゴルフコースの遺構が検出されなかった部分で、南北６ｍ×東西８ｍのトレンチを設定して掘り下げ、併せて、Ａ地区南半東壁部分も掘り下げて断面観察をおこなった。その結果、東岸の北部から現在の奈良ホテルの門付近まですりつける形で近代に２ｍ以上盛土していることが観察された。これらの遺構面は平坦ではなく、２基の土坑SX7187・SX7188を検出したのみである。これらの土坑には近世の瓦片などが大量に投棄されており、中心部には二葉松類の根株が検出された。断面観察では、この面の下に中近世の遺物を含む造成土がさらに１ｍ以上堆積しているので、中世の塔の遺構が残っているとしても、さらに下にあるものと考えられる。

E地区の断面観察では、園池推定水位90.0mによる汀線の位置から、北岸は江戸時代まで現況より10m以上北側に存在したことが観察された。この部分には４ｍ近い盛土を施している。地山直上の層には黒色粘土を主体とした腐植土が堆積し、現在の汀線から12m北側の位置で急勾配をもって立ち上がる汀線部を確認した。黒色粘土層はこの付近でなくなる。汀線部と考えられる付近には径約40cmの石を地山上に据えてあり、護岸を形成していた可能性がある。近世以前の汀線と考えられる付近の地山は、南岸・東岸と同様、礫を主体とするものである。

明治42年（1907）に奈良ホテル本館を建てた際、園池北方に控える鬼薗山は頂部を12m切り下げ、約10,000㎡のホテル用地が造成されている。本調査は、かつて塔が建っていたと森蘊が推定していた園池東北部の台地状の部分が、実は近世以前の原景観からの改変を著しく受けていることを確認したことになる。

| 軒丸瓦 | | 軒平瓦 | |
|---|---|---|---|
| 型式　種 | 点数 | 型式　種 | 点数 |
| 平安時代 | 2 | 中世 | 3 |
| 小型菊丸 | 7 | 近世 | 13 |
| 巴瓦 | 5 | 近現代 | 1 |
| 近世 | 1 | 型式不明 | 3 |
| 近現代 | 1 | | |
| 型式不明 | 4 | | |
| 軒丸瓦計 | 20 | 軒平瓦計 | 20 |
| 丸瓦 | | 平瓦 | |
| 重量 | 51.0kg | 重量 | 307.8kg |
| 点数 | 524 | 点数 | 3,117 |
| 道具瓦・その他 | | | |
| 軒桟瓦１・面戸瓦１・熨斗瓦１ | | | |

表18　第285・287次調査　出土瓦塼類集計表

北中島（D地区）

島自体には大きく４時期の変遷がみられ、基本的に時代が下るにつれて、高く盛り上げ、南側に太らせている。断面観察によると、もともと北中島の基礎となる地形が北岸から続いていたのを、地山まで掘り込んで島としたらしいが、この造成がどの時期におこなわれたのかは不明である。また、トレンチD２の西端では、柱穴２基を検出したが、園池西岸にわたる反橋に関わるものか確証はない。島の形状変化を考えると、古い橋脚跡は現在より北に位置した可能性もあろう。トレンチD１では、地山直上の土層で、柱穴と土坑数基を検出した。とくに土坑SX7195には奈良時代以前の土器類が納められていた。これらは大乗院庭園の園池が古い自然池を基本としたものであるとすると、平城遷都以前における池の利用について考える手がかりとなるものである。

## 3　出土遺物

近代の造成土から、古代～近世の瓦、徳利などの陶器が出土した。B地区・C地区の洲浜部分では遺物は皆無であったが、B地区北端の東西トレンチ東端では多量の土器片のほか、現地表面より30cm下の黄褐土層からほぼ完形の天目茶椀１点が出土した。D地区では、土坑SX7195から７世紀頃の鍔釜（河内産）、土師器の長胴甕、須恵器の甕など、奈良時代以前の土器片が多数出土している。瓦類の出土数は表18のとおり。

## 4　まとめ

今回の調査で、従来、原形をよく保っていると考えられてきた園池北縁の地形は、主に盛土造成によって大きく変貌していることがあきらかになった。今後、園池と岸の形態を中心に、古代・中世・近世・近代、各時代における庭園地形の骨格を検討し、景観の変遷をつぶさに復原構成することが肝要である。（平澤　毅・臼杵　勲）

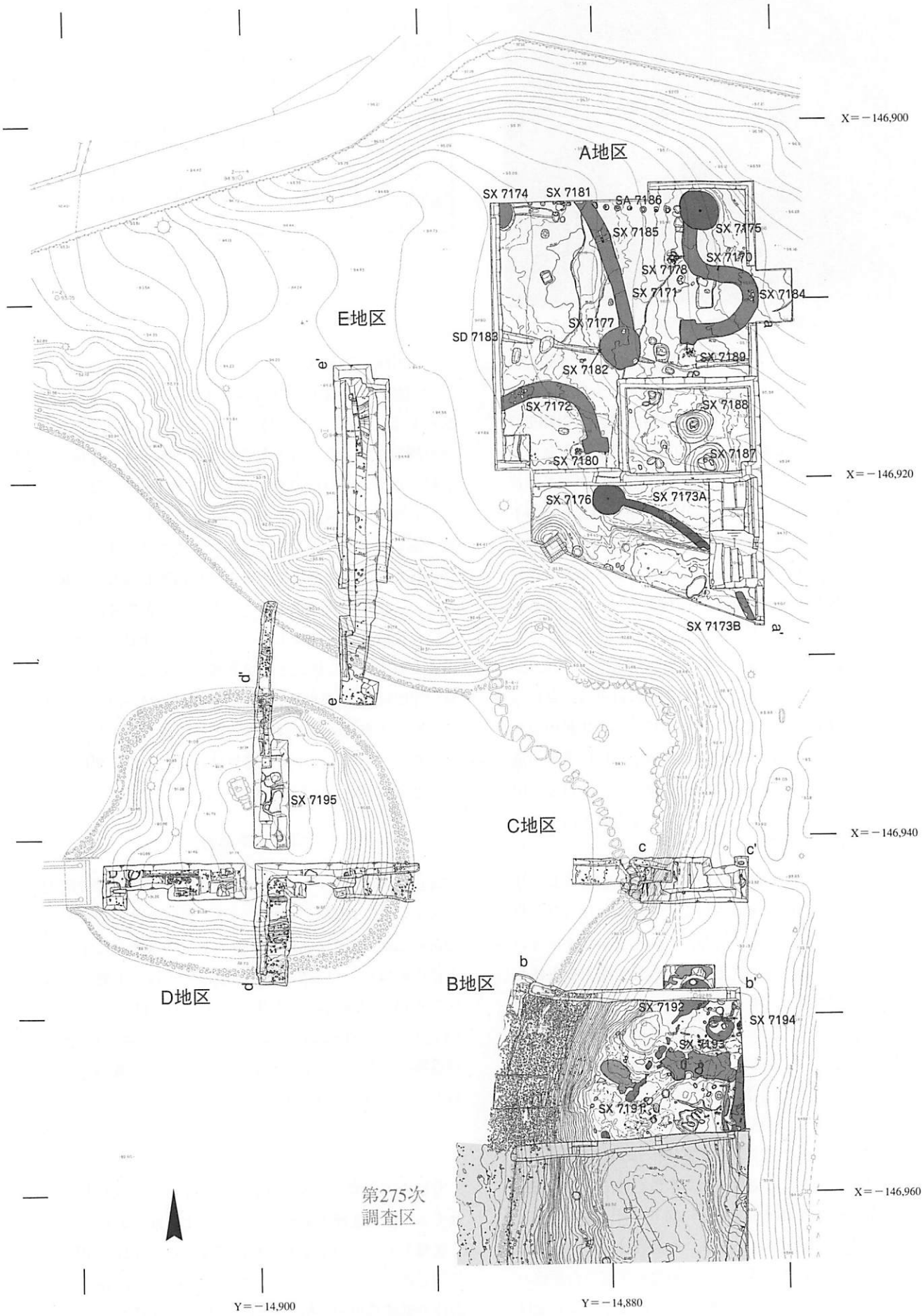



図87　第285・287次調査　遺構平面図　1：300

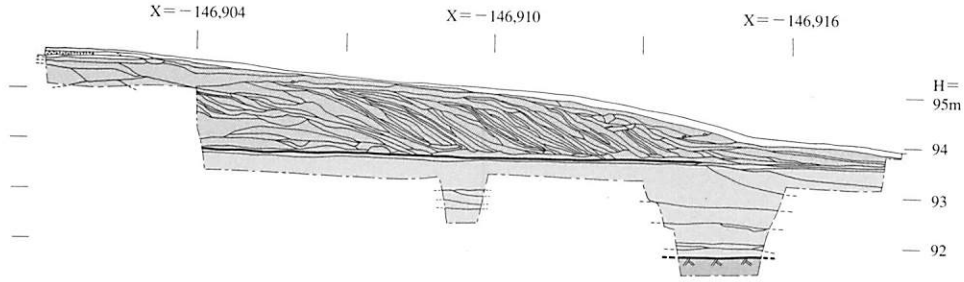



図88　A地区　a－a'　断面図（西から）1：150

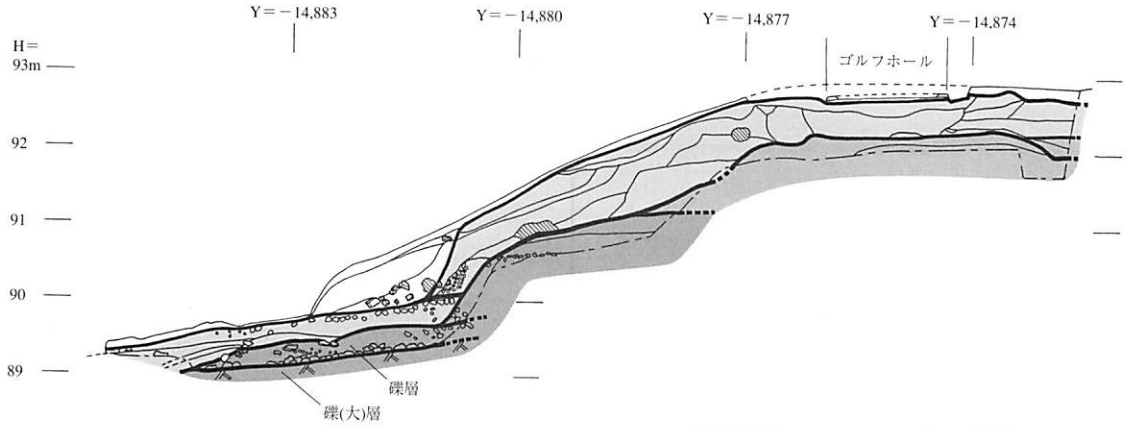



図89　B地区　b－b'　断面図（南から）1：100

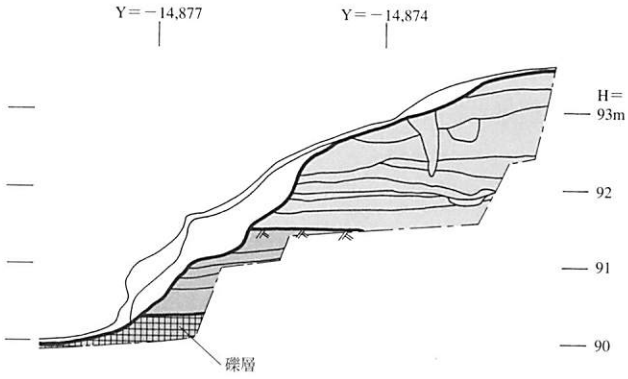



図90　C地区　c－c'　断面図（南から）1：100

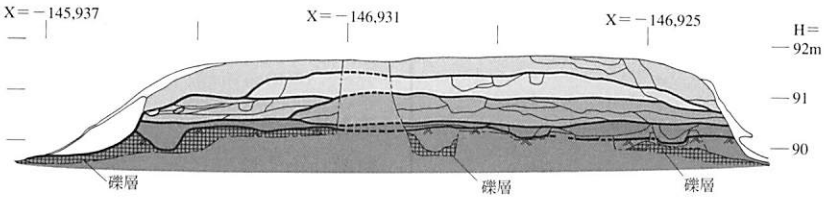



図91　D地区　d－d'　断面図（東から）1：150

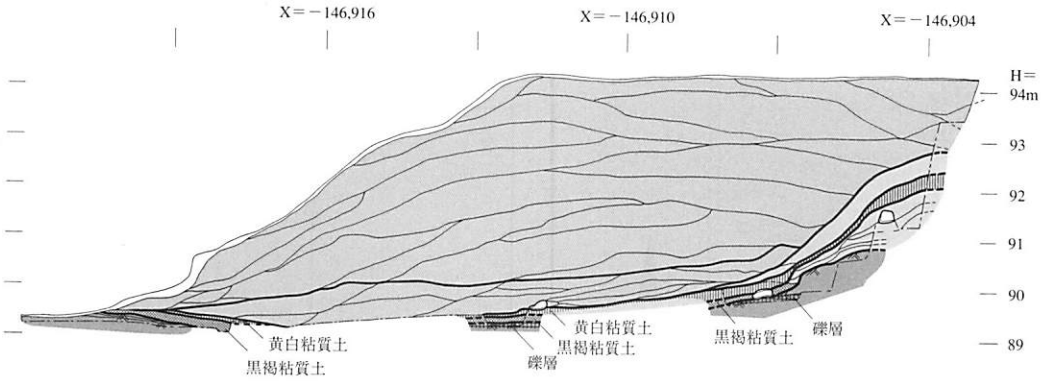



図92　E地区　e-e'　断面図（東から）1：150

# ◆平城宮北方遺跡の調査―第282-17次

**はじめに**　住宅改築にともなう調査である。調査地は、日葉酢媛命陵より尾根沿いに南へ約200m、北面大垣推定線より北へ約30mに位置する。本調査区の南隣には奈良時代の東西溝SD118を検出した第223-2次調査区（平成3年度）がある。また、本調査区を含む宮北方地域には、平城宮に関連する施設の存在が指摘されており、本調査では、この宮関連施設の検出を目的とした。

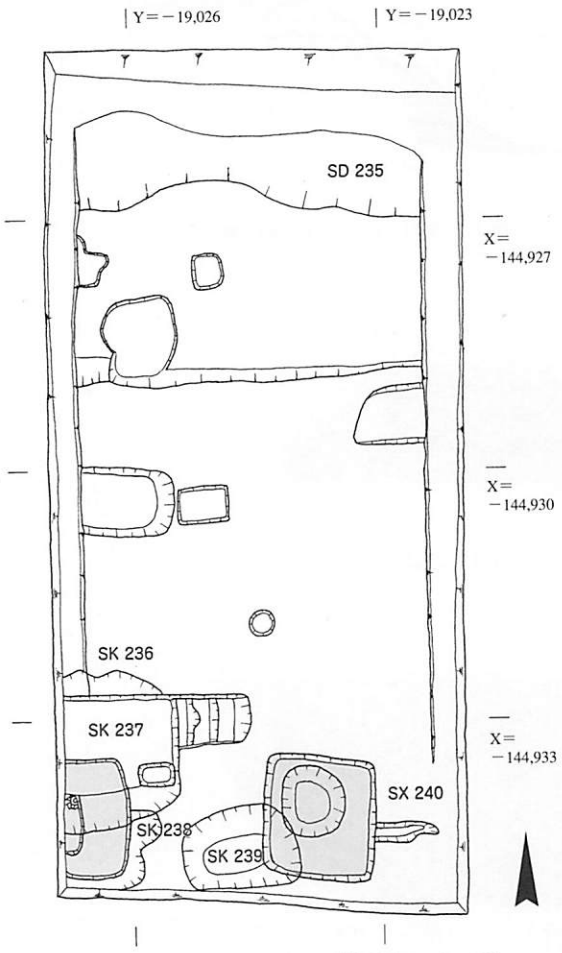



図93　第282-17次調査　遺構平面図　1：60

**検出した主な遺構**　調査区は中・近世以降より近代に至る数度の削平・攪乱を受けている。表土下には大量の建築廃材を含んでおり、これらの廃材を除去したところ、調査区北辺において、蛇行する溝SD235を地山面で検出した。この蛇行溝は遺物をともなわないため、年代があきらかでない。調査区中央では奈良時代の整地土を検出した。また、調査区南辺では、近世から近代の比較的大きな土坑がある。とくにSK237は階段状の構造を有しており、近代の防空壕ないしは地下式の倉庫であろう。これらの土坑埋土を除去したところ、下層に奈良時代の柱穴列SX240を検出した。本調査区内において、これに関連する柱穴列は検出されず、遺構の性格は不明である。柱間寸法は抜取穴の心心で約10尺である。

**出土遺物**　中・近世以降の土器が多数出土した。

出土瓦塼類は表19の通りである。軒平瓦6664Cは、柱穴列SX240の西側の柱抜取穴より出土した。

**まとめ**　奈良時代の遺構として、柱穴列およびその北側に整地土を検出した。本調査区の南に隣接する第223-2次調査区では奈良時代の東西溝を検出している。これらの遺構がどのように関連するのかは、現時点では不明だが、平城宮北方に宮関連施設が存在したことを示唆するものといえる。

（高妻洋成）

| 軒丸瓦 | | 軒平瓦 | | 丸瓦 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 型式　種 | 点数 | 型式　種 | 点数 | 重量 | 6.2kg |
| 近世巴 | 1 | 6644　C | 2 | 点数 | 59 |
| | | 型式不明 | 1 | 平瓦 | |
| | | 近世軒平瓦 | 5 | 重量 | 30.0kg |
| | | | | 点数 | 252 |
| | | | | 道具瓦 | |
| | | | | 鬼瓦 | 1 |
| 軒丸瓦計 | 1 | 軒平瓦計 | 19 | 近世割熨斗 | 1 |

表19　第282-17次調査　出土瓦塼類集計表

# ◆その他の調査

## 1　左京一条二坊十五坪の調査（第282-2次）

調査区は昨年度におこなった第269-1次、および第269-13次調査区の南方に位置し、法華寺によって条坊の乱れる東二坊大路の北延長部と、一条条間路の西延長部にあたる。本調査区の北辺が一条条間路の南側溝推定位置にあたるため、部分的に北に拡張した。検出した遺構は、2棟の掘立柱建物の西南隅部分と、中世の土坑、それ以前の井戸などで、条坊遺構は検出されなかった。また、建物はいずれも既調査区とはつながらない。本調査区は昨年度調査の所見（269-1・-13次調査『年報1997-Ⅲ』）どおり、通常の坪よりも大きな面積をしめる左京一条二坊十五坪の南東端の一郭としてよかろう。　（箱崎和久）

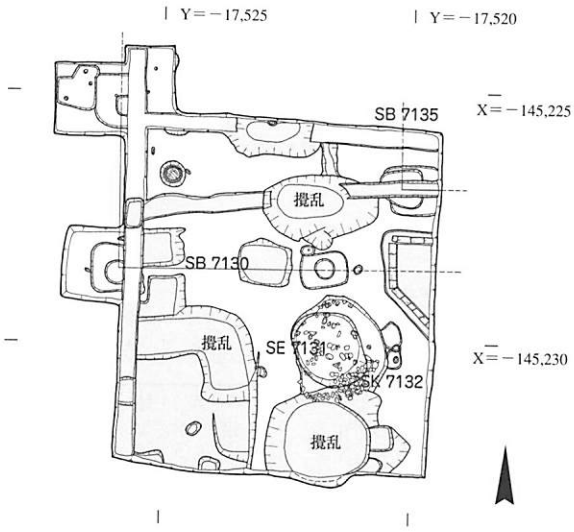



図94　第282-2次調査　遺構平面図　1：150

## 2　左京三条一坊二坪の調査（第282-4次）

事務所用ビル建設にともなう発掘調査。左京三条一坊二坪の東辺で坪中心より北によった位置にあたる。調査区は南北9m、東西11.6m。基本層序は上から耕作土、床土、灰褐土、灰褐粘質土、褐色砂（遺構確認面）。

奈良時代のものと考えられる総柱建物SB7150、掘立柱南北棟建物SB7153、南北塀3条、東西塀1条を確認した。このほか、性格・時期不明の置き石SX7157も検出した。SB7150は桁行・梁間ともに柱間6尺等間で南北3間、東西2間以上。SB7153は桁行・梁間ともに柱間6.5尺等間で桁行3間以上×梁間2間。SX7157は長さ・幅約80cm、厚さ約40cmの花崗岩2つを据付穴を掘って安置したもの。SB7150よりは新しい。

今回、比較的密に分布する小規模な建物と塀を検出した。これは坪の中心部から外れるという調査区の位置と関連するかもしれない。　（加藤真二）

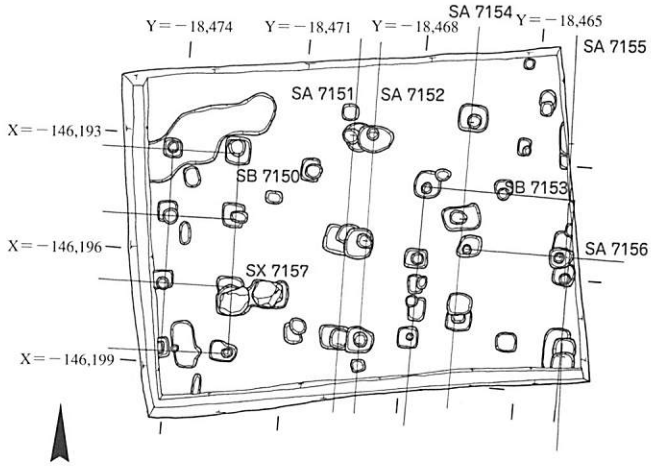



図95　第282-4次調査　遺構平面図　1：200

## 3　その他の調査一覧

平城宮跡発掘調査部が1997年度に実施した発掘調査で、本巻に掲載しなかったものを表20に示す。

| 調査次数 | 地　区 | 発掘区 | 検出遺構 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 282-1 | 右京三条一坊十六坪 | 東西３m×南北４m | 中世以降の溝・土坑など | 平瓦４点、丸瓦14点、塼１点 |
| 282-5 | 左京三条二坊六坪 | 東西７m×南北5.2m | 東西方向に並ぶ柱穴２基と南北溝１条<br>既調査区との関係から奈良時代の遺構 | 平瓦８点 |
| 282-8 | 右京三条一坊九坪 | 東西４m×南北７m | 掘立柱柱穴２基（時期不明） | 平瓦５点、丸瓦４点 |
| 282-9 | 宮北方遺跡 | L字型トレンチ（幅約３m、<br>東西2.8m×南北８m） | 浅い谷状をなす地山面の落ち込み<br>奈良時代の瓦片を含む整地土で埋め立てる | 平瓦69点、丸瓦23点 |
| 282-15 | 頭塔（史跡整備） | L字型トレンチ（幅約60cm、<br>東西5.9m×南北3.4m） | 第７段石積解体にともなう調査<br>第７段石積最下段部分を検出 | 軒平瓦6732Fa型式１点、<br>平瓦15点、丸瓦７点 |

表20　1997年度　その他の調査一覧表

### 平　城　専（こらむ）欄　④

◆『むれしか』100回

奈良県警察の月刊誌・『むれしか』の表紙裏に、発掘成果をもとにした原稿を掲載して９年の年月が経過した。平城調査部員が、400字以内という制限の中で書きつづってきた小論文は、平成10年の９月号で記念すべき第100回目を迎える。記念号の執筆ははたして誰の手に!?　（T）

| No. | 年月 | 表　題 | 執筆者 | No. | 年月 | 表　題 | 執筆者 | No. | 年月 | 表　題 | 執筆者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 90 5 | 役人の七つ道具 | 町田　章 | 35 | 93 3 | 木簡の筆跡鑑定 | 寺崎保広 | 69 | 96 2 | 井戸のはなし、みたび | 加藤真二 |
| 2 | 90 6 | 富をよぶお金 | 金子裕之 | 36 | 93 4 | 日本のピラミッド（頭塔） | 高瀬要一 | 70 | 96 3 | 反逆罪と財産刑 | 古尾谷知浩 |
| 3 | 90 7 | 奈良時代の鏡 | 杉山　洋 | 37 | 93 5 | 古代の寺参り | 山岸常人 | 71 | 96 4 | 奈良山の瓦工場 | 岸本直文 |
| 4 | 90 8 | 指紋と考古学 | 佐川正敏 | 38 | 93 7 | 呪いの人形 | 小林謙一 | 72 | 96 5 | 長屋王作宝楼 | 小野健吉 |
| 5 | 90 9 | 建物部材のひな形 | 松本修自 | 39 | 93 8 | 鳳凰紋鬼瓦 | 毛利光俊彦 | 73 | 96 6 | 掘立柱の柱穴 | 長尾　充 |
| 6 | 90 10 | 平城京の道路 | 小野健吉 | 40 | 93 9 | 橋の欄干をかざる擬宝珠 | 岸本直文 | 74 | 96 7 | 平城京の銅銭（和同開珎） | 臼杵　勲 |
| 7 | 90 11 | 平城京犯罪事情 | 舘野和己 | 41 | 93 10 | 奈良の鹿今昔 | 舘野和己 | 75 | 96 8 | ガラスを作ったルツボ | 川越俊一 |
| 8 | 90 12 | 奈良時代の情報処理 | 小池伸彦 | 42 | 93 11 | 平城宮東院庭園の植栽 | 内田和伸 | 76 | 96 9 | 籌（ちゅう）のお話 | 井上和人 |
| 9 | 91 1 | 隼人の盾 | 玉田芳英 | 43 | 93 12 | 造酒司の御井 | 浅川滋男 | 77 | 96 10 | 都に届けられた封戸の帳簿 | 山下信一郎 |
| 10 | 91 2 | 住宅の柱 | 小澤　毅 | 44 | 94 1 | 酒甕の封印 | 町田　章 | 78 | 96 11 | 柱根のこと | 長尾　充 |
| 11 | 91 3 | 少年犯罪の木簡 | 森　公章 | 45 | 94 2 | 二条山の石 | 加藤真二 | 79 | 96 12 | コロンボ警部の眼 | 高瀬要一 |
| 12 | 91 4 | 平城宮と京の下水道 | 本中　真 | 46 | 94 3 | 長屋王の御抱絵師が描いた蔡の下絵 | 巽淳一郎 | 80 | 97 1 | 木製遺物を保存する | 高妻洋成 |
| 13 | 91 5 | 正倉院建築のルーツ | 浅川滋男 | 47 | 94 4 | 修理司の瓦 | 次山　淳 | 81 | 97 2 | 「五十戸」の人々 | 金田明大 |
| 14 | 91 6 | 古代の品質管理 | 森本　晋 | 48 | 94 5 | 木簡と墨書土器 | 森　公章 | 82 | 97 3 | なにわ風のかわら | 清野孝之 |
| 15 | 91 7 | 羊を形どった硯 | 巽淳一郎 | 49 | 94 6 | 続・頭塔 | 小野健吉 | 83 | 97 4 | 文例集の削屑 | 渡邉晃宏 |
| 16 | 91 8 | 宮殿下に眠る古墳 | 岸本直文 | 50 | 94 7 | よみがえった大極殿 | 長尾　充 | 84 | 97 5 | 平城宮大極殿跡と朝堂院跡 | 内田和伸 |
| 17 | 91 9 | 役人の勤務評定 | 寺崎保広 | 51 | 94 8 | 古代、都人はうまい水を飲んでいたか | 小池伸彦 | 85 | 97 6 | 大極殿十分の一模型 | 西山和宏 |
| 18 | 91 10 | 庭の水と緑 | 高瀬要一 | 52 | 94 9 | 奈良時代の梵鐘 | 杉山　洋 | 86 | 97 7 | 木の鏃 | 小林謙一 |
| 19 | 91 11 | ものさし | 島田敏男 | 53 | 94 10 | 薬師寺は移建されたか | 岩永省三 | 87 | 97 8 | 妻を迎える木簡 | 玉田芳英 |
| 20 | 91 12 | 中国へ伝わった日本扇 | 中村慎一 | 54 | 94 11 | 見出しつきの文書の軸 | 渡邉晃宏 | 88 | 97 9 | 二七体目の石仏 | 岩永省三 |
| 21 | 92 1 | 平城京の鬼瓦 | 毛利光俊彦 | 55 | 94 12 | なぜ遺跡が地下に埋まっているのか? | 高瀬要一 | 89 | 97 10 | 病気退治の願い | 舘野和己 |
| 22 | 92 2 | 淡路島から運ばれた瓦 | 山崎信二 | 56 | 95 1 | 僧と尼 | 山岸常人 | 90 | 97 11 | 一木くり抜きの井筒 | 平澤　毅 |
| 23 | 92 3 | 奈良時代の盗難届 | 渡邉晃宏 | 57 | 95 2 | 奈良時代のゴミ | 臼杵　勲 | 91 | 97 12 | 古代の庶民住宅事情 | 蓮沼麻衣子 |
| 24 | 92 4 | 宇奈多理の杜 | 小野健吉 | 58 | 95 3 | 発掘調査に見る地震 | 玉田芳英 | 92 | 98 1 | とらのはなし | 加藤真二 |
| 25 | 92 5 | 建物を組み上げる | 上野邦一 | 59 | 95 4 | 屋根瓦 | 山崎信二 | 93 | 98 2 | 黒光りする焼物 | 川越俊一 |
| 26 | 92 6 | 最先端のベルト | 臼杵　勲 | 60 | 95 5 | 平城京の人口 | 寺崎保広 | 94 | 98 3 | 平城宮朱雀門の瓦 | 山崎信二 |
| 27 | 92 7 | どじなギャンブラー | 金子裕之 | 61 | 95 6 | 大安寺西塔跡の保存 | 内田和伸 | 95 | 98 4 | 奈良時代の住宅事情 | 古尾谷知浩 |
| 28 | 92 8 | 鏡の話（２） | 杉山　洋 | 62 | 95 7 | 東朝集殿と唐招提寺講堂 | 箱崎和久 | 96 | 98 5 | 石のカラト古墳 | 高瀬要一 |
| 29 | 92 9 | 平城宮の出っぱり | 小澤　毅 | 63 | 95 8 | 鉄で作った人形 | 小林謙一 | 97 | 98 6 | 日本人と履き物 | 田辺征夫 |
| 30 | 92 10 | 奈良時代のＩＤカード | 森　公章 | 64 | 95 9 | 古代の覚醒剤（シャブ） | 立木　修 | 98 | 98 7 | 古代のビーズづくり | 次山　淳 |
| 31 | 92 11 | 杯をはこぶ舟 | 高瀬要一 | 65 | 95 10 | 大極殿の転変 | 小澤　毅 | 99 | 98 8 | 頭塔下古墳の発見 | 金田明大 |
| 32 | 92 12 | 今昔住宅事情 | 藤田盟児 | 66 | 95 11 | 「封筒」としての木簡 | 舘野和己 | 100 | 98 9 | ? | ? |
| 33 | 93 1 | 輸入された陶磁器 | 玉田芳英 | 67 | 95 12 | 都の街路樹 | 平澤　毅 | 101 | | | |
| 34 | 93 2 | 季節を示す古代の種 | 佐川正敏 | 68 | 96 1 | 酒造りの建物 | 浅川滋男 | 102 | | | |

奈良国立文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN